NEWSLETTER

生態人類学会

ニュースレター
No. 20

THE SOCIETY FOR ECOLOGICAL ANTHROPOLOGY

2014 年 7 月 11 日発行

【研究報告】

□ トングウェ・ランドにおける動物知識の変容 ― マハレ周辺の人びとはどれだけ野生動物を知っているか（中村 美知夫） ・・・ 2
□ ニシゴリラのヒトリオスにみられる社会性（坪川 桂子） ・・・ 5
□ カバを漁（いさ）る人びと―ニジェール川の漁業民ソルコの生業と呪力をめぐる予備的報告（佐久間 寛） ・・・ 9
□ 多元的医療下にある南インド・ケーララ州における「伝統医」の役割と住民の治療選択行（松岡 佐知） ・・・19
□ バカ・ピグミーのゾウ狩猟者トゥーマ (tuma) の知識と葛藤（林 耕次） ・・・21
□ ソロモン諸島ロヴィアナにおける住民の森林利用と生物多様性との相互作用―社会経済的変化の下での文化的・生態学的保全への示唆（古澤 拓郎） ・・・24
□ 山間地における集落構造の現状と変遷―奈良県十津川村神納川の事例（渕上ゆかり・上須道徳・栗本修滋） ・・・25
□ 滋賀県余呉町に伝わる焼畑ヤマカブラの採種法、「下切り」について（黒田 末寿） ・・・29
□ 鮮魚行商人の地域的展開と現代における意義―香川県高松市域で活動する「いただきさん」を事例に（赤松 優） ・・・31
□ アカネとエリコができるようになったこと―猿回しのサルと調教師の相互行為（盛 恵理子・島田 将喜） ・・・35
□ 牧畜活動における在来生態知の習得と実践―ケニア・マサイの子どもの事例から（田 暁潔） ・・・38
□ モンゴル遊牧民候補は夏につくられる（風戸 真理） ・・・42
□ カツオ一本釣漁船団におけるパヤオ（浮魚礁）設置の操業効果―沖縄島北部地域を事例に（吉村 健司） ・・・49
□ インドネシア東部のパルミラヤシに依存する社会における乾季の生存戦略―生業・栄養・社会の分析から（廣瀬 崇幹） ・・・53
□ 島嶼環境における年長者の社会的役割と交易ネットワーク ―パプアニューギニア・ルイジアード諸島の事例から（門馬 一平） ・・・55
□ 島の「道」とカネ―ミクロネシア連邦ヤップ島社会における人々の生活と貨幣経済（町 聡志） ・・・60
□ コンゴ民主共和国における河川交易の実態―地域の内発的発展に向けて（高村 伸吾） ・・・65

【会計報告】 ・・・66
【インフォメーション】 ・・・67
第 19 回研究大会優秀発表賞について、新入会員情報、2014 年度の運営、第 20 回研究大会について
【編集後記】

【研究報告】

トングウェ・ランドにおける動物知識の変容 ―マハレ周辺の人びとはどれだけ野生動物を知っているか

中村 美知夫
京都大学野生動物研究センター

1. はじめに

タンザニア・マハレ山塊では、50 年近くにわたって、野生チンパンジーの研究がおこなわれてきた (西田ほか 2002; Nishida 2012)。研究初期には、この地域に暮らしていたトングウェの人々の生態人類学的調査もおこなわれ、彼らが深く自然に依存して暮らしている様子が詳細に記載されている (掛谷 1974; 伊谷 1977a など)。

トングウェは、バントゥー系の焼畑農耕民で、西部タンザニアのキゴマ・ムパンダ州にまたがる、約 2 万 km²の地域に分布する民族集団である (掛谷 1974)。民族語としてトングウェ語を用い、民族間の共通語としてスワヒリ語を使う。日本人研究者とトングウェとの関わりは古く、タンザニアでチンパンジーの研究を展開した伊谷純一郎は、1961 年以降トングウェの人々と付き合い、多くの集落を訪問している。そうした中でトングウェの系譜・狩猟・精霊信仰・動物観・罠の作り方・伝統医療などについての詳細な記述がなされている (伊谷 1977a)。そして、1971 年から 1972 年にかけて、掛谷誠がトングウェの集落に住み込み、生業・文化・伝統医療などについての生態人類学的調査をおこなった (掛谷 1974; Kakeya 1976 など)。これにより、トングウェが農耕民ではあっても、野生の動植物にも大きく依存した生活を送っていたことなどが定量的に示されている。

トングウェが伝統的な暮らしを営んでいたマハレ山塊では、掛谷の研究に先行して、1965 年から日本人によるチンパンジーの調査がおこなわれている (西田 1973)。ここでチンパンジーの餌付けが成功し、調査が本格化したことで、それまでに伊谷がおこなったような広域調査は次第に少なくなり、マハレでの集中的な調査が現在でも継続されている。トングウェの野生動植物に関する豊かな知識は、チンパンジー研究にも役立ってきた。たとえば、トングウェの人々はマハレ周辺に存在するほとんどの植物に個別のトングウェ名を付けており、その多くは学名と一対一対応する (Nishida & Uehara 1981)。現在でもマハレでは、研究者も調査助手もチンパンジーの食べ物となる植物などはトングウェ名で呼んでいる。また動物についてもトングウェは豊かな知識を有しており (伊谷 1977b)、野生動物の研究にそうした知識が活かされてきた。

しかしながら、1974 年の集住化政策および 1985 年の国立公園の成立、そしてさらには近年の急速な近代化によって、伝統的なトングウェの生活は大きく変容している。人々が野生動植物を利用する機会は減り、集住村で生まれ育った世代の人々からは、伝統的な知識が失われつつあるように思える。そこで、本研究の目的は、伊谷や掛谷がトングウェの調査をおこなった 1970 年代から 40 年あまりたった現在、彼らの動物認識の現状を大まかに把握することである。

2. 方法

調査地は西部タンザニアに位置するマハレ山塊国立公園近郊のカトゥンビという集住村である。さまざまな年代の 53 名 (男性 40 名、女性 13 名) のトングウェの人々と一人ずつ面談し、マハレに生息する 26 種の野生哺乳動物の写真を見せ、そのトングウェ名およびスワヒリ名の聞き取りをおこなった。聞き取りは原則スワヒリ語でおこなったが、状況に応じて調査

助手にトングウェ語で解説をしてもらった。動物の標準スワヒリ名については Mdee & Kiango (2008) によるスワヒリ語動物名辞書を、トングウェ名については伊谷 (1977b) を参照したが、これらに加えて現地で標準的に使われている名称も正解とした。

3. 結果

正答数には個人ごとに大きな違いがあり、もっとも多い人は、動物 26 種中トングウェ語で 25 種、スワヒリ語で 19 種を正しく答えたが、ほとんど答えることができなかった人もいた。スワヒリ語の正答数とトングウェ語の正答数は相関し、一方の言語で知っている人は、他方の言語でも知っている傾向があった。性別ごとでは、男性のほうが女性よりも平均正答数が多かった。一方の言語で名前を知っている人は他方の言語でも名前を知っている傾向があったが、20 代・30 代の男性の中には、スワヒリ名を知っているにもかかわらず、トングウェ名を答えられない人もいた。

サンプル数の多い男性について平均正答数を年代ごとに比べると、年代が高くなるほどトングウェ語での正答数が増える傾向があったが、スワヒリ語での違いは明確ではなかった。また、30 代まではスワヒリ語の正答数が多く、40 代以降はトングウェ語の正答数が多い傾向にあった。

動物種ごとに見ると、多くの人が知っている動物はチンパンジー、ゾウ、ブッシュバック、ヒョウ、ヒヒなどであるが、言語によって順位が若干前後する。どちらかの言語で知っている人数と動物の体重は正の相関を示し、大型動物ほどよく知られている傾向があった。「誤答」の傾向を見ると、大まかには同じ分類群の別種の名前を答える傾向があったが、一方で、センザンコウをワニ、ツチブタをネズミ、マングースとガラゴを混同するなど、分類群とはかけ離れた誤答も見られた。

4. 考察

明らかな性差があったことは、狩猟経験との関わりかもしれない。ただし、近年では男性でも狩猟をしている人は少ないので、そもそも動物に対する興味が違う可能性もある。世代による違いは、当初考えていたほどは明確ではなかったが、大まかには、若い世代でトングウェ語の動物名が失われつつある傾向が確認された。

チンパンジーの知名度が高かったのは、調査村が研究や観光などで雇用されている人がいる村であり、日常的にそうした名前が話題に上るからかもしれない。ゾウについては、その文化的重要性と関連しているのかもしれない。ゾウは伝統的にはトングウェにとって自然の脅威の象徴であり、「ブジェゲ」と呼ばれるゾウの悪霊を祓う儀礼があることが報告されている (掛谷 1982)。また、ブッシュバックについては、比較的身近な動物で、最近でも比較的狩猟対象となることが多いことが知名度が高かった理由かもしれない。

なお、今回「間違い」であった回答が、必ずしも本当にその人がその動物を知らないことには繋がらない点には注意が必要である。とくに、今回は写真という二次元のメディアを用いたことが、「誤答」の原因になっている可能性がある。たとえば、明らかに動物のサイズを誤認していると思われるケースが結構あり、こうした「誤答」は実際の動物と対峙した場合には生じ得ないと思われる。また、「類」として動物を答える際のカテゴライズの仕方や、どのように動物を「見誤る」かには、私たち日本人のそれとはかなり異なる傾向も見られた。

トングウェ語には、ほぼマハレの動物種と一対一対応する一次語彙素がある一方で、スワヒリ語には必ずしも対応する一次語彙素がない。おそらく、一般に、より身近な生き物ほど一次

語彙素で呼ぶ傾向があろうと思われるので、トングウェにとって、これらの動物はもともと身近なものであったのだろうと考えられる。そして今後も、人々がこの地域の動物と関わり合って生きていく限りにおいて、トングウェ名は有用であり続けるはずである。

今回の調査では、対象を哺乳動物だけに限定し、しかも名前を回答できるかどうかという点だけを調べたが、実際には動物名や植物名などの自然物を指し示す名前は、それ単独で存在しているものではなく、当然その名前が指し示す生物の属性や習性、利用方法、人々との関わりなどといったさまざまな周辺知識ともセットになっているはずである。それは、生態人類学が研究対象とする「人々と自然との関わり」の根幹にも当たる部分であろうと思われる。やや極端な言い方をすれば、そうした名前が失われていくということは、それに関する知識もまた失われるということを意味するのであろう。

動物名に代表されるような、トングウェによる自然に関する在来知がこのまま失われていくのかどうかは正直分からない。ただし、30 代以降で次第にトングウェ語が使われなくなっている現状、加速する近代化、若い世代におけるトングウェとしてのアイデンティティの低下などを鑑みると、すぐにではないかもしれないが、近い将来消えていく可能性は高い。今回多くのトングウェの人々と話をする中で、彼らの中にもやはりそうした知識が失われつつあることに懸念を感じている人々もいた。比較的若い世代にも、彼ら自身の文化を残していこうとする動きもある。

トングウェ・ランドの動物を対象として長い間研究をしてきて、彼らの動物知識に助けられ、感銘を受けてきた立場として、動植物名に代表されるような彼らの豊かな自然に関する知識が次世代に継承されるために出来ることは何なのかを今後も考えていきたいと思う。

謝辞

快く聞き取り調査に応じて下さったトングウェの皆様、調査を手伝って下さったラシディ・キトペニ、ブタティ・ニュンドー、シャバニ・カバングーラの各氏、調査に用いた動物写真を提供して下さった保坂和彦、座馬耕一郎、飯田恵理子の各氏に深く御礼申し上げます。本研究は「トヨタ財団 2013 年度研究助成プログラム」によっておこないました。

参考文献

伊谷純一郎. 1977a/1993.『チンパンジーの原野―野性の論理を求めて』平凡社ライブラリー.

–1977b/2008.「トングウェ動物誌」『伊谷純一郎著作集［第四巻］生態人類学の鼓動』平凡社.

Kakeya, M. 1976. Subsistence ecology of the Tongwe, Tanzania. *Kyoto University African Studies* 10: 143–212.

掛谷誠. 1974.「トングウェ族の生計維持機構―生活環境・生業・食生活」『季刊人類学』5(3): 3–90.

―1982.「ゾウの悪霊払い―原野に生きるトングウェ族の心」『季刊民族学』19: 30–41.

Mdee, J.S. and Kiango, J.G. 2008. *Kamusi ya Wanyama*. TUKI, Dar es Salaam.

Nishida, T. 2012. *Chimpanzees of the Lakeshore: Natural History and Culture at Mahale*. Cambridge University Press.

Nishida, T. and Uehara S. 1981. Kitongwe name of plants: a preliminary listing. *African Study Monographs* 1: 109–131.

西田利貞. 1973.『精霊の子供たち―チンパンジーの社会構造を探る』筑摩書房.

西田利貞・上原重男・川中健二 (編著) 2002.『マハレのチンパンジー ―《パンスロポロジー》の 37 年』京都大学学術出版会.

ニシゴリラのヒトリオスにみられる社会性

坪川 桂子
京都大学大学院理学研究科
日本学術振興会特別研究員

1. はじめに

ゴリラ属はニシゴリラ (*Gorilla gorilla*) とヒガシゴリラ (*G. beringei*) の 2 種に分類され、前者にはニシローランドゴリラ (*G. g. gorilla*) など 2 亜種、後者にはマウンテンゴリラ (*G. b. beringei*) など 2 亜種が含まれる。ニシローランドゴリラは果実の豊富なアフリカ低地熱帯雨林に生息しており、山地林に生息して主に地上性草本を採食するマウンテンゴリラとは大きく異なり、季節的な果実食性をしめす (Doran & McNeilage 2001)。生息環境や採食物の違いに影響されて、両者の遊動様式や日遊動距離も異なる (Yamagiwa et al. 2003; Doran-Sheehy et al. 2004)。こうした生態的特徴の種間変異が明らかにされてきた反面、ニシローランドゴリラの直接観察が難しいため、その社会的特徴については未解明な点が多かった。

ゴリラは基本的に単雄複雌群をつくり、性成熟に達すると雌雄とも出自群を離れる。オスは移出した後に単独生活をおくるが、メスは単独生活をおくることはせず群れやヒトリオスの間を移籍する (Robbins 2001)。群れ内の成熟オスが独占的にメスと交尾するため、ヒトリオスは他群のメスを獲得して群れを形成しないと繁殖できない (Robbins 1995)。

近年、群れ構造にも種間変異がみられることが明らかとなった。マウンテンゴリラでは、オスが成熟しても出自群にとどまるなどして形成される複雄複雌群の割合が約 4 割と高く、安定したオス・グループの存在もしられている (Yamagiwa 1987; Harcourt & Stewart 2007)。一方、ニシローランドゴリラの群れは 95%以上が単雄複雌群であり、複雄複雌群やオス・グループは稀である (Robbins et al. 2004; Harcourt & Stewart 2007)。これにはオスの繁殖戦略やオスどうしの個体間関係の違いが影響していると考えられるが、ニシローランドゴリラのオス間の社会関係に関する知見は限られていた。特にこれまで、ニシローランドゴリラのヒトリオスを追跡した研究はなく、ほぼ全てのオスが一度は経験する単独生活の実態が分かっていなかった。

マウンテンゴリラのヒトリオスは、他のヒトリオスと出会うことはほとんどなく、群れと出会った際には追随する行動をしめす (Yamagiwa 1986; Watts 1994)。生態的特徴や社会構造の異なるニシローランドゴリラでは、ヒトリオスをとりまく社会関係も異なるのだろうか。ニシローランドゴリラのヒトリオスを追跡して、群れや他のヒトリオスとの「出会い」を記述し、その実態を明らかにすることが本研究の目的である。

2. 方法

2.1. 調査地と対象

2012 年 1 月から 10 月にかけて断続的に計約 4 ヶ月間、ガボン共和国ムカラバ・ドゥドゥ国立公園において、ニシローランドゴリラを対象とした調査を行った。主な追跡対象は、観察者の存在に馴れた「ムル」と名付けられた成熟したヒトリオス 1 個体である。著者はアシスタントを伴って、ムルと 20m 以内の距離を保ちながら、日の出から日没まで追跡・直接観察を行った。

2.2. 『出会い』の定義

本研究では、ムルを追跡中の観察者が、約 100m 以内で群れの個体または他のヒトリオスをみた／音声をきいた事例を『出会い』と定義した (cf. Doran-Sheehy et al. 2004)。これに加え

て、チェスト・ビート (胸たたき) や咆哮などの長距離音声をきいた事例も『出会い』とした。本論においては、ムルが遭遇相手を目視した事例を「視覚的出会い」、音声が聴こえたが発声者の姿を目視しなかった事例を「聴覚的出会い」とよぶ。30 分以上の間隔があいた場合は別の事例とした。これらの事例の際のムルの行動や遭遇相手との社会交渉を野帳に記録した。また、出会いの相手がヒトリオスであったのか群れだったのかを、アシスタントに目視で確認させるか、音や痕跡から推定した。

3. 結果

調査期間中に合計 37 日間に渡ってムルを追跡した。そのうち 15 日間では、1 日に 10 時間以上ムルを観察できた。本調査期間中の総観察時間は 270.4 時間におよんだ。

ムルを追跡中に、合計 44 事例の出会いを観察した (表 1)。長距離音声をきいた事例を含めると、1 日に 10 時間以上追跡した 15 日間のうち 12 日間で、すなわちほぼ毎日、群れや他のヒトリオスと視覚的または聴覚的に出会っていた。44 事例の出会いのうち、100m 以上離れたところから音声がきこえた事例が 29 事例と 66%を占めた。100m 以内の距離で、ムルがヒトリオスと出会った事例は 4 事例 (すべて 20m 以内)、ムルが群れと出会った事例を 11 事例 (20m 以内: 2 事例、20–100m: 9 事例) 観察した。

表 1. ムルが出会った相手と距離

出会いの相手	相手との距離		
	<20m	20-100m	100m<
ヒトリオス	4		
群れ	2	9	4
不明			25
合計	6	9	29

3.1. ヒトリオスどうしの近距離での『出会い』

ムルと他のヒトリオスが 20m 以内の距離で出会った 4 事例では、すべての事例で、ムルは口を一文字に結んで背中をそらす (写真 1)、枝を投げて走る、樹の幹を叩いて走るなどの誇示行動をしめした。緊張した際に特徴的な体臭も強くなり、その後の移動速度が速くなるなどの変化もみられた。また、遭遇相手のヒトリオスも、どたばたと音をたてながら走る、チェスト・ビートなどの誇示行動をしめした。ただし、これらの誇示行動が、致傷的な敵対的交渉に至ることは無かった。

写真 1. 誇示行動 (口を一文字に結んで背中をそらす) をしめすムル。ムルがヒトリオスと出会った事例中に撮影 (2012 年 9 月 21 日)。

3.2. 群れとの近距離での『出会い』

ムルと群れが 20m 以内の距離で出会った事例を 2 事例観察した (事例 1)。どちらの事例においても、ムルは視界のきかない藪のなかに座って「隠れる」、「静かに歩き去る」などの行動をとり、誇示行動はしめさず、群れを追随することもなかった。

〔事例 1. ムルと群れとの近距離での出会い〕
15:23:50 ムルの北西 50m 以内から”ubobo!” (威嚇音声) がきこえる。ムルは採食をやめ、音声の方角をふりむいて注視した後、藪に移動して

座る。

15:29:23 ムルの 20m 以内から”ubo!” (威嚇音声) と、どたばたと走る誇示行動の音がきこえる。成熟オスやコドモが樹上で採食する様子がみえる。

15:29:41 ムルが立ち上がり、ふりむいて注視した後、40m 離れて座る。

15:45:55 ムルが立ち上がり、ときどきふりむきつつ、静かに 100m 以上歩き去る。

16:20:12 ムルが藪のなかで座って休息中に、ムルから約 60m の地点を群れが通り過ぎていく。

(2012 年 10 月 5 日)

3.3. 群れとの聴覚的な『出会い』

ムルを追跡中に、ムルから 20–100m 離れたところにいる群れの個体が発する音をきいた事例が 9 事例あった。そのうち、コドモの胸たたき (遊びの文脈と推定される) がきこえた事例が最も多く (5 事例)、その他に、成熟オスの穏やかな近距離音声 (1 事例)、コドモまたは乳児の叫び声 (1 事例)、採食中に枝を折る音など (2 事例) がきこえた。すべての事例で、群れの個体はムルの存在に気が付いていなかった。

ムルの反応は、「歩き去る」など相手から離れる行動が最も多く (5 事例)、その他に「相手に近づく方向へ移動」(1 事例)、「注視するのみ／明らかな反応を示さない」(3 事例) といった行動がみられたが、誇示行動は一度もしめさなかった。

3.4. 長距離の聴覚的な『出会い』

ムルを追跡中に、ムルから 100m 以上離れたところから長距離音声などがきこえた事例は 29 事例あった。そのうち、音を発したのが群れであると特定できたのは 4 事例であり、その他の遭遇相手は不明であった。成熟オスのチェスト・ビートがきこえた事例が最も多く (23 事例)、その他に、成熟オスの咆哮 (6 事例)、メスやコドモの叫び声 (2 事例) がきこえた (重複あり)。

ムルの反応は、「注視するのみ／明らかな反応を示さない」(19 事例) ことが最も多かったが、成熟オスの咆哮がきこえた 6 事例では、そのうち 5 事例で「歩き去る」などして相手から離れた。

長距離の聴覚的な出会いに際して、ムルが誇示行動をしめした事例を、ムルを追跡中に 1 事例のみ観察した。この事例では、ムルが日没の直前から深夜にかけて、群れの成熟オスまたは他のヒトリオスと交互に胸をたたきあっていた。

4. 考察

本研究は、ニシローランドゴリラのヒトリオスの個体追跡と直接観察に成功した初めての研究である。「単独生活」とは言うものの、長距離音声がきこえた事例も含めるとほぼ毎日、ムルは他のゴリラと『出会って』いた。100m 以内の出会いに限定しても、270.4 時間の総観察時間中に群れやヒトリオスとの出会いが計 15 事例みられた。これは、ニシローランドゴリラの群れが他群やヒトリオスと出会う頻度 (Mondika: 1 ヶ月間に平均 4.0 回) やマウンテンゴリラの群れが他群やヒトリオスと出会う頻度 (Virunga: 1 ヶ月間に 1 回以下) と比べて顕著に高い頻度である (Doran-Sheehy et al. 2004; Harcourt & Stewart 2007)。マウンテンゴリラと比較して、ニシローランドゴリラは個体数密度が高く、果実食に対応して日遊動距離も長いため、群れ間の出会いの頻度が高い (Yamagiwa et al. 2003; Doran-Sheehy et al. 2004)。また、地上性草本の再生に応じて遊動域をシフトさせるマウンテンゴリラとは異なり、ニシローランドゴリラは果実の結実に応じて同所を繰り返し

利用する (Watts 1998; Iwata & Ando 2007)。こうした遊動による要因に加えて、ムルは群れの遊動域のなかで「静か」に生息していたため、群れには気が付かれない出会いやヒトリオスとの「はちあわせ」も多く、出会いの頻度が高いのだと考えられる。

ヒトリオス同士がめったに出会わないマウンテンゴリラとは異なり、ムルは頻繁に他のヒトリオスと近距離で出会っていた。その際、ムルも相手のヒトリオスも互いに誇示行動をしめしていたが、致傷的な敵対的交渉には至らなかった。ニシローランドゴリラでは群れのほとんどが単雄複雌群であり、マウンテンゴリラと比べると群れに対するヒトリオスの割合も多いと推測される。ニシローランドゴリラでは複数のヒトリオスが群れの遊動域内に棲息しており、オス間の繁殖における競合が強い。ムルとヒトリオスの間でみられた誇示行動は、メスをめぐったライバルを牽制しあう行動であると解釈できる。

対照的に、ムルは群れと出会った際に、誇示行動もしめさなければ追随もしなかった。ヒトリオスは群れを追随する、群れの成熟オスと敵対的交渉をするなど、これまでマウンテンゴリラや、群れを追跡したニシローランドゴリラの研究から得られていた「ヒトリオス像」とは異なり、むしろムルは群れとの対面交渉を避けていた (Yamagiwa 1986; Watts 1994; Bermejo 2004)。出会いの頻度が高いため、そのたびに敵対的な交渉をするリスクを負う必要がないと考えられる。昼間は交渉を避ける一方で、ムルの遊動域のなかにある調査基地に滞在していると、ムルも含めた成熟オスどうしが約 1 時間半に渡って交互に叩きあうチェスト・ビートが、日没後から深夜にかけて数日毎に聴かれた (坪川 未発表データ)。昼間はひっそりと単独生活を送りながら、ゴリラがほとんど移動しないため直接的な敵対的交渉に発展するリスクが低い夜間には、チェスト・ビートによってメスやライバルのオス達に自己をアピールしているのではないだろうか。

5. 課題と展望

本研究によって得られた、ムルと他のゴリラとの出会いの実態は、「ニシローランドゴリラのヒトリオス像」としてどこまで一般化しうるのだろうか。本研究とは別の調査期間に、筆者が群れを追跡した際には、ムルよりも体サイズの大きいヒトリオスが、チェスト・ビートしながら群れを追随してくる『出会い』も観察した。ムルは 2008 年に初めて観察されたのだが、当時と比較して 2014 年には胸筋や咬筋も発達し、いまも成長段階にあるオスだと推定される。メスの視点でみると「ムルは本研究の様相のままで、いつかメスを得られる日が来るのだろうか」と心配になるが、本研究でみられたムルの行動はこうした成長過程のヒトリオスに特有な行動として位置づけられるかもしれない。

実際、2013 年から 2014 年にかけて、昼間に群れが近くにいるにも関わらずチェスト・ビートを発するムルの姿や、ゴリラとの敵対的な交渉によると推測される傷を負ったムルの姿がたびたび観察されている。研究大会での発表の際に、現地から「ムルがメスを獲得した」という情報を得たことに言及したが、本稿を執筆している時点では、「さらに傷を負って再びヒトリオスに戻った」という目撃談も得ており、動態が日々変化している状況が窺われる。ヒトリオスも含めたニシローランドゴリラの社会を包括的に解明するために、今後も、ムルがメスを獲得していく過程を継続的に観察する機会と、群れの追跡も含めてより多くのオスを観察する機会を得られることを希求してやまない。

参考文献

Bermejo, M. 2004. Home-range use and intergroup

encounters in western gorillas (*Gorilla g. gorilla*) at Lossi Forest, North Congo. *American Journal of Primatology* 64: 223–232.

Doran, D.M. and McNeilage, A. 2001. Subspecific variation in gorilla behavior: the influence of ecological and social factors. In: Robbins, M.M., Sicotte, P. and Stewart, K.J. (eds.) *Mountain gorillas: three decades of research at Karisoke*. pp. 123–149. Cambridge University Press.

Doran-Sheehy, D.M., Greer, D., Mongo, P., and Schwindt, D. 2004. Impact of ecological and social factors on ranging in western gorillas. *American journal of primatology* 64: 207–222.

Harcourt, A.H. and Stewart, K. 2007. *Gorilla society: conflict, compromise, and cooperation between the sexes*. University of Chicago Press.

Iwata, Y. and Ando, C. 2007. Bed and bed-site reuse by western lowland gorillas (*Gorilla g. gorilla*) in Moukalaba-Doudou National Park, Gabon. *Primates* 48: 77–80.

Robbins, M.M. 1995. A demographic analysis of male life history and social structure of mountain gorillas. *Behaviour* 132: 21–47.

—2001. Variation in the social system of mountain gorilas: the male perspective. In: Robbins, M.M., Sicotte, P. and Stewart, K.J. (eds.) *Mountain gorillas: three decades of research at Karisoke*. Cambridge University Press. pp. 29–58.

Robbins, M.M., Bermejo, M., Cipolletta, C., Magliocca, F., Parnell, R.J. and Stokes, E. 2004. Social structure and life-history patterns in western gorillas (*Gorilla gorilla gorilla*). *American Journal of Primatology* 64: 145–159.

Watts, D.P. 1994. The influence of male mating tactics on habitat use in mountain gorillas (*Gorilla gorilla beringei*). *Primates* 35(1): 35–47.

–1998. Long-term habitat use by mountain gorillas (*Gorilla gorilla beringei*). 2. Reuse of foraging areas in relation to resource abundance, quality, and depletion. *International Journal of Primatology* 19(4): 681–702.

Yamagiwa, J. 1986. Activity rhythm and the ranging of a solitary male mountain gorilla (*Gorilla gorilla beringei*). *Primates* 27(3): 273–282.

–1987. Intra- and Inter-group interactions of an all-male group of Virunga mountain gorillas (*Gorilla gorilla beringei*). *Primates* 28(1): 1–30.

Yamagiwa, J., Kahekwa, J. and Basabose, A.K. 2003. Intra-specific variation in social organization of gorillas: implications for their social evolution. *Primates* 44: 359–369.

カバを漁(いさ)る人びと—ニジェール川の漁業民ソルコの生業と呪力をめぐる予備的報告

佐久間 寛
東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

1. はじめに

アフリカ第三の大河ニジェールの流域は、栽培植物の変異集積地であること、とりわけ世界的にみてもユニークな稲作が営まれてきたことで知られる地域である。わたしは、2004 年から 07 年にかけてこの大河の名を国名とする共和国でフィールドワークをおこない、稲作農耕民の世界について研究をすすめてきた。とくに注目したのが土地制度であり、この制度が引き寄せた外来者を定住化・農耕民化させるメカニズムとして編制されている点を明らかにしようと試みてきた (佐久間 2013)。

一方、本稿で主題化を試みるのは、農耕民ではなく、漁業民の世界である。調査当初わたしには、同地一帯の「漁業民 *sorko*」が土地制度に絡めとられた外来者の典型であるように見

えていた。現に、いまや漁業を放棄し農業のみを営んでいる者は少なくなかった。だが、じつをいえば彼ら／彼女らは完全に農耕民化していたわけではなかった。ふだん漁業に従事しているわけではない人びとが、ある日突如として漁業民と化す出来事が現にあった。後述するカバ狩りである。しかもそうした様子は、周囲の人びとから当然のものとして受容されていた。つまるところ彼ら／彼女らは、農耕民化され尽くされぬ独特の「漁業民的なもの *sorkotarey*」を有していたのである。

本稿の目的は、現在手元にある資料を手がかりに、この漁業民的なものとは何かを明らかにすることである。この作業からはさらに、ニジェール川という生態環境を介した漁業民と農耕民の「共生的関係」(安渓 1986) をめぐる研究の展望が拓かれてくることが予想される。本報告は、そのための第一歩としたい。

2. ニジェール川における漁業

2.1. 漁師としてのソルコと漁具

ニジェール共和国西部はソンガイ語を母語とする人びとが多数住む地域である。この言語において漁業が"sorkey-goy"、つまり「ソルコの仕事」といわれ ("sorekey"は"sorko"の複数定型)、「漁に行く」ことが「ソルケイに行く *koy sorkey*」と表現されることからもうかがえるように、そもそもソルコとは、普通名詞の水準で漁業と密接にかかわる概念である。この場合のソルコとは、おおむね「漁師」といった意味をもつ。

では漁師としてのソルコとはいかなる者か。一例として、わたしの依頼を受けて日々のつれづれをソンガイ語で記してくれた調査集落の青年ハッサンの記述を引用しよう。

> わたしたちのこの集落一番のソルコはクール〔人名〕です。なぜなら彼は、筌、延縄、刺網、舟、櫂、棹をもっているからです。
>
> (ハッサン、2006 年 1 月 20 日)

ハッサンは、筌、延縄、刺網、舟、櫂、棹といった漁具をもっていることを理由に、クールという人物を集落一番のソルコと評している。つまりソルコとは、これらの漁具を用いて魚を獲る人だ、ということになる。

写真 1〜4 は、調査地一帯で用いられていた代表的漁具である。ハッサンはさらに、これらの漁具のなかでとくに「ソルコの命 *sorkey baafuna*」といえるのが刺網と延縄だと述べている (ハッサン、2006 年 1 月 23 日)。これは刺網と延縄が、筌や投網に比べて特殊な技術を必要とすることに基づいている。逆にいうと、これらは漁業に力をいれていない者に不人気の漁具である。たとえば調査集落においては、写真 1〜4 の漁具のうち近年もっとも普及していたのは投網だった (23 世帯中 9 世帯が所持)。空いた時間を用いて、誰でも比較的簡単に魚を獲ることができるというのが普及の理由だった。一方、特定の世帯に数多く所持されていたのは、小型の筌だった (23 世帯中 7 世帯が所持)。投網のようにただちに魚が獲れるわけではないものの、刺網や延縄よりは手軽におおくの魚が獲れることが普及の理由だった。

写真 1. 筌 *guuru*

写真 2. 延縄 *delbu*

写真 3. 投網 *birji*

写真 4. 刺網 *bilili*

2.2. 専門的漁師としてのソルコ

このように説明すると、人びとが漁業にあまり熱心ではないとの印象が招かれるかもしれないが、こうした人びとの態度には理由がある。調査集落の住民が原則として農業で生計をたてる農民であり、その合間をぬって漁業を営んでいたことである。ハッサン青年が「偉大なソルコ」と述べたクール氏にしたところで基本的には農民である。この集落のなかで漁業を中心に生計をたてていたのは、2 世帯にとどまる。

そこで漁業を生業の中心にした世帯に焦点をあてて、いますこし議論を深めておくことにしたい。

ハリ (仮名) は、隣国マリ出身で、1980 年代末に調査集落に移住してきた専門的漁師である。彼のもとで漁師の見習いをしている家長が一人おり、彼がこの集落に住むもう一人の専門的漁師である。わたしはハリに依頼して、彼がどんな魚をどの程度獲っているのか、2006 年 6 月から 11 月までの約 5 カ月間記録した。

まず魚の種類についてであるが (表 1)、よく獲れるのは、アロワナやカラシン、スズキやナマズの仲間である。このうちとくに言及しておく必要のある魚がふたつあり、ひとつは映画『ダーウィンの悪夢』で一躍有名になったナイルパーチ (学名 *Lates niloticus*) である。ニジェール西部でこれは「あらゆる魚の父」といわれ、もっとも美味であるという理由から、市場では他の魚の倍の値段がつく。いまひとつは、ソンガイ語でデーシと呼ばれるナマズ目ヒレナマズ科の魚 (学名 *Heterobranchus bidorsalis*) で、こちらは食物禁忌とされることがすくなくないため、ナイルパーチとは逆に他の魚の半額で取引されている。

図 1 は、ハリによる漁獲量とそこから得られたであろう収入の推移を記録したものである。ハリはおもに筌を使った漁をしており、しかけた筌を 1〜2 日後に回収するという方法をとっていた。一回獲ると次に収穫可能になるまで一定期間を要するらしく、グラフからは、大漁があると次に不漁となるパターンがおおかったことが確認できる。11 月 29 日に突出して大漁の日があるが、これはガソリン駆動のポンプを使って沼の水をすべてぬき、根こそぎ魚を獲るという漁をおこなったことに由来している。そうそうおこなえる漁ではなく、例外的といえる漁である。

表 1. ハリが水揚げしたおもな魚 (2006 年 6 月～11 月)

分類	学名	ソンガイ語名	和名・英名 (特徴)
アロワナ目 Gymnarchidae	Gymnarchus iloticus.	gonay	ジムナーカス
アロワナ目 Mormyridae	Mormyrus macrophthalmus etc.	waasi	エレファントノーズフィッシュ (発電器官をもち、これによりエサを探す)
	Mormyrus rume.	waasi-fuura	
	Mormyropos deliciosus.	yollo	
カラシン目 Alestidae	Hydrocyen brevis.	zawey	タイガーフィッシュ (その名のとおり鋭い歯をもつ)
	Alestes dentex senthente, A.baremoze soudanienisis.	angari, gari, kalankasi, sofo, ansofo	
カラシン目 Distichodontidae	Distichodus brevipinnis	da, daariya	
コイ目コイ科 Cyprinidae	Labeo spp.	du	
スズキ目アカメ科 Latidae	Lates niloticus.	keyrow, kerimiize	ナイルパーチ (「あらゆる魚の父」とされ、もっとも美味とされる。価格も一般の魚のおよそ 2 倍)
スズキ目カワスズメ科 Cichlidae	Sarotherodon, Oreochromis, etc.	fotoforo, barra	イズミダイ、ティラピア
スズキ目タイワンドジョウ科 Channidae	Parachanna obscura.	Korombo (kolomb)	ライギョ
ナマズ目 Auchenoglanididae	Auchenoglanis occidentalis, A. biscutatas.	dibar	
ナマズ目 Claroteidae	Clarotes laticeps	boŋtarba	アフリカンビッグマウスキャット
ナマズ目ギギ科 Bagridae	Bagrus sp.	dewa	
ナマズ目サカサナマズ科 Mochokidae	Synodontis spp.	jijiri, bandabandakazi	サカサナマズ
ナマズ目スキルベ科 Schilbeidae	Schilbe mystus.	nanaaci	
ナマズ目デンキナマズ科 Malapteruridae	Malopterurus electricus.	hani	デンキナマズ
ナマズ目ハマギギ科 Ariidae	Arius gigas.	jagey	巨大ナマズ
ナマズ目ヒレナマズ科 Clariidae	Heterobranchus bidorsalis.	deesi	(ソルコに潜水の力を与えた魚とされ､すくなからぬ者にとり食物禁忌｡価格は一般の魚のおよそ半値)
フグ目フグ科 Tetraodontidae	Tetraodon lineatus.	taalibomboŋ	
ポリプテルス目 Polypteridae	Polypterus sp.	ngondo	(多鰭魚とも呼ばれる古代魚)
レピドシレン目 Protopteridae	Protopterus annectens.	siibi	アフリカハイギョ (古代魚の一種で繭の中で冬眠)

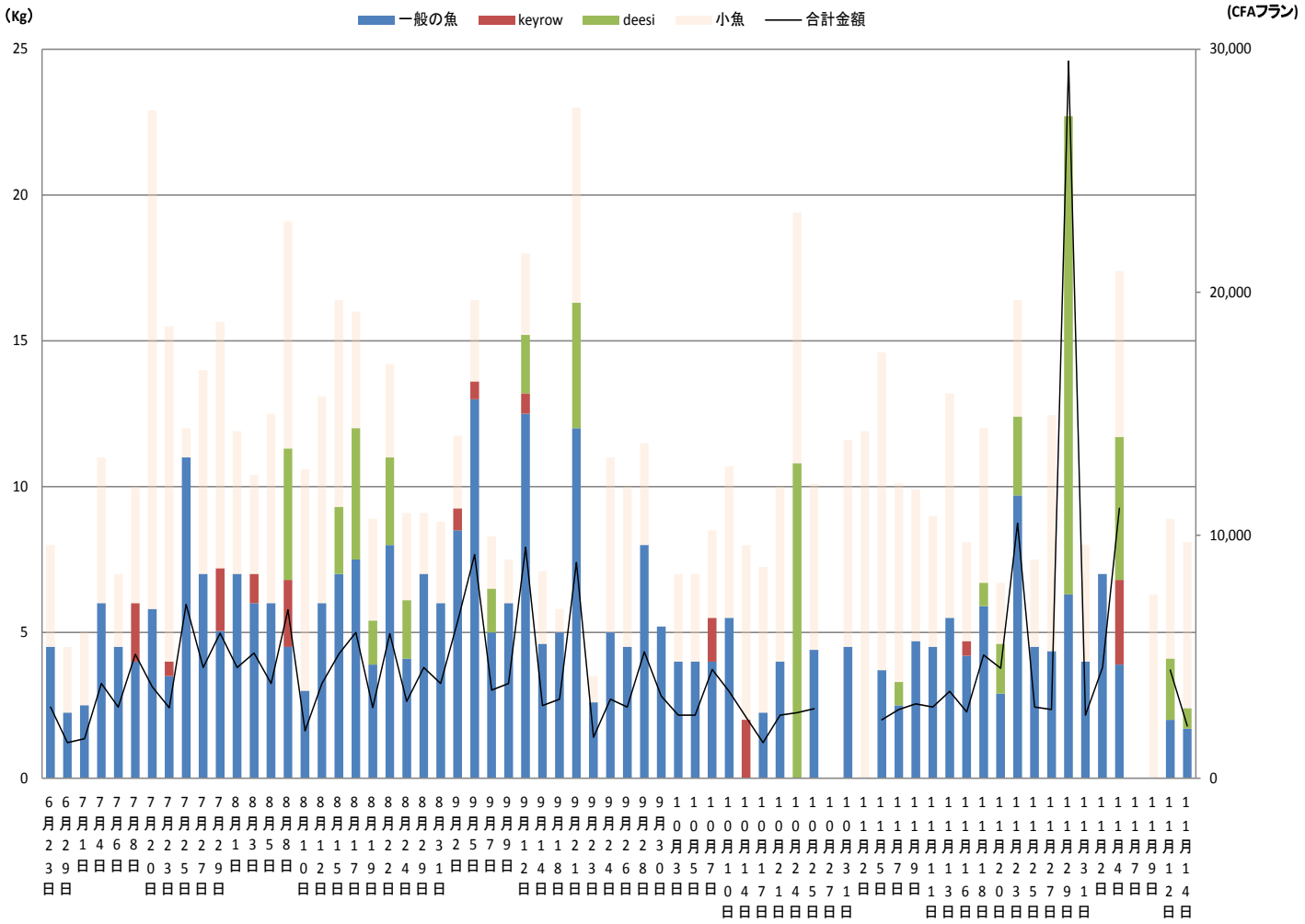

図 1. ハリによる漁獲量の推移

ハリのように専門的に漁業に従事している漁師は、街でフライを販売している女性に魚を売却することで収入を得ている。彼は日々の売上がいくらであったかを教えてくれなかったが、魚の重量と相場から推計してみるかぎり、わたしが記録した 164 日間のあいだに 29 万 CFA フラン (約 5 万 8 千円) ほどの売り上げがあったことになる。ニジェールの小学校の教員の月給がおよそ 4 万 CFA フラン (約 8 千円) である点をふまえると、この稼ぎはけっして悪くない。

とはいえ、ただちに補足を要するのは、漁業に特化することには、すくなからぬリスクがともなうという点である。まず、魚の買い手との交渉は相場どおりにいかないことが珍しくなく、交渉次第で買いたたかれてしまうという問題がある。また、わたしが調査したのはちょうど増水期にあたるが、これは比較的魚が豊富とされる時期で、渇水期にはより極端な不漁が起きるという問題がある。怪我や病気で漁に出られない場合も、当然収益はゼロとなる。

さらに見落とせないのは、漁業はあくまで副次的な仕事であり、本業にすべきではないという価値観が農耕民のあいだにある点である。たとえば、ハリのもとで見習いをしていた人物の妻が家出をするという出来事があった際、この

妻は、夫が農業に従事することを約束せぬかぎり家に戻らなかった。

要するにこの地域では、漁業によって高収入を得ることはかならずしも不可能ではないものの、その収入を維持し、生活を成りたたせていくことには困難がつきまとうのである。

3. 漁師以上の何かとしてのソルコ

以上では漁師としてのソルコについて見てきた。ところがソルコにはこれとは異なる意味がある。以下は代表的なソンガイ語の辞書のソルコに関する記載である。

「漁業カースト、ファランの末裔」(Bernard & White-Kaba 1994)。

「漁業カースト、ボゾ (漁撈民族)」(Heath 1998)。

「(1) 魚を獲る人の職能集団で、水中のことはすべて知っている。(2) この集団の子孫。」(Isufi 1998)

このように、辞書などを参照したときに見いだされるソルコとは、単なる漁師ではなく、民族あるいは職能集団なのである。

この意味でのソルコにはさらにふたつの系統がある。ひとつはニジェール川上流のマリから移住してきたとされるソンガイ語を母語とするソルコの集団であり、もうひとつは下流のナイジェリア付近から移住してきたハウサ語を母語とするソルコである。ソンガイ系のソルコはいまや農耕民化してしまった人びとが大多数であるのにたいし、ハウサ系のソルコは現在も漁業で生計をたてている。それを可能にしているのが魚の加工法である。彼らは魚を長期保存可能な燻製 (bandam) に加工する。こうして蓄えた魚を年に一度ハウサ語圏 (ニジェール南部やナイジェリア北部) まで売りに行き、多大な収益収入をあげている。

とはいえ、こうした相違にもかかわらず、ふたつのソルコにはひとつの共通点がある。すなわち、ファラン・マカ・ボーテ *Faraŋ Maka Boote* という人物を共通の祖先とし、この伝説的始祖から川をめぐる特殊な知識、技術、呪力、呪物を代々「相続・継承 *tubu*」してきたとされる点である。この脈絡において重要な意義を帯びることになる漁具こそが刺突具である。写真 5 にあるとおり、刺突具とはいってもいくつか種類があり、対象となる獲物にもいくつか種類がある。しかしながら、このなかでも別格の重要性をもつ刺突具があり、獲物がある。それこそが銛によるカバ狩りにほかならない。

写真 5. 刺突具 (一番下が「銛 zoogu」)

銛によるカバ狩りは、ニジェールの漁業民が専門とするもののひとつである。ソモノ、ボゾ、ソルカワあるいはヌパワといった諸民族もこの専門的な漁をすることで知られているが、なかでも最も優れているのが、湾曲部北部のソンガイ系漁業民ソルコである。じっさい、前掲の諸民族は、結局のところ網、筌、釣り針を用いて漁をする人びと、つまりは魚を獲る漁師であるが、これにたいしてソルコは、もっぱら銛を用いて、何種かの大型の魚や、マナティー、ワニ、なによりカバを獲る人びとなのである。

(Rouch 1997 [1948]: 63. 強調点引用者)

なぜなによりカバ (学名 *Hippopotamus amphibius*、ソンガイ語名"baŋa") なのか。最大の理由は、この大型の草食ほ乳類がきわめて危険な動物である点にもとめられる。ある動物学者によれば、「見た目が穏和であるとはいえ、カバが最も危険なアフリカの動物の一種であることにかわりはない」。「時速 45km で疾走し、頭突きし、噛みつく」カバは、「多数の死亡事故の原因である」(Lamarque 2004: Fiche14)。先述のハッサン青年もまた次のように記している。

> あなたが見ているわたしたちのこの川では、川岸にたどり着くまでのあいだ、カバほど恐ろしいものはありません。この川にカバが来ていなかった頃、たとえ夜であっても、〔…〕そのような思いをすることはありませんでした。ところが現在はというと、西岸に行くとなると、なによりカバを恐れることになります。
>
> (ハッサン、2006 年 1 月 30 日)

ハッサンによれば、「この川では、カバほど恐ろしいものはない」。なにより恐ろしいのは、水中のカバの存在にきづかずボートで近づいてしまい、襲われてしまうことである。とりわけ夜、ニジェール川を渡ることには大変な危険がともなう。

しかもこの証言に示唆されているとおり、こうした危険性は、カバの個体数が増加したために近年高まっているようである。フランス植民地期以来ニジェールでは、野生動物の保護の観点からカバをはじめとしたほ乳類を狩ることは禁止されているが、その結果逆にカバが増加した可能性があることを、ルーシュは半世紀前に報告している (Rouch 1997 [1948]: 73)。さらにニジェール独立後には、1960 年代以降にサハラ砂漠南縁地帯で干ばつが相継いだことにともない、カバの生息地が上流のマリ東部から下流のニジェール西部に移動した。そのうえ 1980 年代に牛耕が本格化した結果 (佐久間 2014)、ウシの飼料作物として「ブルグ (学名 *Echinochloa stagnina*)」というイネ科の作物の栽培が拡大したが、これはウシばかりでなくカバの大好物でもあった。

こうした環境変化を理由に個体数が増加した結果、カバが舟を転覆させるという事故は、以前から起きており、いつか死者がでると噂されていた。そして、起こるべくしてその事故がおきた。

カバ狩りの報告に移る。

4. カバ狩り

2006 年 4 月 5 日、調査村ガーロコイレ村の住民が雌カバに襲われ死亡した。首都の治水林野庁 (野生動物の保護と駆除を担当) に出動要請がだされ、検死を経て、カバ狩りがおこなわれることになった。この地域では、ルーシュが半世紀前に組織して以来となる、公のカバ狩りであった。

4 月 8 日 9:00 頃、ガーロコイレ村周辺のソルコが事故現場に集結した。10 : 00 頃、治水林野庁の保護官も到着、探索の末、正午に標的が発見された。見物客が川辺を埋め尽くすなか狩りがはじまった。ソルコは舟の上から銛で、保護官は岩場から銃で標的を狙うも (写真 6、7)、結局のところ失敗に終わった。

翌日、カバは事故現場から下流約 6km の地点に移動していた。それを発見したのが正午頃だった。前日と同様の方法で狩りがおこなわれたが、この日も標的は仕留められなかった。協議の結果、治水林野庁の保護官は首都に戻り、ソルコのみで狩りをつづけることになった。

写真 6. 銛を構えるソルコ

写真 7. 銃を構える保護官

その翌日、今度は事故現場から上流約 10km の地点でカバが発見された。ただしこの日は前日までとは異なり、まだ「準備」が整っていないという理由で、なかなか狩りははじまらなかった。準備をおこなっていたのは、「女のソルコ」だったという。狩りがはじまったのは、日没まで 1 時間をきった 18:00 頃だった。また、それまでの狩りは、人だかりの大歓声のなかでおこなわれていたが、この日はみな極力声を出さないこと、とりわけ狩りに参加する者は、断食をすることが命じられた。それらはすべて女のソルコの指令だったらしい。そのおかげであろうか。9 本目の銛がついに標的の眼に刺さった。

この日のカバ狩りの様子を助手が動画に収めてくれていた。銛をもったソルコたちがカバのいる水面を取り囲み、静かにその時をまつという時間がしばらくつづいた。これにたいしてカバに銛が刺さった瞬間、一人の男が大声を発している様子が動画に捉えられていた。現場のわたしは、銛がはじめて刺さって興奮しているのだろうと推測していた。ところが、そうではなかった。

ここで「銛」についての踏みこんだ説明をほどこしておく。ニジェール西部ソンガイ系社会における銛には、名前と人格があり、雌雄の区別がある。要するにそれは、呪物である。先ほど見たように銛以外にも刺突具はあるが、こうした特徴をもつのは、3 つあるいは 4 つの逆刺を備えた「銛 *zoogu*」だけである。

次に銛がカバに刺さった際に発せられた声であるが、これは刺さった銛を褒め称える定型化された語りだった。この語り (あるいは語る所作) をソンガイ語では「ザンム *zanmu*」という。「栄誉名、クラン名」を意味するバンバラ語“jam ”に由来する語であるが、言葉自体が力をもつ「呪文 *me-senni*」とは異なり、対象である銛を称え、鼓舞することがザンムの目的である。そうすることによって気持ちを鼓舞された銛は、ふかくカバの体内に入るのだとされる。

では具体的にどのような言葉で誉めていたか。刺さった銛は、「ハリカンバ *Harikamba*」という名であった。ザンムはハウサ語で行われたのであるが、助手のソンガイ語訳によると、「ハリ・カンバの口、ハリ・カンバがとぎ汁を受けとめた」という言葉が発せられていた。これだけでは意味不明であるが、じつはこれと同名の銛について、ルーシュが次のザンムを記録している。「ハリ・カンバ、それは男どもの中にひとりいる女／ペニスをもつ女、男を犯す女」(Rouch 1997 [1945]: 110)。ハリカンバがペニスをもつ女だとすると、白く濁ったとぎ汁を受けとめることが何を意味するかも想像できそうである。

しかし、のちに狩り参加者が語ったところによると、このザンムはじつは間違いだった。それは、「男の銛」(3 つの逆刺をもつ) が刺さったときの褒め方であり、「女の銛」(4 つの逆刺をもつ) であるハリカンバを誉めるために使ってはいけなかった。ゆえに、いったん刺さった銛は、その後抜けてしまったのだった。

いずれにせよ、この日標的のカバは仕留められることなく、仕留められたのは体調 170cm 生後 1 歳に満たない子カバ (雌) だった (写真 8)。

写真 8. 狩られた子カバ

翌日子カバは解体され、肉は配分された。肉を優先的に得たのは狩りに参加したソルコであったが、そのうち一部は、狩りに一度も参加しなかった人びとのもとに届けられた。その宛先のひとつこそが、口を閉じて断食するよう命じた「女のソルコ」であった。その後、あるソルコが説明してくれたところによれば、彼女はソルコではなく「川の主」なのだった。彼や彼女はソルコとは別の形で、川ではなく陸から、銛によってではなく、呪術を通じて狩りに参加していたのだった。

川の主とは指導者だ。たとえばカバ狩りで、川の主は舟にのることも、銛で突くこともなかったが、それはこれらが「ソルコの仕事 (漁業 *sorkey-goy*)」だからだ。川の主はというと、ソルコたちがカバを突いているときも陸にいて、カバに、潜らぬよう、逃げぬよう、舟を転覆させぬよう、人を噛まぬよう命じる。すべて呪術だ。

(ムーサ、2006 年 6 月 25 日)

その後について簡潔に説明しておく。子カバを仕留めた後、元来の標的だった母カバ狩りが継続しておこなわれ、最終的には 5 月 17 日に母カバも仕留められた。ただし子カバの時とは異なり、複数の集落に居住するソルコが集結して狩りをおこなったわけではなかった。

5. まとめと考察

本報告で見てきたように、ソルコには、単なる漁師という意味と、民族あるいは職能集団としての意味がある。第一の意味でのソルコには誰もがなりえるが、漁業だけで生活を営むことは容易ではなく、農耕民化をうながす社会的圧力にさらされることになる。第二の意味でのソルコとは、祖先から川をめぐる特殊な知識・技術・呪物・呪力を受けついできた人びとであり、第一の意味では明らかにソルコではない農民や商人や主婦もこの意味での「ソルコ」となりえる。じっさいカバ狩りに参加したのは、第二の意味のソルコであり、第一の意味のソルコではなかった。たとえば本稿の前半でふれたハリという漁師は、漁業を生業にしているとはいえ、銛を持っているわけではなく、それゆえカバ狩りには参加しなかった。

ところで現代ニジェール西部において、この第二の意味でのソルコとは、なかなか公の場に姿をあらわすものではない。この農村社会はムスリム社会でもあるが、たとえば銛という漁具を人格化するといった考え方は、いわゆる偶像崇拝を禁じたイスラームの規範と鋭く対立する。ゆえに第二の意味でのソルコ的なものは、たしかに昔はあったらしいが、いまや廃れてし

まったなどと説明されがちなのである。それが現実の一面をしめすにすぎないことを証したのが本稿でとりあげたカバ狩りだったといえる。

この点からして興味深いひとつのエピソードがある。子カバが仕留められた後の金曜礼拝の際、あるマラブー (イスラームの指導者) が、カバ狩りをつうじて配分された肉を、イスラームの作法にのっとっていない不浄な死肉、ハラームであると主張して、人びとの笑いものになったのである。人びとにとってカバとは、魚とおなじく「川のもの *isa-heri*」であり、それゆえ「狩人 *gaw*」が狩る野生の獣とは異なり、不浄な死肉にはあたらなかった。そもそもソンガイ語の「魚 *hamiisa*」は「川 *isa*」の「肉 *ham*」を意味し、この点において当然カバの肉は魚とおなじ川の肉なのだった。魚を獲ることを漁と呼ぶならば、カバを獲ることもまた「狩り」というより「漁」だったのである。

もちろんカバは魚とは異なり人の命を脅かす危険な存在である。しかしそれは、カバに固有の危険性というより、カバが川という御しがたい自然の力を体現するがゆえの危険性である。この危険な力を御しうる点こそがソルコの力であり、本報告を通じて明らかにすることを試みてきた「ソルコ的なもの」である。この点については、銛と称誉によってカバを狩るソルコであろうと、呪物と呪文によってカバに命じるソルコ＝川の主であろうとかわりない。ソンガイ系社会には「呪術師 *zinmow*」や「妖術使い *carkow*」など、呪術・宗教的な力に働きかける存在はほかにもあるが、ソルコの力がおよぶ範囲はあくまで「川のもの」に限定される。

だとすれば、「川のもの」への畏れがあるかぎり「ソルコ的なもの」はなくならず、むしろカバの個体数の増加によって御しがたい川の力との接触が今後も増加していくのであれば、ソルコと農耕民の生態環境を介した「共生的関係」は異化の方向に向かうのかもしれない。この仮説の検証は、今後の研究課題である。

謝辞

本稿のもととなっている生態人類学会第 19 回研究大会での口頭発表は、同研究大会の「優秀発表賞」にお選びいただいた。大変な名誉であり、わたしが銛であったなら喜び勇んでカバに突き刺さっているところである。この場を借りて心より御礼を申しあげたい。

参考文献

Lamarque, F. 2004. *Les grands mammifères du complexe WAP*, ECOPAS.

Olivier de Sardan, J.P. 1982. *Concepts et conceptions songhay-zarma: Histoire, culture, société*, Nubia.

Rouch, J. 1997 [1948]. « Banghawi »: Chasse à l'hippopotame au harpon par les pêcheurs Sorko du Moyen-Niger," In: Rouch, J (ed.) *Les hommes et les dieux du fleuve: Essai ethnographique sur les populations Songhay du moyen Niger 1941-1983*, Editions Artcom. pp.63–78.

—1997 [1950]. Les Sorkawa: Pêcheurs itinérants du moyen Niger. In: Rouch, J. (ed.) *Les hommes et les dieux du fleuve: Essai ethnographique sur les populations Songhay du moyen Niger 1941-1983*, Editions Artcom. pp.79–114.

安渓遊地. 1986.「物々交換が結ぶ森の民と川の民：ソンゴーラの生活」伊谷純一郎・田中二郎 (編) 『自然社会の人類学：アフリカに生きる』アカデミア出版会. pp. 250–277.

佐久間寛. 2013.『ガーロコイレ：ニジェール西部農村社会をめぐるモラルと叛乱の民族誌』平凡社.

—2014.「スーダン農耕文化複合の現在：ニジェール西部ソンガイ系社会の事例から」『生態人類学会ニュースレター』19: 24–30.

多元的医療下にある南インド・ケーララ州における「伝統医」の役割と住民の治療選択行動

松岡 佐知
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

1. はじめに

インドでは、近代医学だけでなく、伝統医学であるアーユルヴェーダや西洋発祥だが非「近代医学」的なホメオパシーなど、多様な医療が公的制度に支えられて社会の中に併存している。公的制度の他にも、村落部を中心に医療を提供する「伝統医」であるヴァイッディヤ (*Vydian*) が存在する多元的医療状況である。発展の著しいアジア各国や先進国においても、生活習慣病、心身症の増加、高齢化等といった課題に直面する中で、近代医療よりも各地固有の民間医療やアーユルヴェーダや中医学などの伝統医療を好む人々が現れてきており、またグローバル化に伴い、各地の伝統医療を享受できるようになっており、世界的に医療の多元化が進みつつある。

では、どうすればそういった多元的な医療状況が最大限にその特徴を生かすことができるのだろうか。人々が、個々の病状や社会的状況に応じて最適な医療を受け、また社会としても多元的医療状況を公正・適切に利用する仕組みを作ることは現代、そして未来にわたって、健康と生存の増進のために重要である。

2. 研究目的

本研究は南インド・ケーララ州都市近郊の漁村を事例に、伝統医であるヴァイッディヤの活動とその村落住民の治療選択行動を観察・聞き取りすることで、地域医療における多元的医療の在り方の変容を明らかにすることを目的とする。

3. 調査地・調査期間

ケーララ州第一の商業港湾都市から30kmほどの都市近郊の漁村で調査を行った。対象とした村は、雨量はあるものの土壌が貧弱で農業に適さず、住民の半数が漁業、もしくは魚加工業などに従事している一方で都市通勤者もわずかに存在している。指定カーストの居住割合が高い (Edabakkad Panchayat 2013)。歴史的に貿易や宣教などで欧米人や中東の商人が訪れていたため多宗教の状況であり、村内にはヒンドゥー教寺院や教会、モスクが混在している。

ケーララ州は経済指数が低いにも関わらず、健康指標や識字率が劇的に向上したことから、社会開発の奇跡として国連開発計画 (UNDP) の人間開発報告書でも取り上げられたが、その結果として現在では高齢化や知識階層が増えたにも関わらず雇用機会が十分になく、アルコール中毒、自殺率の高さが問題となっている。本研究においては、2012～2013 年のあいだの延べ 4 ヶ月の間にヴァイッディヤの患者および、既往のあるその周辺住民に対し、治療選択行動について明らかにするため対面式聞き取り調査を行った。合わせてヴァイッディヤへの聞き取り、治療方法や生活様式についての参与観察を行った。その結果、ヴァイッディヤ患者 97 名 (男 64、女 33)、地域住民 31 名 (男 22、女 9) から回答を得た。

4. 地域医療としてのヴァイッディヤ

結果として、かつては、地域医療を担っていた (加瀬澤 2006) とされるヴァイッディヤは、調査した都市近郊漁村では地域医療の役割を担っていなかった。

本研究における聞き取り調査では農村部においてはアーユルヴェーダ (全体の 12.9%) よりもホメオパシー (32.3%) が多く利用されて

いた。地域住民は公的なアーユルヴェーダ医療はあまり利用せず、アーユルヴェーダ理論を基軸とするヴァイッディヤについてはひとりも利用していなかった。本調査対象としたヴァイッディヤは、アーユルヴェーダだけでなくヨガ、ホメオパシー、インド南部を起源とするシッダ医学などを修め、独自に融合させており、その提供する内容はヴァイッディヤの師匠 (*Gulu*) とは異なっている。患者の層が地域住民から都市住民に変化するのと共に、伝統医学の中身自体も核となる理論は保ちながらも、常に変化し続けている。

世界的に注目を集め疫学研究の進むアーユルヴェーダはインドの伝統医学であるが、多くの地域村落部住民には受容されていなかった。これは現代化の進む中で、人と自然の距離が変化することで、身体や生への考え方が変遷したことや経済性などが影響を及ぼしていることが考えられた。

5. ヴァイッディヤ患者と地域住民の治療選択行動

ヴァイッディヤ患者と、ヴァイッディヤを選択しない村落住民とを比較した結果、村落住民の治療選択行動が宗教や生活スタイル、社会制度など多くの要素により影響され、多元的医療の状況が維持されていることが示唆された。ヴァイッディヤを訪れる患者の多くは、近隣の都市部住民であり、ヴァイッディヤの施設内で手作業により薬用植物から製剤される医薬品に価値を見出していると考えられた。一方で、村落住民は工業製品といった近代性への嗜好が強く、手作業で製剤された医薬品に特別な価値は見出しておらず、薬用植物について一定の知識はあるものの近隣に生育している薬用植物を治療に用いている例は少なかった (全体の 9.7%)。

調査対象地は、数年に一度海岸部の住宅が台風により浸水する。また、調査対象の住民の約半数が漁撈民であり、日常生活において自然環境の影響を大きく受けている。同時に、都市近郊であることから近代化の影響も大きく受けている。都市住民は、日常生活では工業製品に囲まれ、自然の直接的な影響は受けにくい。自然と人の直接的な関係性が近代性の介入により変容していることが、ヴァイッディヤの薬用植物への嗜好として表出している行動から読み取ることができたと考えられる。

6. まとめ

結論として、ヴァイッディヤは現代において地域社会の医療を担う役割を失っていたが、遠方の都市住民にとって、治療の役割を担っていた。そこには、人と自然への関係性が変化し、その結果として表出している社会や時代の在り方が大きく影響を与えていることが示唆された。また、アーユルヴェーダのように医学の有効性が証明されようとも、社会に受容されないことがあり、多層的な社会背景に基づく村落住民の治療選択行動が医療の多元的状況を支えていた。

付記

本研究は、独立行政法人日本学術振興会「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)」および文部科学省博士課程教育リーディングプログラム研究活動経費から援助を頂きました。

参考文献

加瀬澤雅人. 2006. 『現代インドの民族医療―グローバル状況におけるアーユルヴェーダの変容』学位申請論文. 京都大学.

Anitha, V. 2008. *Medical Pluralism in Kerala: A socio-Economic Study of Rural-Urban Variations*. Doctorial Thesis, Department of Economics Mar

Thoma Collage.
(Malayalam 語)
Edabakkad Panchayat 2013. *Annual Report*.

バカ・ピグミーのゾウ狩猟者トゥーマ（*tuma*）の知識と葛藤

林 耕次
京都大学アフリカ地域研究資料センター

1. はじめに

アフリカ熱帯雨林地帯に位置するカメルーン共和国の南東部には、ピグミー系狩猟採集民バカ (Baka) が暮らしている。現在、彼らのあいだでは農耕活動を伴う定住生活が浸透しており、一年の大半は定住集落周辺を拠点とした生活が主流となっている。しかし、季節に応じて森に移動し、食用の植物や昆虫類などの採集とともに多種多様な野生動物を狩猟の対象としている慣習も続いている。バカの人びとが対象とする野生動物のなかでも特別な動物として位置づけられているのは、バカ語で *ya* とよばれる森林性のゾウ (マルミミゾウ) である。バカにとってゾウは貴重な狩猟対象であり、「トゥーマ (*tuma*)」とよばれる一部の狩猟熟練者は, 独自の狩猟技術と森や野生動物に関する様々な知識を駆使してゾウ狩猟を継続してきた (林 2010)。その際、バカの人々のあいだで狩猟規制や食肉分配の慣習、儀礼との関わりなどを含む独自のルールというものが遵守されてきた (佐藤 1993; 安岡 2012)。他方で近年、畑や商業用伐採の拡大による野生動物の減少や周辺の森が国立公園に指定されるなどの理由で、地域住民にとっての生活空間が制限されるとともに、狩猟規制や違法狩猟の取り締まりが強化されている。こうした状況により、ゾウを含めた野生動物を対象とした狩猟機会の減少が余儀なくされ、狩猟活動に伴う慣習や文化的実践の衰退は、バカを含む地域住民にとっての切実な問題となっている。

2. 目的と方法

本研究では、近年のゾウ狩猟の実施状況と周辺民族や外部社会との関わり方を踏まえたゾウと人の関係をめぐる社会的背景について精査することを目的とした。また、バカの狩猟熟練者トゥーマによる狩猟に関する技術や知識体系の把握と、そうした技術や知識の継承がどのような条件や場においてなされているのかを世代差や地域差に注目しながら検討を試みた。これまで筆者は 1998 年から継続してきたカメルーンにおける現地調査の成果より、ゾウ狩猟の実態と地域社会における意義を検討してきたが (林 2010)、さらに、2010 年と 2011 年の 8〜9 月にかけて、カメルーン東部州における 62 箇所の集落に居住するバカの住民にゾウ狩猟の実情とそれに携わるゾウ狩猟者トゥーマについて広域の聞き取り調査を行った。トゥーマと対面した際には、これまでのゾウ狩猟に関する経験や知識のほか、近年のゾウ狩猟を巡る心境について語ってもらった。また、いくつかの集落において、狩猟道具として象徴的な槍の製作者と狩猟実践との相関についても検討を行った。

3. 結果と考察

3.1. バカのゾウ狩猟者トゥーマ

バカによる狩猟は男性の活動とされ、子どもの頃から野ねずみなどの小動物を手製の弓矢や簡易な罠で獲ることから始まる。その後、次第に狩猟技術を積んでいき、森や動物の生態などに精通しながら行動範囲の拡大とともに、狩猟対象も中型のダイカー類やブッシュピッグなどに広めていく。そうした経験を積みながら、狩猟者として最終的に目指すものはゾウやゴリラなどの大型動物である。バカのなかでも、

とくに「トゥーマ」としてバカ社会の内外から認められるのは、複数回ゾウの狩りに成功した狩猟熟練者である。

3.2. バカ・ピグミーのゾウ狩猟

大型動物の狩猟方法として、バカを含めたピグミー系狩猟採集民のあいだでは槍が広く用いられてきたが、近年では銃を用いて行われることが大半である。ただし、槍は森へ狩猟に赴く際には必ずといってもよいほど携帯され、銃を使用した狩猟の際にも獲物にとどめを刺すために用いられている。年長者のトゥーマになかには、槍のみでゾウ狩猟を行ったことがあると語った者も数名いた。銃猟のバリエーションでは、散弾銃の弾丸を改造したものを使用するほか、散弾銃の銃筒に短い槍 (*sala*) を差し込んで撃ち込む方法、殺傷力の強いライフル銃を使って仕留める方法がある。いずれにおいても銃と弾の入手は、その所有者である近隣の農耕民や商人らとの相互関係のうえに成り立つものである。バカはゾウ狩猟の成功後に象牙と一部の肉を銃と弾の所有者に譲渡する代わりに、大半の肉を入手する。肉の多くは燻して加工したのち、広範囲に贈与・分配される。

これまでの観察事例とインタビューによると、ゾウ狩猟は定住集落近郊ではほとんど行われていなかった。調査を行ったカメルーン南東部のゾウの棲息域は、比較的人間の生活域とは離れた遠方の森林であるため、ゾウ狩猟はキャンプ生活を前提とした奥深い森での狩猟採集活動の一環として行われることが多い。なお、実際のゾウ狩猟では、森の中でゾウの新しい糞や足跡を見つけた際に、狩猟者はそれらを追跡して行われるが、とくにバイ (*bai*) とよばれる森のなかの湿地帯の周辺では、ゾウや森林性のスイギュウなどの野生動物が集まるホットスポットとして認識されている。

3.3. ゾウ狩猟と社会・文化的慣習の現状

本研究の中心となったN村、および広域調査を含む調査地では、ゾウ狩猟を通じたバカの狩猟者の特性や社会的な役割に注目したが、カメルーン南東部のバカ社会においては、いわゆる象牙の採取のみを目的とした「密猟」とは一線を画し、ゾウ狩猟とそれを取り巻く慣習は文化的・社会的にも特別な意味を内包していると位置づけた。それらは、ゾウ狩猟 (森やゾウの生態、狩猟方法) の技術や知識の蓄積、あるいは食肉としての嗜好や調理・加工方法を含めた食文化、また、狩猟に伴う禁忌や儀礼的慣習、物質文化等を通じてみることができる。例えば、ゾウ肉食の禁忌として、自らが仕留めたゾウの肉を食べることを避けることが知られているが、このタブーを犯すと以後のゾウ狩猟が成功しないと考えられており、この慣習は徹底されている。また、バカのみに制限されず、地域社会の広範囲でみられるゾウ肉の贈与・分配に象徴される慣習は、社会経済的な紐帯として維持されていることも指摘できる。

なお、かつてはゾウ狩猟でも主要な狩猟道具として使用された槍の製作は、バカ自身で行われることがあるが、そうした槍製作の従事者には (現在、あるいはかつて) 優れた狩猟者として、狩猟の実践においてもバカ社会の中心的な役割を担っていたことが窺える。製作された槍は、親族や親しい友人らに無償で譲渡されるとのことである。槍の製作技術の継承については、狩猟を含めた森歩きに付き添う父や叔父といった親族から受けることが必然的に多くなるようであり、こうした狩猟実践の経験は、ゾウ狩猟を含めたかつての槍猟や現在の銃猟にも密接であると考えられる。初めて自らの槍を所有する時期は、狩猟技術同様、一般的に青年期にあたる時期の重要性を示唆する証言であったのだが、現在のバカ・ピグミーの生活では、若年層を中心に、槍の所持を含めて頻繁に森に

狩猟へ行くという機会が減少しているので、かつてのように狩猟技術や関連する知識の継承機会はますます失われていくと、年長者の幾名かは懸念していた。

4. おわりに：マルミミゾウの生態・生息域と人間活動

本研究の対象地域であるカメルーン東部州では、近年、国立公園や伐採可能区域、コミュニティー・フォレストといった用途に応じた土地の分割・制定が進んでおり、マルミミゾウの棲息域とそこで生活する地域住民との関係性が多様化している。他方で、殺傷力の高い銃器を用いた象牙目的の密猟や森林開発に伴って、マルミミゾウの個体数減少が危惧されるなか(ブレイク 2012)、ゾウ狩猟そのものを継続することが極めて困難なのは事実である。かつて、ゾウ狩猟を行っていたバカの狩猟者らもこうした近年の急速な状況変化に戸惑いつつ、本稿で記したようなゾウ狩猟に伴う自らの慣習や文化の維持、あるいは意味づけについては葛藤を伴った意識の変化を求められている。

今後とも広域調査で得られたカメルーンにおける地域性、あるいは周辺国における事例の比較にも着目しながら、ゾウの棲息域への人びとのアクセス、あるいは過去のゾウ狩猟に関する情報等との相関について調査・検討をすすめていきたい。

謝 辞

本研究は、科学研究費補助金 若手研究 (B)「アフリカ熱帯雨林地域における慣習的ゾウ狩猟に関する人類学的研究」平成 22-24 年度 (No. 22720326) の成果である。また、新学術領域 『ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相』プロジェクト A02 班「狩猟採集民の調査に基づくヒトの学習行動の実証的研究」(代表者：寺嶋秀明)、および JST/JICA (SATREPS) 『カメルーン森林－サバンナ持続性プロジェクト (FOSAS)』(代表者：荒木茂) にご支援いただいた。

参考文献

佐藤弘明. 1993.「象肉が食えないバカピグミーの象猟人」『浜松医科大学紀要 一般教育』7: 19–30.

林耕次. 2010.「バカ・ピグミーのゾウ狩猟」木村大治・北西功一 (編)『森棲みの生態誌－アフリカ熱帯林の人類学 I 』京都大学出版会. pp. 353–372.

Hayashi, K., Ishii, R., Nakamura, Y., Terashima, H. and Nishiaki, Y. 2012. Technical transmission of hunting tool manufacture: A case of spear hunting among modern hunter-gatherers in southeast Cameroon. In: Akazawa, T. and Nishiaki, Y. (eds.) *RNMH 2012 The First International Conference*, pp. 103–104.

ブレイク、ステファン (西原智昭訳). 2012.『知られざる森のゾウ―コンゴ盆地に棲息するマルミミゾウ』現代図書.

安岡宏和. 2012.「純粋贈与されるゾウ―バカ・ピグミーのゾウ肉食禁止とシェアリングをめぐる考察」松井健・野林厚志・名和克郎 (編)『生業と生産の社会的布置－グローバリゼーションの民族誌のために』岩田書院. pp. 301–341.

ソロモン諸島ロヴィアナにおける住民の森林利用と生物多様性との相互作用
―社会経済的変化の下での文化的・生態学的保全への示唆

古澤 拓郎
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

1. 目的

ソロモン諸島では、森林は人々に生態系サービスを提供してきた一方で、人々による利用や保全の影響を受けてきた。この研究は、ウェスタン州ロヴィアナ地域を対象に、そのような人間―森林相互関係と、その関係の変容を明らかにすることを目的とする。定量的民族植物学の手法を用い、村落部と都市近郊部における植物利用と土地利用を比較する。特に人々が生物多様性にどのように依存しているか、そして逆に人間による改変が生物多様性の保全にどのように貢献しているかに着目する。

2. 方法

調査では住民が認識している土地利用の種類を明らかにしたのち、それぞれの土地利用での植生調査を行った。また、村落部から 15 世帯、都市近郊部から 17 世帯を無作為抽出し、日常的な植物利用を明らかにした。具体的には、食料、治療薬、建材、道具として用いられていた植物について、種ごとの利用量・頻度を明らかにした。

3. 結果

植生調査の結果では、土地利用ごとの植物群落の違いを明らかにした。異なる土地利用の間では、類似度が低かった。たとえば、本島の「一次林 (muqe)」と堡礁島のそれとの類似度 (Sørensen–Dice similarity index) はわずか 16.0%であり、本島の一次林と「二次林 (nobo)」は 27.8%であった。ただし本島にあって、日常的な非木材林産物の採集などの人為的な改変を受けつつも、大規模な伐採からは保護されてきた「リザーブ (rizevu)」は、本島の一次林、二次林、伐採跡地林とそれぞれ 49.5%、45.9%、52.6%の類似度であり、異なる土地利用の特徴を併せ持っていた。

植物利用調査の結果からは、食用 39 種、治療用 19 種、建築用 71 種、道具 53 種が観察された。同一種が複数の用途で用いられたこともあり、全体の有用植物は 149 種であった。前述の植生調査の結果と合わせて、各土地利用に含まれる有用樹種の割合を分析すると、堡礁島の一次林に占める有用樹種は 68.4%と最も高く、続いて本島のリザーブ (68.3%) が続いた。

村落部では、チーフによる資源管理など慣習的なガバナンスが機能しており、リザーブの管理や、特定の有用樹種の管理が行われていた。一方、都市近郊部では、そのような慣習的管理が弱くなっていたためリザーブのような土地利用は無かった。都市近郊部住民は、リザーブから提供されてきた森林資源を、林業会社の製品や輸入品の現金購入で代替していた。なお、別の研究において、都市近郊部世帯のおよそ 3 分の 2 は定職がなく、そのような場合の現金収入は、村落部世帯と有意差が無いほど低いレベルであり、森林資源への現金支出は家計に影響を及ぼすことを付言する (Furusawa 2011)。

4. 結論

住民は様々な用途に応じて、異なる植生・土地利用に依存していた。また、リザーブを保持することや、セミドメスティケーションといった行動が多様性の保全に貢献していた。人為的改変が特異な植物群落の創出に貢献し、森林の生物多様性を高めていたと考えられる。都市化は、このような人間―環境関係に負の影響をも

たらす。伝統的な土地利用・景観利用としての森林改変は、生物多様性の保全に活用されうるものである (Furusawa et al. 2014)。

参考文献

Furusawa, T. 2011. Ecological and Economic Analyses of Urbanization in the Customary Lands of the Solomon Islands. *People and Culture in Oceania* 27: 1–17.

Furusawa, T., Sirikolo, M.Q., Sasaoka, M. and Ohtsuka, R. 2014. Interaction between forest biodiversity and people's use of forest resources in Roviana, Solomon Islands: Implications for biocultural conservation under socioeconomic changes. *Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine* 10: 10.

山間地における集落構造の現状と変遷 —奈良県十津川村神納川の事例

渕上ゆかり・上須道徳・栗本修滋
大阪大学

1. はじめに

資源とは人々の福祉を維持するための財やサービスを提供するものとして有形・無形である空間の中に蓄積されているものである (Uwasu 2010)。地域に存在する資源は、「自然資本」「人工資本」「人的・社会関係資本」の 3 つに分類される。社会の基底にある気候風土や制度そして生活や社会の近代化は、人々の要求 (ニーズ) や政策・施策に影響を与え、生業や産業を創出する。

このような社会の基底構造の変化に反応する形で様々な資源が利用され、財やサービスが生み出される。しかしながら資源がその場所に存在していても、それを適切に利用するための人や制度、インフラがなければ必要とされている財やサービスを生み出すことはできない。天然資源が豊富な国が必ずしも経済発展を遂げているわけではない。さらに、資源の利用状況や産出される財・サービスは様々な要因によって変化する。

図 1 に、地域に存在する資本と地域社会の関係を表した。このように、資本の形態や価値は社会構造と共に大きく変化し、さらに地域住民の wellbeing やサステイナビリティは資本の相互関係により大きな影響を受ける。したがって、地域住民の wellbeing や地域のサステイナビリティの理解にはケーススタディを通じた資本の理解が不可欠である。

そこで本研究では奈良県十津川村を調査地域と定め、インタビューと文献調査を通じて地域に存在する 3 つの資本を抽出するとともに「社会構造の変化にともなう生業やニーズの変化」が地域の資本に与えた影響について明らかにすることを目的とする。

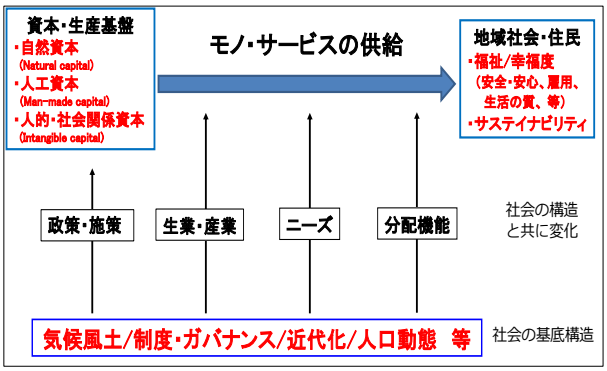

図 1. 地域に存在する資本と地域社会の関係

2. 調査地および調査方法

本研究では十津川村神納川区を調査地とし、山村における様々な資源を「持続可能な地域社会」の観点から再評価を行った。十津川村の面積は 672m^2 で村としては日本一の面積を持つが、人口はわずか 3 千 9 百人弱であり人口密度は極めて低い (5.8 人/km^2)。村域の 90%以上は

山林であるため主要な産業は林業であったが、林業は全国的な傾向として衰退している。耕地は僅かであり、江戸時代まで租税免税地として時の権力者に認められていた。天災に弱い立地条件であり、1889 年には台風による大水害の被害を受け、多くの十津川村民が北海道に移住した歴史がある。さらに 2011 年に台風 12 号によって土砂災害や浸水などの大被害を受け、現在は皮肉なことに災害復旧に携わる建設産業が十津川村の重要な産業となっている。

神納川地区は、十津川村の中央を縦断する国道から川沿いに西に車で約 20 分入ったところにある山間集落である。神納川地区は西から杉清・五百瀬・三浦・山天・内野の 5 つの大字からなり、33 世帯 63 名が居住する (2014 年 2 月現在)。住民の大半が 65 歳以上の高齢者であることから、神納川は限界集落であるといえる (大野 2005)。現地調査は調査票を用いたインタビュー形式で、2014 年 2 月 17〜27 日に神納川地区 33 世帯中、23 世帯に対し行った。さらに、十津川御採訪録 (林 1993) を用いて、五百瀬集落を対象に集落構造および生業の変遷を明らかにした。

3. 神納川地区の資本

3.1. 社会構造の変化と生業の変化

五百瀬では 1962 年の時点では、農林業従事世帯 21 戸 (林業が主)、山林労務 3 戸、商業 4 戸、旅館 3 戸、学校教員 5 戸であった (業種名は前述の資料に基づく)。それに対し 2014 年 2 月には、土木業 3 戸、商業 1 戸、旅館 1 戸、無職 (自家用畑作のみ) 1 戸、その他 2 戸となっていた。以前は林業を主生業に副業としての農業を行う世帯が大半であったが、現在はより安定的な現金収入が得られる生業へと移行している。特徴的であるのは商店・旅館業の推移である。2004 年に当該集落内を通る熊野古道の一つである「小辺路」が世界遺産に登録されたことにより、高野山から山を越えて訪れる登山客が増えた。このような背景もあり、2008〜2010 年、神納川地区では国からの補助金を得て「子ども農山漁村交流プロジェクト (長期宿泊体験のモデル地区)」が行われ、「農家民宿」という形の宿泊施設が現れた。このような需要の創出に加え、世界遺産登録による都市部からの観光客が現れたことで最盛期には 10 軒の農家民宿が存在した。しかしながら補助金の終了、2011 年の台風による被害および高齢化などによって 2014 年現在にはわずか 1 軒に減少した。

社会構造と生業選択の観点からは、現世代では農林業を生業として選択する可能性はほとんどない。大学進学率が急増している現代世代では村外に出る割合が高く、職業の選択肢が増えるため、生業としての収入が見込まれない農林業を選択する可能性は低い。また、たとえ土木事業などに従事していても子育て時に同世代の子供がいないこと、小中学校が存在しない事を理由に地区外に家族ごと移住してしまうこともある。

3.2. 自然資本：林業および農業

神納川地区では長らく林業が主な生業であった。前世代 (ヒアリング対象者の親 : 1940〜1960 年代) では基本的に「林業主の農業副」の人が大部分であった。大部分の世帯が山・農耕地を所有し、自分の山の手入れをしつつ、地区内外の親方に雇用される形で林業に従事していた。主な従事者は成人男性であるが、女性や子供も下草刈りや植林を行った。1990 年代後半までは神納川森林組合が存在したが、その後十津川村森林組合に合併されて姿を消した。しかしながら林業が主生業となり得たのは約 20 年前までで、現在は木材価格の低下により主生業として従事することが困難になっている。現在も残っている林業組織としては、生産森林組合が 1 つ残るのみである。これは山天集落の住

民が県の契約で山天地域の山 (約 300ha) を対象に約 33 年前 (1981 年頃) に始めた林業組織であり、作業員として集落外・村外の人 (約 6 名) を雇用している。

また、十津川村は山林が大半を占めているため米が殆ど採れず、太閤検地時にも年貢が減免され、これは明治期の地租改正まで続いた。しかしながら全く農業がなされていなかったわけではなく、自給用の農業は積極的に行われていた。また量は多くないが換金作物として集落外に出荷していたものとして椎茸・ワリナ (マイモ) が 1962 年代に、コウゾ・ウルシ・トリモチ・シュロ皮などが 1962 年以前に作られていた。その他、一時期は養蚕も行われていたため桑の栽培も行っていたと推測される。現在は高齢化により、現在は農業を主生業としている世帯はない。

3.3. 人工資本：交通インフラと生活利便性

神納川地区には、1 日に 2 本の公共バスが往復している。このバスを移動に使用する住民は少なく、小辺路を歩く登山者と、自動車の運転が出来ない高齢者が利用者として挙げられる。また、このバス会社には 5 名の運転手が在籍しており、その 5 名が交代で神納川路線の運転を行っている。この 5 名のうち 2 名が神納川地区の住民であることから、集落外からの荷物 (食料や生活用品) などの輸送を高齢者のために無料で行っている例も見られた。現在、利便性の点で最も難があるのは食料・生活用品の購入である。上記のように公共バスは通っているが、公共のバスで往復が簡単に出来る場所に生活用品が満足にそろう商店が存在しない。2013 年末までは和歌山県新宮市から、食料品を中心に生活用品を移動販売の形で販売に来てくれる業者が存在したが、病気になったために途絶えた。現在、車移動の不可能な高齢者世帯は、子世帯への買い物委託や宅配便等を利用することで急場をしのいでいる。

3.4. 人的・社会関係資本：生活・生業に関係する住民同士の繋がり

生活・生業に関係する住民同士の繋がりによる資本を挙げる。十津川村には消防団、青年団などの組織が存在する。また、十津川村の主要産業は長らく、第一次産業である林業であった。そのことから森林組合の担う役割が大きい。地区・集落単位では、地区では区長、集落では惣代と呼ばれるまとめ役を中心とした互助組織が存在する。また、神納地区には十津川消防署の分団があり、現在 9 名が所属している。他にも婦人会が存在し、消防団と婦人会の主な活動内容は「山における遭難者や被災者等の保護」である。その他の生活に密着した互助組織として、水道組合がある。神納川地区の五百瀬・内野・三浦では、水道は近隣の数軒で簡易水道を利用しているため、掃除などを当番制で行っている。また、近隣住民間の「おすそ分け」といわれる農作物などの分配機能も住民同士の繋がりの一例として挙げられる。神納川集落では農業を行っている世帯はすでに高齢化しており農業を収入源としては捉えていない。しかしながら近隣住民、親しい地区民、親戚とこれらの作物を「共有する」ことを目的として、必要以上の量の作物を生産している。

4. 地域住民の Wellbeing

神納川地区の住民の生活における Wellbeing を明らかにするために、現在の生活に対する満足度を 100 点満点で評価してもらった。23 世帯中、19 世帯から回答を得ることが出来、その平均点は 83.7 点と高かった。各人の回答理由を不満 (50 点以下: 3 名)、普通 (60～79 点: 3 名)、満足 (80 点以上: 13 名) の 3 つに分けてみてみる。「不満」の理由としては、車の運転が出来なくなったら生活が困難になることが

挙げられた。「普通」の理由としては、不便ではあるが故郷であるので気安く生活が出来るため、十分満足ではないが不満というほどではないという意見であった。「満足」の理由としては、人間関係が良好であることや、昔に比べたら格段に便利になったこと、のんびりとした田舎暮らしの利点などが挙げられた。全体を通して聞かれたのは災害に関することで、「満足」に分類される人々も災害時に道路に規制がかかる点には不満を覚えていた。しかしながら全体としては満足度が高く、その理由からは人的・社会関係資本に起因する要素が満足度に、人工資本に起因する要素が不満足度に繋がっていると推測された。

5. 考察

前述した 3 つの資本は、状態を変えながらも地方には依然として存在している。中には量・種類は変わっていないが使用方法が変わったもの、質は向上したが認識が変わったものなどがある。神納川地区では、地域の根幹産業である林業が衰退すると共に人口減少や高齢化に基づく諸問題が現れた。しかしながら、2011 年の災害によって被害を受けたとはいえ、自然資源は現在も十分に存在している。つまり、自然資本である森林資源は物理的なストック量としては未だ豊富に存在しているが、木材のニーズの減少や林業の担い手不足から利用・管理状況は変化したといえる。

その一つとして、若い人材の極端な不足が挙げられる。その勢いは急速であり、「世界遺産への登録」という地域の付加価値も人を呼び戻すことは出来なかった。人工資本の蓄積は、現在のほうが過去に比べて質・量共に増加している。昔の生活に比べれば現在の状況は「便利」であることは確かである。しかしながら生活の便利さが格段に上昇した一方で、生活の近代化が進むことで人工資本に対する要望の基準も上がったため、地域住民が満足しうる水準ではない。人的・社会関係資本においては、生業活動および共有資源管理における協働が、これまでの意義であった。しかしながら少子高齢化の進む現在は、共に生活をするという心の支えとしての意味合いへと変化している。

自然資本が豊富に存在したとしても、「学校」や同世代の子供や家族という人的・社会関係資本が欠如しているために地域の人口減少に拍車がかかり、インフラ等の人工資本の衰退が進み、生活の不便さが生まれることがある。それは自然資源の利用管理の一種である林業の衰退を招き、放置林の増加に繋がるだろう。このように資本相互関係は、住民の福祉や安全・幸福度、そして自然資本にも影響を及ぼす。しかしながら現地での聞き取り調査からは、住民は今の生活について高い満足度を持っていることがわかった。その理由の多くが土地への愛着や密接で安定した人間関係等 (人的・社会関係資本) であり、それらが満足度の高さに結びつき、現在の「不便だが満足度は高い」地域生活を作っているといえる。以上より、十津川村神納川地区を事例に社会構造の変化にともなう生業やニーズの変化が地域に与えた影響の一例を提示した。

参考文献

大野晃. 2005. 『山村環境社会学序説―現代山村の限界集落化と流域共同管理』農山漁村文化協会.

林宏. 1993.『十津川御採訪録－民族Ⅱ』十津川村教育委員会.

Uwasu, M. 2010. Global sustainability: the current states and challenges. In: Sawa, T., Iai, S. and Ikkatai, S. (eds.) *Achieving Global Sustainability: Policy Recommendations*. United Nations University Press.

滋賀県余呉町に伝わる焼畑ヤマカブラの採種法、「下切り」について

黒田 末寿
滋賀県立大学／火野山ひろば

1. はじめに

滋賀県長浜市余呉町北部では 1980 年代まで焼畑が続けられていた。私たち「火野山ひろば」は 2007 年にこれを復活し、これまで 7 年間、経験者に指導を仰ぎながら焼畑をしてヤマカブラと呼ばれる在来カブを栽培してきた (今北 2012)。

かつて焼畑を行っていた多くの地域には、それぞれ固有のカブ在来品種があり、山形県では焼畑をやめたあとも数多くの在来品種が残されている (江頭 2007)。一方、カブは Brassica rapa に分類されるが、自家不和合性が強く、同種の異品種である白菜・水菜・菜種などと交配してすぐに品種特性を失う。このため、品種を維持するには、交雑可能な rapa 種を植えないか、それらから隔離する必要がある。

たとえば、山形県の温海カブの生産地、一霞では古くから温海カブ以外の交雑可能な菜野菜を植えることを禁じており、それを見つけた場合、抜き捨ててよいことになっていた (斉藤 1983)。江戸時代から温海カブの種の生産・販売地は唯一、一霞だけだが、この措置が大きな貢献をしていることは疑いない。新潟県山北町の山熊田では 2007 年に焼畑を復活し、昔通りに温海カブを植えているが、自家採種してもよい種が取れないから、昔から温海の方から種を買っているとのことだった (山熊田「生業の里」での聞き取り: 2012 年)。また、日野菜の産地、滋賀県日野町の鎌掛では、集落から 1〜2km 離れて採種用地を設けて交雑を防いでいるとのことである (鎌掛での聞き取り: 2005 年)。

ところが余呉町では、カブラの下部を切り捨てて植えると、他の菜と交雑しないといわれており、それを実践している人が私たちの焼畑の師匠、永井邦太郎氏である。同様の言い伝えは秋田県仁賀保、福井県美山にも残っていて、仁賀保の三浦雅彦氏は今も行っているとのことだった (聞き取り: 2014 年)。この採種用のカブの下を切り取るやり方には名前がついていないので、「下切(しもぎり)」と名づけておく (黒田 2013)。下切は、『百姓伝記』(作者不詳、1680 年代; 岡 1979) に記述されているが、詳しい説明はなく、また、現在下切が残っているカブ生産地でも、その理由がわからなくなっている。

本報告は、この下切りをめぐる言説とその意味について検討する。

2.「現場の知」と「根幹的技法」

焼畑の技法は聞き取りや予備知識で準備していても、やってみなければ分からないことに満ちている。聞き取りでは、経験者たちは細かに語らない。現場で私たちがやるのを見てはじめて、「それじゃあダメだ、こうしろ」とか具体的に指示してくれる。この現場で発揮される指示は、知識が体系化されていないためというよりは、おそらく状況に応じて選択することが多すぎて事前には説明しがたいことに由来すると思われる。それは、どんなことにも、すぐに対処の方法を教えてくれることから推察される。

こうした現場の状況が引き出す、いわば、「現場の知」に対し、一方で、聞き取りですぐに出てくる、いくつかの「こうするものだ」という焼畑をするための手順と必須の技法がある。それは「根幹的技法」と呼べるもので、たとえば、土地選び、火入れの時期や防火帯、火付け開始点などがそうである。上方の風下から火付することは、延焼を防ぎ、土をよく焼くための必須のやり方とされる。といっても、実践では状況に応じて下方から火をつけること(「逆焼」: さ

かやき）もあり、その他の根幹的技法も含めて絶対にそうしなければならないというものでもない。つまり、根幹的技法も現場の知によって臨機応変に修正される。いずれにしても焼畑の経験者たちはこれらの技法については、自信をもって明瞭に私たちに話し、指示する。

3. 「下切り」の評価と意味喪失の原因

種取用のカブラの下部を 5 分の 1〜4 分の 1 程度を切り取って植え替える「下切り」は、根幹的技法に入るが、これだけは例外的に、余呉の焼畑経験者たちは「昔の人がやっていたことだからよくわからんけど」とあいまいな態度で語る。余呉では、下切りして植え替えると、品種の特徴が保たれるとされているが、同趣旨のことが『百姓伝記』(作者不詳 1680 年代) にあり、これがもっとも古い記述のようである。ところが、それから 160 年ほどのちの『軽邑耕作鈔』(淵沢 1847) では、それに有効性はないと否定している。『百姓伝記』では、カブが元の品種特性を失いやすい野菜であることに注意を喚起し、形、葉、根をよく吟味して元の特長を失わないように選ぶ事と書いてあり、それを下切りして植え替えるのである。また『百姓伝記』には、「ためして知るべし」と実験・実証を勧める言葉が頻繁に出て来ることが興味深い。

安田 (1949) は、植物を傷つけると繁殖生殖が早まる可能性があること、また、花がつぼみの時、老化した時は、自家受粉を阻害する物質が生産されないので、自家不和合性がなくなるとある。すると下切りの効果として、①花期が早くなって他品種との交雑可能性が低下する、②自家不和合性が抑制され自家受粉が可能になる、のいずれかまたは両方が考えられる。

下切りの条件を変えて何度か試すと、他の rapa 種と交雑できないほど早く花が咲き結実した。今年は 2 月 28 日に開花したが、これは下切りしなかったカブより 3 週間早い開花であった。②は確かめていない。下切りは、じつは切ることによって堅さと味も吟味でき、より質の良い個体を種取用に選ぶことも可能な合理的種取法である。これは迷信ではないと判明した。

百姓伝記以降下切りの意味が分からなくなったのは、百姓伝記の記述を読めば原因が推測できる。そこには「カブをよほど切り捨てて植え替える」とあり、「よほど」=大部を切り捨てると言うことである。実際、私の実験では半分ほどを切り捨てて、明確に花期が早まった。しかし、農業の常識では、種取用の個体は大事にするのがあたりまえで、根を傷つけることすら避ける。だからカブの半分も切り捨てたものを種取用にするのは、そのことを実際にやって確かめた者だけができることで、そういう場合でも切り方がだんだん小さくなっていくことが予想できる。げんに『軽邑耕作鈔』では対象が大根であるが、下切りを「大根の尾を切り取る」方法として言及し、効果はないとしている。つまり、「よほど切り捨てる」下切りは、よい種をとる通常のやり方と真っ向から対立する技法であるために、意義があいまい化し失われていったものと推測できる。

参考文献

今北哲也. 2012.「火が拓く原野―野から山へ、山から野へ」矢嶋吉司・安藤和雄 (編)『ざいちのち : 実践型地域研究最終報告書』東南アジア研究所実践型地域研究推進室. pp. 65–72.

江頭宏昌. 2007.「山形県の在来カブ : 焼畑がカブの生育と品質に及ぼす効果」『季刊東北学』11: 106–116.

斉藤功. 1983.「焼畑カブとシナ布」『筑波大学地球科学系人文地理学研究グループ・地域調査報告』5: 107-119.
(http://hdl.handle.net/2241/12510)

『百姓伝記』(著者・年代不明、岡光夫翻刻・訳・

解題)、『日本農書全集』第 16･17 巻、農山漁村文化協会、1979. 岡光夫氏 (文献解題：1979) は、天和年間の 1681−83 年に成立したとしている。

鮮魚行商人の地域的展開と現代における意義―香川県高松市域で活動する「いただきさん」を事例に

赤松 優
筑波大学生命環境科学研究科

1. はじめに

漁師の夫が採捕した魚介類を妻が日中、街で売り歩くという鮮魚行商の光景は、かつて日本全国津々浦々で見られたものであった。しかし、近年では商業店舗の拡充や、流通の発達により、これら水産物行商は衰退の一途を辿っている。

「いただきさん」とは香川県高松市における女性鮮魚行商人に対する名称であり、彼女たちは「横付け」と呼ばれる改造自転車を用いて行商を営んでいる。

水産物行商に関する研究は民俗学による研究蓄積が多々あり、「いただきさん」に関する研究も民俗学的視点から行われ、道具や行動の一部が収集された。しかし今日も行商を続ける「いただきさん」の地域的展開や行商行動の様式などは未だ不明である。

そこで本研究では、「いただきさん」の実態を把握し、行商の地域的展開を明らかにする。そして、「いただきさん」と顧客の関係を考察することで、現代における行商の意義を問うことを目的とする。

2. 調査対象・調査地の概要

2.1. 調査対象概要

調査対象である「いただきさん」とは、香川県高松市における女性鮮魚行商人に対する呼び名である。彼女たちは夫や親戚の漁師、仲買から鮮魚を入手し、行商を行っている。移動・販売には「横付け」と呼ばれる特殊な自転車が用いられる。「横付け」とはバイクのサイドカーのように自転車の側面に荷台を取りつけた改造自転車であり、市内で営業している「いただきさん」のほとんどが「横付け」を使用している。「横付け」は「いただきさん」それぞれが使いやすいように手が加えられ、人によっては「横付け」の荷台に屋根が設置されており、金属溶接のもの、木製のもの、ビーチパラソルで代用したものなど様々である。

平成 24 年現在、高松市では 46 名の「いただきさん」が鮮魚行商を営んでいるが、この数字は最盛期であった昭和 30 年代の 400 人以上と比べ 10 分の 1 程度に減少している。また、行商に必要不可欠な「横付け」の基礎となっている業務用自転車の製造企業が阪神大震災により自転車生産から撤退し、「横付け」の新規購入が難しくなっている。そのため、高齢による体力の衰えや腰を痛めて廃業したり、交通事故によって「横付け」を破損し、廃業したりする例がある。一方で、このような状況の中でも、姑や姉の「横付け」を受け継ぎ、新規就業する例もあり、近年の営業数は横ばいである。

2.2. 調査地概要

調査地である高松市は、四国地方の香川県中央部に位置している。高松市沿岸部は讃岐平野が広がり、市内北西部に石清尾山塊 (いわせおさんかい) があるほかは平地が広がっている。気候は、瀬戸内海気候に属し、年間を通して温暖な気候であり、日照時間が長い。市街地では、昭和 21 年からの戦災復興都市計画事業により、新道の配置、道路の拡幅などが行われ、平坦な地形と幅広い道路から、自転車が市民の交通に多く用いられている。市内中心部には 2 軒の百

貨店と 2.7km におよぶアーケード商店街を有しているが、郊外の大型店舗との競争にさらされている。また、市内中心部では都市化と中心部に商店街を持つため、ドーナツ化現象が進行している。

2.3. 高松市における漁業

高松市の漁業は小型底びき網漁が中心である。平成 20 年の海面漁業の経営体の総数 431 の内、小型底びき網の経営体数は 180 であり、全体の 41%を占めている。平成 20 年の漁獲量は 5021t であり、底びき網漁での漁獲量は 2057t と経営体数と同じく全体の 40%を占めている。しかし、魚種別漁獲量の魚類ではイカナゴが最も多く 1411t、次いでシラス 466t、カレイ類 334t となっている。魚種別漁獲量で底びき網で漁獲されやすい、カレイ類が第 3 位にあるのは底びき網は漁法の性質上、どうしても多種類の魚を少量ずつ漁獲する多種少産となるためである。底びき網漁は、海底を網でひく性質上、混獲が多い。季節によって異なるが、底びき網漁では赤メバル、アナゴ、アラエビ、カレイ、ガザミ、ゲタ、コウイカ、シロギス、シャコ、タコ、チヌ、ナシフグ、ヒラメ、ビングシ、ベラ、メイタガレイ、メゴチ、メバルなど多種類が少量ずつ漁獲される。このような小型底びき網漁は、豊漁であっても 1 回の操業で水揚げ額が 7 万円に届くか届かないかであり、そこから必要経費を差し引くと、利益を上げることが非常に困難である。また、多種少量であることは、選別の煩雑さを招き、市場でも買い叩かれやすい。

また、鮮魚の流通であるが、高松市内の漁港で水揚げされた魚介類は高松市中央卸売市場を経て、主に香川県内で消費される。

3. 行商の実態

高松市内では現在でも多くの「いただきさん」が行商を営んでいるが「いただきさん」の行商形態は、2 種類に分類される。1 つは得意先の家々を回り、鮮魚を配達する昔ながらの形態、移動型である。もう 1 つは、同じ地点に留まり、鮮魚を販売する形態、定点型である。調査により、高松市内で営業する「いただきさん」のほとんどが、後者の同じ場所で留まる定点型を行っていることが明らかになった。しかし定点型でも、行商場所への移動中に求められれば鮮魚を販売することもある。「いただきさん」の 1 日の流れは、朝 4 時頃の起床から始まる。起床後、身支度を整え、朝 5 時ごろから 8 時まで、鮮魚、氷の仕入を行い、行商を開始する。得意先を回る行商形態の場合はそのまま得意先を回り、正午ごろに行商を終える。定点型の場合も同じように行商場所に移動し、朝 9 時ごろから行商を行う。行商中は発泡スチロールやバケツ、まな板などを展開し、鮮魚を顧客に見せつつ、注文に応じてその場で下処理を行う。正午ごろに行商を終えるが、売れ行きが良くない場合や注文品を客が取りに来ない場合は 13 時ごろまで行商場所に留まることもある。こうして行商を終え、昼食となり、居住地に戻るが、その後「横付け」の掃除や売れ残りの処理などがある。売れ残った鮮魚類は味噌漬けにされたり、「いただきさん」の家庭の食卓に上ったりすることとなる。また、休日であるが、「いただきさん」の休みは基本的に休市日 (毎週日曜日、祝日と第 2、第 4 水曜日) であるが、人によってまちまちである。これは自らの体力に応じて休みを設定しているためであるが、休市日であっても、漁師から直接仕入れられる場合は行商を行うことがある。

また、調査ではある「いただきさん」の行商に密着し、行商の様子を記録した。この「いただきさん」の 1 日の平均来客数は 32 人であり、その内女性の顧客の平均は約 29 人、また 60 代以上の顧客の平均は 27 人であった。そして、顧客の平均滞在時間が 3.7 分であったことを鑑

みると、この「いただきさん」の顧客は 60 代以上の主婦かつ常連がその大半を占めていることが明らかになった。特に来客数は常に 30 人以上もの顧客が訪れており、6 分に 1 人のペースで顧客が訪れていることになる。そうしたこともあってか、売上も 1 日に 3 万円を超える売り上げを続けていた。

行商で扱う魚種は1日平均19種類であった。仕入れにおける鮮魚の選択は主に 5 種類であり、売れ行きにあわせたもの、顧客に頼まれていたもの、気候に合わせたもの、旬に合わせたもの、顧客の嗜好に合わせたものである。売れ行きに合わせて商品を仕入れるのは商売の基本であるが、市場で安く買いつけられたからといってその鮮魚が行商場所で売れるとは限らない。後述するように顧客も調理に手間がかかる鮮魚を敬遠する傾向にあり、コイワシやワタリガニ、エビなどは売れ行きに合わせて仕入れが選択されていた。顧客に頼まれていたものとはほぼ注文品であるが、この他にも買い渋る顧客が「○○があれば明日買う」のような曖昧なものでも仕入れに反映されることがある。気候に合わせたものとは旬とは異なり、顧客である主婦の手間に関係している。例えば、夏場は火を使う調理が避けられる傾向にあるため、「いただきさん」はそのことを察知し、火を使用しない調理法 (具体的には刺身) で食べることのできる魚種を多めに仕入れることが多い。旬に合わせた仕入れは、瀬戸内海で漁獲される鮮魚の旬に合わせた仕入れである。例えば春にサワラやワタリガニを仕入れたり、初夏にマナガツオを仕入れたりする選択である。また、顧客も鮮魚の旬を把握しており、旬の鮮魚を仕入れることで多くの売り上げを期待することができる。顧客の嗜好に合わせた仕入れは主婦の嗜好だけではなく、主婦の夫の嗜好と旬に関係している。例えば、ワタリガニのように調理に手間がかかるものでも、夫の嗜好により選択されることがあるので、そのことを見越した仕入れが行われる。また、鮮魚の希少な部位 (例えばマコ) も同様に仕入れられ、携帯電話を用いて顧客に入荷情報が伝えられる事がある。

そして販売の場面においても「いただきさん」は定点型行商を営むことにより、いつも同じ時間・場所にいるということから信頼獲得のきっかけを作り、豊富な商品知識や細やかなサービスなどの会話・対応で顧客からの信頼を獲得して、信頼から顧客の維持・拡大を行っている。このような流れで獲得された顧客、常連は良い顧客となるため、「いただきさん」も顧客らを信頼することによって、相互の信頼関係が構築されていくと考えられる。

4. 行商の地域的展開

「いただきさん」は基本的に人通りの多い道に沿って分布しており、かつ食料品店や百貨店、スーパー、コンビニの近で行商を営んでいた。スーパーやコンビニは周辺人口を調査して出展される傾向があるため、このことを加味して、行商分布と周辺地区の世帯数を検討すると、「いただきさん」が行商を行う場所の背後は多くの世帯を抱えていることが明らかになった。また、商店街で行商を行う、「いただきさん」は商店街という性質上、高松市域からの集客を見込んでいると推察される。このことから、「いただきさん」が商店街を除く市内中心部に分布せず、円を描くようにつの字に分布しているのは、市内中心部はドーナツ化現象により、世帯数が少なく、高松市郊外から市内に向かって買い物などに出かける人々に鮮魚を販売するためと考えられる。また、スーパー周辺に「いただきさん」が多いのは、買い物に向かう人々の導線を捉えたものと考えられる。

また調査地概要において、高松市内が平坦である旨を述べたが、平坦であるために、自転車による移動が容易であり、つの字を描くような

地理的展開が可能であると考えられる。さらに古地図から、高松市内ではかつて路面電車が運行されていたことが明らかになった。それらは戦前に廃止され、戦災復興事業にて行商を行うことができる広い歩道の用地が確保された。それにより、現在も高松市において、「いただきさん」が営業を続けることができるのではないかと考えられる。

5. 現代における行商の意義

「いただきさん」の行商について、生産から消費までの過程に考察を加える。まず、高松市で主に操業されている漁法は小型底びき網漁である。底びき網漁は、海底を網でひく性質上、混獲が多く、漁獲物は種類が多くなるものの量が少なくなることが非常に多い。こうした、小型底びき網の鮮魚を、市場を介さずに直接、消費者に販売することは、地域漁業の支援となり、販売者である「いただきさん」は地域漁業を支える存在として考えることができる。

また鮮魚販売の場面について考えると、行商中に「いただきさん」は鮮魚それぞれに適した調理法や、鮮魚に対する知識を顧客と伝達していた。このことは、「いただきさん」が行商により魚食文化、特に高松市域独特の魚食文化の普及・維持の役割を果たしていると考えられる。魚食文化は香川県高松市から元々あるものではあるが、それが維持・継続されるためには、文化の担い手が必要となる。「いただきさん」はその担い手として機能していると考えられる。そして、魚食文化の普及・維持は需要から再び地域の水産業を支えることにつながっている。

漁業の環境的側面で生み出された「いただきさん」は行商を営むことにより、地域漁業を支え続けてきた。そして、魚食文化を普及・維持することで、更に漁業の文化的側面に貢献している。このように、「いただきさん」の行商を地域漁業の生産から消費までの過程において分析すると、「いただきさん」は鮮魚の販売を通して地域漁業を支えるだけではなく、魚食文化の伝達としても機能し、漁業の文化的側面に貢献しているのである。

産地型行商である「いただきさん」は他の産地型行商が衰退する中で、数々の要因が重なり、現在まで行商を存続させることができた。

1 つ目は、香川県魚介類行商条例や後に全面改正され、制定された香川県魚介類行商に関する条例が鮮魚行商に有利な条例であったことである。近隣の愛媛県や岡山県では路上で刃物を使用する行商は、条例により禁止されており、京都府では冷蔵車でなければ鮮魚行商を行うことができない。しかし、香川県の条例では、路上で刃物を使った行商が禁止されることはなく、今日まで行商を行うことができた。

2 つ目は高松市の地理と地理的変遷である。市内が平坦な地形であるため、行商が容易であり、かつて市電が運行されていたことから、広い道路用地が確保され、歩道も広く、路上で行商を容易に営むことができた。また、気候では雨が少なく日照時間が長いこと、気候が温暖なことは、行商にかかる肉体的負担が少ない。

3 つ目が、高松市での漁業形態である。高松市における漁業は小型底びき網という、多種少量の漁獲が主になる漁法が中心であり、行商に適した漁法であったことである。

このような条件を利用し、「いただきさん」らは時代に対応した、運搬手段を選択し、行商を営み続けた。彼女らは、顧客獲得のため、背後に世帯数の多い地域を持つように、つの字に分布し、行商場所を広げた。顧客らが、高松市郊外から市内中心部に向かう導線上で「いただきさん」らは行商を営み、人の群れが通る道に網をひいたかのように「いただきさん」らは分布している。また、新規就業者が、居住地から遠方で行商を営むことができるようになった

のは運搬手段である「横付け」の影響が大きい。

こうして、行商を営んできた「いただきさん」は人々の動線を意識し、家々を訪問する移動型行商から動線上に展開する定点型行商に移行した。この移行により、同じ場所同じ時間にいること、商品知識の豊富さや顧客の細やかな要望に応え続けたことから、顧客との相互の信頼を構築するに至った。また、定点型行商に移行した結果、地域の情報に詳しくなり、顧客の高齢化と相まって、地域の高齢者を支える機能を発揮し、地域を見守る存在であることが明らかになった。こうした、相互信頼の構築の中で、「いただきさん」は会話を発生させ、魚食文化の普及・維持を担ってきた。このような会話の発生は、「いただきさん」らを漁業の多面的機能より生まれた副産物から、地域漁業を支える存在に変化させ、魚食文化を支えることにより、漁業の文化的側面に貢献することとなった。

このように、「いただきさん」は市井に漕ぎ出した舟として、地域漁業の存続や漁業の文化的側面に貢献しているのである。

アカネとエリコができるようになったこと —猿回しのサルと調教師の相互行為

盛 恵理子・島田 将喜
帝京科学大学アニマルサイエンス学科

1. 序論

猿回しとは、サルと人間が一緒になって「芸」をする日本の伝統芸能である。廣瀬 (1979) によると、「猿廻しについての記録が比較的多くのこされている江戸時代は、この芸能の最盛期であり、猿廻し芸への人々の愛着は深い物があった」(p.147) とある。このように古くから存在しているが、詳しい来歴は不明であり、調教法が確立され、公開されたのは昭和になってからだった。

猿回しのサルの調教はイヌやオットセイとは違い、エサを報酬としたオペラント条件付けは用いない。村崎 (1982) によると、「正当な調教法は、いたわりを基本として、絶対にムチをいれないということであった」(p.79) とあるが、この方法は失敗に終わっている。それに対して、「ここまできて、タローになぜ直立二足歩行ができなかったか、原因がわかった。徹底的な甘やかしと追従である」(p.105)、「やさしゅうに、いたわっちょったら、サルは絶対に芸をやるようにならんよ。こうしてゲジ（折檻）をして、ゲジをして、徹底的にゲジをせんにゃあ、人間のいうことは聞かんし、一人前のサルにゃあ、なれんのよ」(p.100) とあるように、嫌悪刺激による調教が一般的であった。

しかし、著者 (盛) 自身が猿回しをやってみる機会を持ち、サルを預かり調教するなかで、エサを報酬として用いた調教ができそうだと考えるようになった。心理学では、「動物の学習と行動のしくみの多くは、(無脊椎動物から人間まで) すべての動物に共通している」(中島 2002: まえがき) とあり、オペラント条件付けは動物を選ばない普遍的な学習原理であり、事実ニホンザルに対しても多くの心理学実験がエサを報酬として実施されている。実際に「芸」を覚えさせてみると、この方法で、できるようになった。

一方、調教場面を撮影した映像を見ていくうちに、サルだけではなく調教師も行動を変化させているように見えた。

今まで考えていた古典的学習モデルによる調教は、「芸」という情報の担い手である人間 (model) がそれを持たないサル (novice) に対して情報を一方的に伝えることであって、人間の動きには変化がないはずである。

よって本研究では、エサを用いたオペラント条件付けの有効性を検討するとともに、サルと

調教師それぞれの行為が調教プロセスを通じて、どのように変わってゆくのかを、「芸」を両者の相互行為として見做すことで明らかにする。

2. 方法

2.1. 覚えさせる芸

「ケーレイ」:サルが調教師の動きに合わせ、右手を額につけること。サルの右手が額についたら成功とみなし、報酬のレーズンを与える。

2.2. 撮影・分析

調査期間は、8 月 24 日、25 日、26 日を前半、9 月 7 日、9 日、10 日、11 日を後半とした 7 日間であり、1 日 20 分 (1200 秒) の調教を全て撮影した。分析で用いたのは 7 日間、計 2100 秒のデータである。動画解析ソフト ELAN を用い、右手が所定位置からの開始コマ・終了コマを記入した (Kendon 2004; McNeill 2005; 坊農・高橋 2009)。

2.3. 調査個体・調査場所

アカネ：ニホンザル (*Macaca fuscata*)。2009 年生まれ♀ (4 歳＝芸歴)。既得の「芸」に、「二足立ち」、「人間が出した手の平の上に自分の手を乗せる」、「許可があるまでエサを取らない」などがある。エリコ：調教師 (=盛)。2012 年 9 月～2013 年 6 月まで住み込みで猿回しをする。調査場所は、茨城県にある動物レジャー施設の一室で、アカネとエリコが一緒に寝る部屋である。ここで他の「芸」の調教を行った経験もある。

2.4. ジェスチャー・パフォーマンス・「芸」

本研究では、3 つのレベルに分けて分析する。

ジェスチャー・レベル (動作) : 右手が所定位置 (エリコ: 右大腿部／アカネ: 右背側部) で静止してから額に付き静止するまでの一連の動作。

パフォーマンス・レベル (行為) : アカネのパフォーマンスは、二足立ちし、右手を動かすこと。エリコのパフォーマンスは立ち膝の姿勢で「ケーレイ」と発声し、右手を動かすことである。右手が所定位置から始まっていない、右手が額につかないなどの、不完全なパフォーマンスも存在している。

「芸」・レベル (相互行為) : エリコのパフォーマンスとアカネのパフォーマンスが同時に生じることである。どちらか一方のみが成功する、パフォーマンスが不完全であるなどの、不完全な「芸」も存在する。

3. 結果

3.1. パフォーマンスの総数と「芸」の成功率

「芸」の成功率とはエリコの場合、アカネとエリコ両者とも成功した数をエリコのパフォーマンス全体で割ったものである。 調教 3 日目で、アカネの成功率はほぼ 100%になり、調教 4 日目で、エリコの成功率も 100%になった (図 1)。

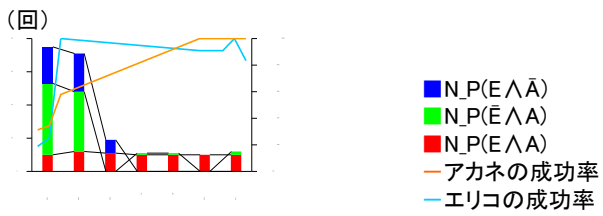

図 1. パフォーマンスの総数と「芸」の成功率

3.2. 調教過程：ジェスチャー・レベル

アカネとエリコのストロークの長さをそれぞれ算出し、グラフに表した。平均値は、両者とも、調教の最初から最後まで変化が少ない。標準偏差は、両者とも、調教を繰り返すごとに減少している (図 2)。

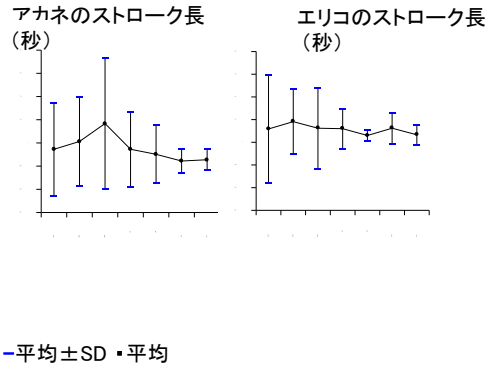

図 2. ストローク長

3.3. 調教過程：パフォーマンス・レベル

不完全なパフォーマンスを含めるパフォーマンス全体の内、完全なパフォーマンスの割合を算出しグラフに表した。調教ごとに、両者とも、徐々にパフォーマンスが完成してゆき、効率よくできるようになっている (図 3)。

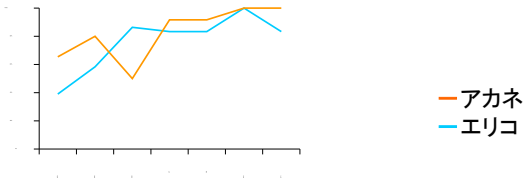

図 3. 完全なパフォーマンスの割合

3.4. 調教過程：相互行為レベル

エリコのパフォーマンスの開始・終了コマに対する、アカネのパフォーマンスの遅れをグラフに表した。平均値は後半で 0 に近づき、標準偏差は後半で減少している (図 4)。

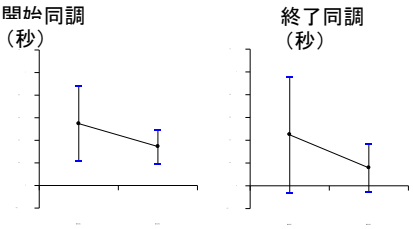

図 4. 開始同調・終了同調

4. 考察

猿回しのサルの調教は、エサを報酬としたオペラント条件付けは用いないとされていたが、3.1. を見ると、「芸」は早い段階で完成しており、猿回しのサルでもこの方法で調教可能であると考えられる。むしろ、エサを用いた方が、罰を用いるよりも早く学習が進んだ。なぜ今までこの方法が使われてこなかった理由を見つけることは、今後の課題である。

一方、サルと調教師それぞれのパフォーマンスは調教プロセスを通じて大きく変化していた。3.2. より、サルと調教師の双方ともストロークの長さが最初はばらつきが大きいのに対し、最後は小さくなっている。古典的学習モデルの説明では、調教師は最初から最後までストロークの長さは一貫しているはずである。3.3. より、アカネもエリコも完全なパフォーマンスの割合は上昇し、所定位置から始まり、所定位置で終わることが多くなったと考えられる。これも、調教師は最初から最後まで完全なパフォーマンスをするはずだといった古典的モデルでは説明できない。3.4. より、お互いのパフォーマンスのそろい方が調教を重ねるにつれ、一貫してきていることが考えられる。

以上の結果は、model から novice への一方的情報伝達という古典的学習モデルでは説明がつかない。逆に、調教過程においては、model のエリコが積極的に novice のアカネのパフォーマンスに合わせて自分のパフォーマンスを変化させていたことが示唆される。すなわち、調教とはサルとヒトの双方が状況と互いに他のパフォーマンスに応じて自分のパフォーマンスを調整し同調させてゆくプロセスのことであり、芸を完成させていく異種間相互行為であると考えられる。

謝辞

本研究を行うにあたり、研究の場を提供して

くださった小高産業東筑波ユートピア職員の皆様、パートナーのアカネには厚く御礼申し上げます。本研究の実施にあたり、科研費 (若手 B) (24720399: 島田将喜) の助成を受けた。

参考文献

中島定彦. 2002.『アニマルラーニング―動物のしつけと訓練の科学』ナカニシヤ出版.
廣瀬鎧. 1979.『猿』法政大学出版局.
坊農真弓・高橋克也. 2009.『多人数インタラクションの分析手法』オーム社.
村崎義正. 1982.『歩け！とべ！三平』筑摩書房.

牧畜活動における在来生態知の習得と実践 ―ケニア・マサイの子どもの事例から

田 暁潔
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

1. はじめに

先行研究によれば「在来生態知 (Indigenous Ecological Knowledge: IEK)」とは、伝統的な生活様式を維持している先住民が、自然資源と直接にかかわる日常生活の諸活動のなかで積み上げてきた自然環境に関連する知識の総体である (Berkes 2008; Houde 2007)。IEK をもつ先住民は、社会環境および自然環境の急速な変化に対して鋭い感受性と柔軟的な適応能力を有している。そして、近年のクローバルな気候変動および自然災害に対して、彼らは日常的な IEK を応用しつつ対処しており、そのことは高く評価されている。一方、世界各地で近代化をめざした開発が進み、先住民の生活に大きな変化をもたらしている。こうした背景のもとで、IEK がどのように活用され、また変化していくのかは、生態学および生態人類学の分野における重要な課題のひとつになっている (Berkes 2009; 寺嶋 2011)。

本研究の目的は、牧畜社会における子どもたちの日常生活に焦点をあて、どのように IEK が習得・実践されているのかを解明することであった。

東アフリカ・ケニアで牧畜を中心とする生業を営んでいるマサイにとって IEK は、マサイの文化と生業を支えるだけではなく、自然環境の持続的な利用を可能にしてきた。本研究ではマサイがもつ多様な IEK のなかで、特に、彼らが営む在来的な牧畜活動のなかで、自然資源を活用するために使われる IEK が、いかに習得され実践されているのかを中心に考察する。

2. 調査地

調査地の Iltilal 村落はケニア・カジアド県の東南部にあるクク・グループランチの東に位置している。年間降水量が 500mm 以下のこの地域は、主として草原や灌木林地および火山溶岩林地から構成され、ライオンやゾウ、ハイエナなどの野生動物にとって重要な生息地でもある。先行研究の中に、主な自然災害である旱魃は、1920 年代から 14 回も記録されている (Rutten 2005; Western et al. 2009; KWS 2010)。特に、2009 年に発生した大旱魃のときには現地住民が 80%以上の家畜を失い、大きな被害をうけた (KWS 2010)。先行研究によると、2011 年にクク・グループランチ全域の平均の家畜保有数は一人当たりヤギ 12 頭、ヒツジ 7 頭、ウシ 13 頭であったが、現地住民のほとんどは家畜をさらに増やしていくとこを望んでいる (Wangai et al. 2013)。

20 世紀後半からは、定住化・牧草地の私有化・義務教育の普及といった近代化政策がすすみ、調査地のマサイは、牧畜以外にも農業や観光業などに積極的参加している。しかし、町から離れた草原では、家畜とともに暮らす伝統的

な生活様式はあまり変っていない。

3. Iltilal 的な自然資源利用と牧畜管理

Iltilal のマサイは土地に関して詳細な分類をしている。約 90m^2 の土地で確認された 40 以上の地名の意味を調べたところ、12 種類の地名が地形、15 種類が現地の植生、4 種類が動物の棲息特徴を示していた。そのほかには、人と土地の関わりを示す地名や人名を使った地名などがある。細かく識別された土地に、その土地の特徴に従って、現地のマサイは自らの活動範囲を規制している。具体的には、水源から近くて人口が集中する地域を居住区に、主として放牧などの活動を行なう地域を非居住区としている。非居住区はさらに、牧草が豊富にあり、仔ウシとヤギ・ヒツジの放牧しかできない放牧保護地 (olopoloni) と、どの家畜も放牧できる地域に分けられている。彼らは、季節と植生の変化および家畜の成長段階、生理的状態の変化を勘案しつつ、移動範囲を変えながら牧畜活動を行なっている。

日常生活においてマサイは、家畜を個体識別したり、家畜群をいくつかに分類して管理したり、あるいは、家畜の生殖行動や健康状態を管理している (e.g. Bekure et al. 1991; Homewood 2008)。こうした家畜管理のなかでは IEK が活用されており、IEK は日常生活の中で牧畜活動を通して習得されているともいえる (表 1)。たとえば、色、模様など家畜の身体的特徴と関連する IEK が、家畜の認知や命名、印付けなどの活動に活用されている。

牧畜活動には家族全員が何らかのかたちで参加しているが、その内容によって活動範囲は居住区から非居住区へ拡大していく。以下には子どもの活動を中心に述べる。

表 1. 日常活動における家畜管理とそれに関連するマサイの **IEK**

家畜管理	家畜に関するマサイの IEK	IEK の習得と実践の具体例
個体認識と分類	身体特徴 : 色と模様、角のかたち、血縁関係など 社会的特徴 : 贈与由来など	名付け、印付け (耳と体にマーク)、放牧など
家畜群の分類	成長段階、移動範囲、採食の特徴、繁殖など	搾乳、放牧など
生殖管理	品種に関する分類など	去勢、放牧中の家畜管理など
健康管理	身体的特徴 : 毛並み、皮膚、寄生虫、行動など	放牧、塩の配布、給水、行動観察など

4. 子どもが参加する牧畜活動

調査地では学校教育の普及によって、多くの子どもたちが学校に通い始めた。一方、日常生活のなかで子どもたちは、家畜管理と関連する諸活動に頻繁に参加している。彼らの日常活動を調べるために、ひとつのホームステッドで暮らす 19 人の子どもを対象に、28 日間の聞き取り調査と参与観察を行なった。

まず、学校に通っている子どもであっても、全員が積極的に牧畜活動に関与しており、成長段階に応じて異なる時間帯において参加していることがわかった。子どもたちの一日の生活は朝の 4 時半頃から始まる。順次に起床後、高学年生 (小学校 4–8 年) が搾乳を、未就学児が幼獣群と成獣群の分離をおこない、低学年生 (小学校 1–4 年) は搾乳と家畜群の分離の両方を手伝う。未就学児は午前中にはホームステッドの近くで家畜の幼獣と一緒に遊ぶことが多い。昼頃には低学年の子どもたちが帰宅し、幼

獣の居場所を必ず確認したあと、未就学の子どもたちや幼獣群とともにホームステッドの近くで遊ぶ。午後 5 時近くになると子どもたちは、放牧から帰ってきた成獣群をホームステッドの近くに誘導し、搾乳したあとで幼獣群と成獣群を合流させ、その後、両者を分離する。午後 6 時過ぎには高学年の子どもたちが帰宅し、宿題の前には必ず家畜を家畜囲へ誘導したり、搾乳するなどの牧畜活動に参加する。

子どもたちが参加したおもな牧畜活動は、搾乳 (平均一人あたり週に 5 回以上)、放牧 (週に 2 回以上) および家畜の世話 (週に 3 回) である。さらに、男の子は放牧 (週に 5 回以上)、女の子は搾乳 (週に 6 回以上) に参加する頻度がもっとも高く、マサイ社会の伝統的な男女分業と類似している。活動範囲を見ると、歩けるようになる幼児時代から牧畜活動へ参加しはじめ、成長にともなって居住地から遠く離れた放牧地へと移動範囲が拡大していく。たとえば、幼児が参加している搾乳は家の近くで行なわれているのに対して、身長 130cm (約 8 歳) の牧童は家から 15km ほどの範囲で日常的に家畜放牧をしている。

子どもたちが参加する牧畜活動では、子ども同士の協働がよく見られる。こうした活動における会話や共同作業を通して、IEK が子ども同士のあいだで伝達される。

5. 在来生態知の習得と実践：二人の牧童の日帰り放牧の事例

子どもたちによる IEK の習得と実践の過程を示す事例として、二人の牧童の日帰り放牧をとりあげる。

身長約 135cm (約 8 歳) の S くんと約 155cm (約 12 歳) の K くんは異母兄弟である。二人とも父親と一緒に放牧をした経験があり、現在は雨季にヤギ・ヒツジと仔ウシの家畜群の日帰り放牧をしている。ある日、二人の牧童は家畜をつれてホームステッドを出発し、見通しの良い灌木草原をとおって、見通しの悪い溶岩林地を通過したあと、平坦な草原地域に入った (図 1)。1 時間の休憩を取ったあと、二人は居住区にある家畜飲水用の井戸に家畜を連れて行き、その後、家畜のペースに合わせてゆっくりとホームステッドまで帰った。

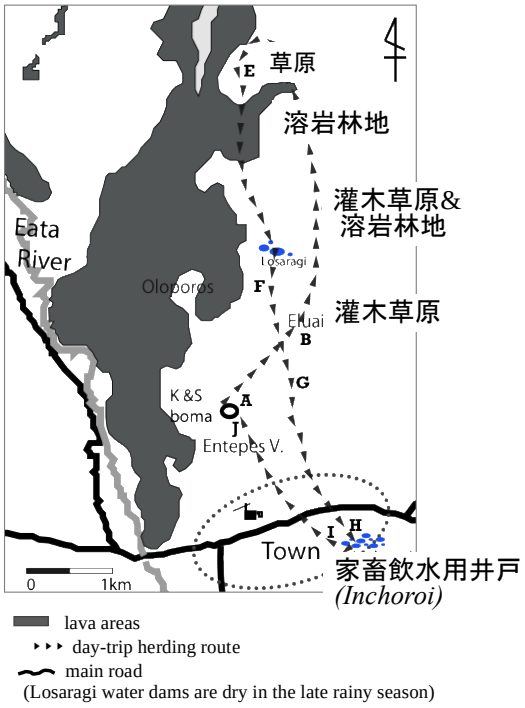

図 1. 日帰り放牧の経路の事例

この日の約 8 時間の日帰り放牧に、牧童たちは家畜と一緒に合計約 15km を移動した。牧童たちは周囲の環境変化に深く注意を払い、家畜に指令を出したり、危険な野生動物の存在を確認したりした。見通しの悪い場所やほかの家の家畜群との合流が発生しやすい居住区内では、牧童たちは石を投げたり声を出したりして、頻繁に家畜に指示を与えていた。一方、牧草地に移動したあとでは、牧童は家畜群から目を離し、遠く眺めたり、地面に残っている足跡や糞などを確認したり、野生動物の存在を注意深く観察したりしていた。二人の牧童は、自分で確認したことをその場でお互いに話し合った。そして、

そのことを放牧の途中で出会ったほかの牧童にも伝え、その牧童から行き先の情報を得ていた。

6. おわりに

サバンナでは、気候や植生の変化、および野生動物の移動などにより、自然環境の変化が日常的に起きている。予測できない複雑な変化をどう認知し、いかにそれに対処するのかは牧畜活動に参加する子どもたちの日常課題である。子どもたちは、牧畜活動のなかで常に協働し、対面している自然環境の変化に柔軟に対応しようとしている。言いかえれば、子どもは牧畜活動に高頻度で参加し、広範囲を移動することによって、日々変化する自然環境と対面する機会を得ている。こうした活動の日常的な繰り返しをとおして、子どもたちは総合的に IEK の習得と実践を行なっている。

調査当時、牧畜活動を行なう子どもたちは自らの経験をとおして得た情報をおとなにも伝えていた。IEK の習得と実践の過程において、IEK は一方的に親から子へと伝承されるのではなく、相互的なインタラクションによって構成されている。その点も含めて、IEK の習得と実践の過程を更に深く解明するために、今後には、調査範囲を子どもと各世代とのかかわりへと拡大していきたい。

参考文献

Berkes, F. 2008. *Sacred Ecology*. 2nd ed. Routledge.

–2009. Indigenous ways of knowing and the study of environment change. *Journal of the Royal Society of New Zealand* 39(4): 151–156.

Bekure, S., Leeuw, P.N., Grandin, B.E. and Neate P.J.H. (eds.) 1991. *Maasai Herding: An Analysis of the Livestock Production System of Maasai Pastoralists in Eastern Kajiado District, Kenya*. International Livestock Center for Africa.

Homewood, K. 2008. *Ecology of African Pastoralist Societies*. James Curry Ohio Unisa Press.

Houde, N. 2007. The six faces of traditional ecological knowledge: challenges and opportunities for Canadian co-management arrangements. *Ecology and Society* 12(2): Article 34.

Kenya Wildlife Service (KWS). 2010. *The impact of the 2009 drought on wildlife, livestock and tourism in the Amboseli ecosystem: recommendations for prompt action and ecosystem restoration*. Kenya.

Rutten, M. 2005. Shadow wells: A sustainable and inexpensive alternative to boreholes in Kenya. *ASC Working Paper* 66. Africa Studies Center, Leiden.

Wangai P., Muriithi, J.K. and Koenig, A. 2013. Drought related impacts on local people's socioeconomic life and biodiversity conservation at Kuku Group Ranch, Southern Kenya. *International Journal of Ecosystem* 3(1): 1–6.

Western, D., Groom, R. and Worden, J. 2009. The impact of subdivision and sedentarization of pastoral lands on wildlife in an African savanna ecosystem. *Biological Conservation* 142(11): 2538–2546.

寺嶋秀明. 2011.「ヒトの学習行動―狩猟採集民・子ども・遊び」『狩猟採集民の調査に基づくヒトの学習行動の実証的研究，交替劇 A-02 班研究報告書』1: 1–6.

モンゴル遊牧民候補は夏につくられる

風戸 真理
北星学園大学短期大学部

1. はじめに

モンゴル国では、日本の約 4 倍の面積に約 287 万人 (2012 年現在、以下同様) が暮らしているが、統計的には、その約 66%が都市部に、約 46%が首都ウランバートル市に集中している (NSO: National Statistical Office of Mongolia 2013a: 82–83)。モンゴル国の GDP においては、鉱工業が農林水産業を越えて第 1 位の座を占め (同上: 127)、牧畜を主な生計手段としている者は人口の約 10%にとどまる (同上: 222)。このような状況のもと、モンゴルの遊牧民は近年しばしば、子どもには学歴をつけて都市でホワイトカラーとして就職してもらいたいと語る。では、モンゴルの遊牧は終わるのだろうか？

モンゴルでは 20〜21 世紀の激動の社会変化のもと、遊動的な牧畜が、変化しながら続けられてきた。地球上に遊牧の民が生活する乾燥地域は広く、遊牧民を擁する国家は多い。ユーラシアでは、アフリカのサヘルから中国の長城以北地域の多くの地域にまたがる。そのなかで、モンゴル国の社会状況はきわめて特異である。それは、モンゴル国の人口の約 95%がモンゴル系の民族であり (2010 年現在) (同上 2013b)、都市住民・牧畜従事者ともにそのほとんどがモンゴル語を話すモンゴル人であるといえる点にある。つまり、モンゴル国においては、都市と地方に暮らす人びとの差異は民族・言語的なものでなく、生計手段と生活様式の違いである。モンゴルの都市生活者は遊牧民のなかから出てきた人びとなのである。

本稿は、モンゴルの遊牧の何が、どのように変わったのか、そして、現代モンゴルの遊牧民はどのような生き方を志向しているのかを検討する。具体的には、1910 年代〜2013 年に生きてきた、ひとつの親族集団につらなる 26 人の人びとが、草原と都市とにまたがる広い生活空間でどのように暮らしてきたのか、その経験を居所と職業の選択に注目して分析する。そのさい、とくに夏に草原で過ごす時間が人びとの人生におよぼす影響を検討する。

2. モンゴルの近代化と学校教育

モンゴルでは、1921 年の人民革命以降の約 100 年間に、近代化・工業化・都市化が進められてきた。そしてモンゴルの遊牧は、1920 年代以降の社会主義的な近代化、1990 年代からの民主化・市場経済化への移行、21 世紀以降の急激な経済発展、という 3 段階の大きな政治・経済的な変化を経験し、その形を変えてきた。

草原では、牧民が移動しながら家畜に草地で採食させる遊動的な牧畜が続けられる一方で、牧民の労働組織と家畜の所有のあり方が変化してきた。1950 年代からは、牧民と家畜が、社会主義的な牧畜協同組合という近代的な組織に組みこまれ (風戸 2006a)、1990 年代には、組合化以前と近いかたちである個人経営に変わった (風戸 2003)。都市では、人びとは学校教育 (モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988: 421–425) や兵役 (娜仁格日勒 2010: 148) の経験をとおして、集団的で定住的な生活に自らを慣らしてきた。

近代化にともない、モンゴルの人口は激増した。1935 年に約 74 万人であった人口は、約 80 年間で 4 倍近く増加した (図 1)。増えた人口は労働力として都市に吸収され、都市化が進んだ (小長谷 2003)。モンゴルの都市化率は、1969 年の 44%から、2010 年には 67.9%にはねあがった (Niisleliin zasag dargyn dergedeh statistikiin gazar 2012)。

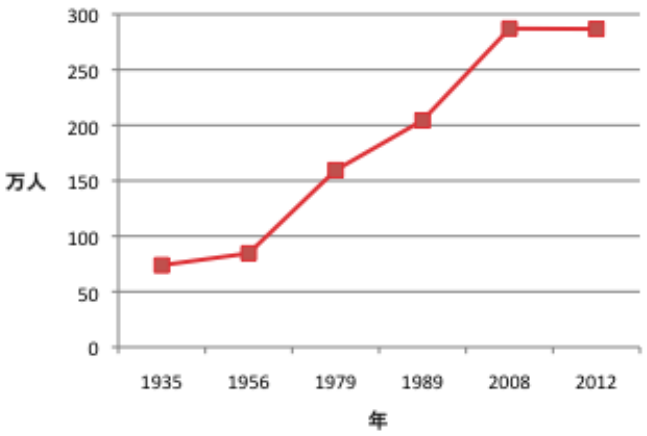

図 1. モンゴル国の人口推移 (http://ja.wikipedia.org/wiki/モンゴル人民共和国より作成)

モンゴル国には都市が 3 つある。首位都市は首都ウランバートル市 (人口 129 万人) であり、これに工業都市ダルハン市 (12 万人) とエルデネト市 (9 万人) が続く。その他の定住区としては、行政区画としての 21 の県があり、それらの県の中心地と、県の下位区分にあたる郡の中心地がある。

地方に暮らす人びとは、家畜を飼育しながら、県や郡の中心地と草原とを行き来している。この移動は子どもの通学を中心とした家族の発展段階に対応していて、短期と長期の 2 つのパターンに分けられる (風戸 2002: 72–73)。短期の移動は季節移動、つまり 1 年のうちで季節によって居所を変えるものであり、長期の移動は世帯の発展サイクルに合わせて、数年のスパンで居所を変えるものである (同上: 73)。

モンゴルの学制は民主化以降、10 年制 (4・4・2 年制) を基本とし、子どもは約 6〜16 歳のあいだに無償教育を受ける。これに応じて、子どものいる牧畜家族には原則として、就学前に草原、通学期間には定住区、卒業後に再び草原、という居所選択が必要になる。彼らは、牧畜の経営と子どもの通学という二つ要求を調整するため、世帯間・世帯内でさまざまな工夫をしてきた。世帯間では、一方が定住区で子どもをケアして通学させ、他方が草原で両家の家畜を預かって飼育するという、預受託による協力がおこなわれている (風戸 2006b: 14)。また、母子あるは子どもたちだけが定住区で学校に通い、父が単身赴任で、あるいは父母が草原で家畜の世話をするという世帯の分割もみられる (風戸 2002: 70–71)。

3. 調査地・調査方法

1910 年代〜2013 年に生きてきたひとつの親族集団につらなる 4 世代・26 人の、草原と都市をまたがる移動と生活の経験を分析した。調査は、モンゴル国ボルガン郡とウランバートル市において 2013 年 8〜9 月におこなった (図 2)。ボルガン郡は、鉱山都市であるエルデネト市近郊の牧畜地域である。

調査対象はボルガン郡出身・在住の 2I (62 歳、女性) とその拡大家族であり (図 3)、乳児と故人を含む合計 26 人が人生のなかで住んだ場所と従事した活動に関する情報を収集し、これらを世代・ライフステージ・季節の 3 側面から分析した。調査時点では、故人をのぞく 22 人は 5 つの世帯に分かれて、2 世帯がボルガン郡 (草原) に、3 世帯がウランバートル市に本拠地をおいていた。

彼らの居所を、草原 (県や郡の中心地を含む) と都市 (ウランバートル市・ダルハン市・エルデネト市) に分けた。世代は血縁関係によって 4 つに分けた。各世代の人数は、第 1 世代 (1910 年生まれの故人) が 4 人、第 2 世代 (60 代) が 2 人、第 3 世代 (30〜40 代) が 8 人、第 4 世代 (0〜20 代) が 12 人であった。個人のライフステージは、(1) 子ども期、(2) 学校期、(3) 大学期、(4) 中年期、(5) 定年後、の 5 つに分けた。季節については、モンゴルには四つの季節がある (風戸 1999: 22–35)。「秋・冬・春」

にひとところに、「夏」に別のところにいるパターンがみられたので、この 2 つに分けた。

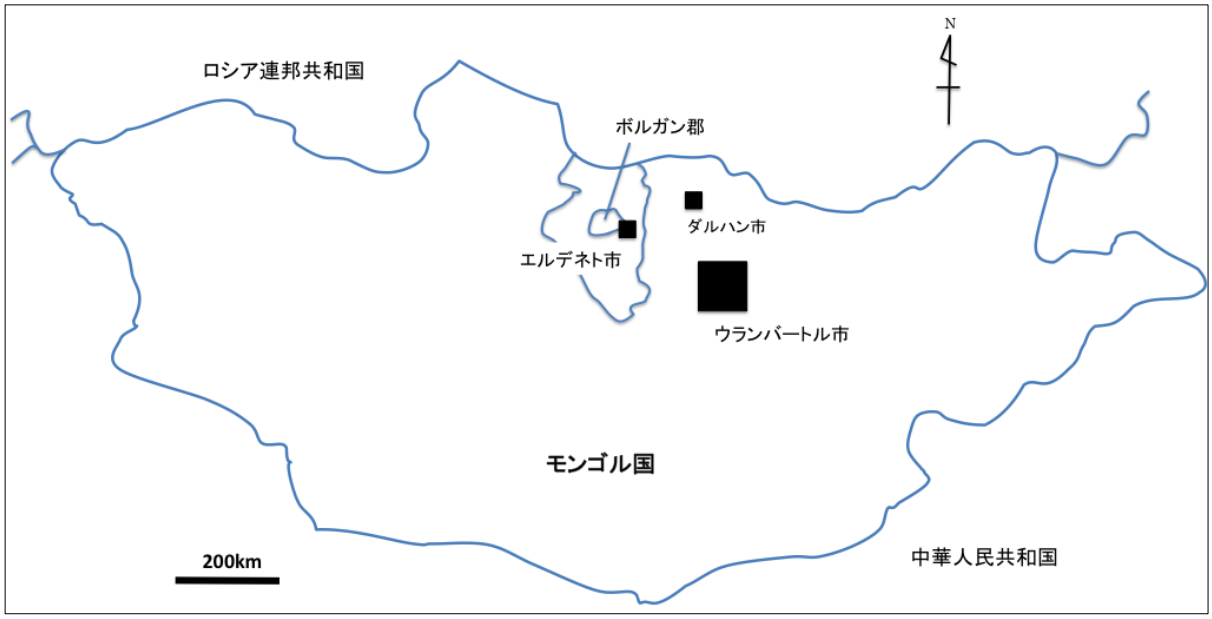

図 2. 調査地

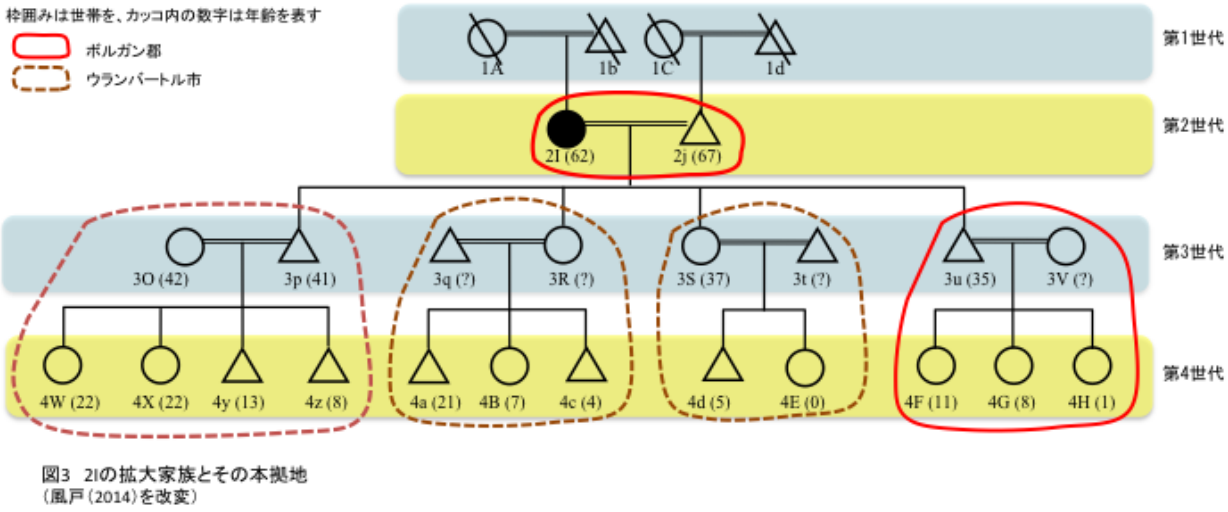

図 3. 2I の拡大家族とその本拠地 (風戸 2014 を改変)

4. 結果

各人のライフステージごと、季節ごとの居所を表 1 に示す。この表から次の 2 点が読みとれる。ひとつめに、すべての人が草原と都市の両方に住んだ経験をもつこと、ふたつめに、季節としては夏に草原に滞在する傾向が高いということである。

4.1. 草原と都市の両方で生活する

以下に、草原と都市での生活を、世代・ライフステージ・季節の 3 つの側面から具体的に示す。まず世代に注目すると、個人記号の一桁目の数字が世代を表しており、第 1・第 2 世代はライフステージの半分以上の時期を草原で、第 3・第 4 世代は半分以上を都市で過ごしていることがわかる。つぎにライフステージについては、草原で生まれた者は就学・就労・退職をきっかけとして都市に移動し、反対に、都市の学生や労働者は就労や退職を機に牧畜セクターに移動していた。最後に季節であるが、全ての人が草原で過ごした経験を有する季節は、夏であった。

表 1. 家族メンバーのライフステージと居所 (風戸 2014 を改変)

No.	個人記号	年齢	居住地									
			(1)子ども期		(2)学校期		(3)大学期		(4)中年期		(5)定年後	
			春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏
1	1 A	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
2	1 b	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
3	1 C	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
4	1 d	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
5	2 I	62	○	○	○	○	■UB	○	■DH／EN	○	○	○
6	2 j	67	○	○	○	○	■UB	○	■DH／EN	○	○	○
7	3 O	42	○	○	○	○	■UB	○	■UB	○	−	
8	3 p	41	■DH	○	■DH	○	■UB	○	■UB	○	−	
9	3 q	n.d.	■UB	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	■UB	○	−	
10	3 R	n.d.	■DH	○	■DH	○	■UB	○	■UB	○	−	
11	3 S	37	■DH	○	■DH	○	■UB	○	■UB	○	−	
12	3 t	n.d.	○	○	n.d.	n.d.	■UB	n.d.	■UB	○	−	
13	3 u	35	■DH	○	■DH	○	■UB	○	○	○	−	
14	3 V	n.d.	○	○	○	○	■UB	○	○	○	−	
15	4 W	22	■DH	○	■UB	○	■UB	○	外国	外国	−	
16	4 X	22	■DH	○	■UB	○	■UB	○	■UB	○	−	
17	4 y	13	■UB	○	■UB	○	−					
18	4 z	8	■UB	○	■UB	○	−					
19	4 a	21	■UB	○	■UB	○	■UB	○	−			
20	4 B	7	■UB	○	■UB	○	−					
21	4 c	4	■UB	○	−							
22	4 d	5	■UB	○	−							
23	4 E	0	■UB	○	−							
24	4 F	11	○	○	■UB	○	−					
25	4 G	8	○	○	■UB	○	−					
26	4 H	1	○	○	−							

○草原、■都市

UB:ウランバートル、DR:ダルハン、EN:エルデネト

n.d.:不明、−:未経験のライフステージ

4.2. ライフステージと居所選択

次に、人びとの居所選択を点数化した (表 2)。草原に住んだ季節を+1 点、都市および外国に住んだ期間を-1 点、不明および外国を 0 点とした。ライフステージの長さには個人差があるが、おおまかにいえば、第 1 世代の 4 人の全人生の居所点は平均+12 点であり、草原が強く選好されていたといえる。世代が下がるとポイントは減り、第 4 世代は-2.8 点と都市を選好していた。世代を捨象してライフステージを比較すると、子ども期 (+0.7)、学校期 (+0.5)、定年後 (+2.0) に草原が高く、大学期 (-3.0) に都市が選好されていた。季節を比べると、「春・秋・冬」の平均は-0.9 点と算出され、「夏」の合計は 1.0 点であった。夏にはその他の季節の約 2 倍、草原が選好されていたといえる。

季節性については、実際の観察からも、人びとが夏休みに草原に集まり、秋以降に都市に移動することが明らかになった。夏休み期間にあたる 8 月 27 日から 8 月 31 日には、生きているメンバー22 人の 77% (17 人) がボルガン郡に滞在していた。ところが、学校の新学期を翌日にひかえた 9 月 1 日にその多くがウランバートル市へ移動し、ボルガン郡に残ったのは 36% (8 人) であった。

表 2. 草原を居所として選好する度合い (風戸 2014 を改変)

世代	(1)子ども期		(2)学校期		(3)大学期		(4)中年期		(5)定年後		合計	平均
	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏*	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏		
第1世代	12	4	12	4	0	0	12	4	−12	12	48	12
第2世代	6	2	6	2	−6	−6	−6	2	6	6	12	6
第3世代	−6	7	−6	6	−21	6	−12	8	0	0	−18	−2.3
第4世代	−18	12	−24	9	−9	3	−6	0	0	0	−33	−2.8
ライフステージの合計	19		9		−33		2		12		9	0.3
平均	0.7		0.5		−3.0		0.1		2.0			

*大学期の夏のみ居所がわからない者(3t)がいるが、大学期の選好度合いを算出す分母は、3tをのぞいた11人とした。

以上をまとめると、2I 家族の百年史から次の 4 つが示された。すなわち、全員が都市生活と草原生活の両方を経験していた。時間との関係では、世代が進むと都市での生活が長くなる傾向があった。個人の人生とライフステージのなかでは、全世代に共通して若年期と年長期に草原に、そして、季節としては夏期に草原に住む傾向がみられた。

5. 夏の草原の魅力

ここで、全世代の人びとが体験している夏の草原での生活とはどのようなものなのかを検討する。

最初に、モンゴルの子どもをとりまくフォーマル／インフォーマルな社会化環境のあり方を検討する。モンゴルでは、子どもは 3 歳頃から祖父母や親戚の家にひとりで宿泊・滞在するようになる。大人は他家を訪問したさい、気に入っている子どもに「一緒に行くか」などと言って自宅に誘い、子どもが応じると連れて帰る。初めは 1〜2 泊で帰宅するが、慣れると数週間、長いと養子のように住みこむこともある。このようにモンゴルでは、個人単位の移動とネットワーク的な社会関係の構築が幼児期から奨励され、いわばノマドの早期教育がおこなわれている。

その一環として、都市の子どもは夏に草原の祖父母のもとで過ごす。子どもにとっての草原の魅力として、2I (62 歳、女性) は「馬乳酒が飲める」ことをあげる。新鮮な馬乳酒は

夏の草原の醍醐味である。親たちが子どもを草原に送る理由については、4X (22 歳、女性) が次のように語った。「草原には家畜がいるので子どもたちは働くことを覚える。そして、空気がきれいで、乳製品が食べられる」。子どもは都市ではパソコンや携帯の画面に向かってぼんやりと過ごすことが多いが、草原で家畜の世話をすると身体と脳が総合的に刺激され、さらには清浄な空気とオーガニックな食べ物が子どもの心身によいというのである。4X はウランバートル市で働く両親のもとに生まれ、エルデネト市とその近郊の草原で暮らす 2I 夫婦とその姉のもとで育った。大人にとっての草原の魅力として 2I は、上記に加えて、ゲルに住むことで公共料金・光熱費がかからず、食費の出費も少ないことをあげた。

一方、モンゴル国の初等教育における就学率はほぼ 100%である (NSO 2013a: 332)。子どもは就学年齢に達する 6〜8 歳になると定住区に住み、学校に通う。しかしながら、モンゴルの夏休みは 6〜8 月の 3 カ月間と長く、1 年の 4 分の 1 にあたる。これを子どもが成人するまでの 20 年間繰り返すと 5 年間分の時間になる。

以上をまとめるとモンゴルの子どもたちは、好きな人と過ごす、自然の恵みを享受するといった理由に加えて、学校が長期休暇であるという条件のもとで、草原に集う。彼らは夏の 3 カ月間に、祖父母をはじめとする年長者たちに生活技術を指導され、また、ふだんは各地に分散しているイトコやその他の親族と出会い、一緒に食事をし、一つのゲルで寝泊まりする共同生活を送る。夏の 2I らのキャンプには、図 3 に描かれていない遠縁や知人の子どもも加わっていて、夏期学校あるいはサマーキャンプのような印象を受けた。

大人もまた、モンゴルでは夏期休暇を 1 カ月取得できる職場が多く、夏に草原に「出る」。モンゴル語で、夏営地への移動ないしは定住区から草原への移動一般を「出る」(*garah*)、冬営地への移動ないしは草原から定住区への移動を「入る」(*oroh*)、その他の方向に移動して居所を定めることを「泊まる、キャンプする」(*buuh*) と表現する。つまりモンゴル人にとって、夏の草原すなわち夏営地への移動には「出る」という語に表現されるような開放感がともなうものなのである。

近年では、地方にも携帯電波のアンテナが設置され、草原にいても携帯電話で都市の用事ができるようになり、夏の草原滞在がしやすくなった。

6. 牧畜のライフスタイルと社会関係を経験する

20 世紀モンゴルの国家統計と 2I の家族の年史からは、モンゴルの人びとが生活の拠点を草原から都市に移してきたプロセスが読みとれた。しかし、個人のライフコースは都市と地方を往還するものであった。

モンゴルの近代化は都市化に特徴づけられ、統計は、20 世紀以降にモンゴルの人口が増加し、草原から都市へ人口が移動してきたことを示している。本研究は、年長世代と比べて若い世代が都市でより長く暮していること、草原の遊牧民が就職・就労・退職を機に都市生活に移ってきたことを明らかにし、モンゴル社会のマクロな変化の実態を実証的に示した。

本研究の人類学的な貢献は、個人に視点をおくことで、統計には表れない、モンゴル人の生き方にかかわる二つの事実をすくいあげたことにある。第一に、モンゴルの人びとは昔も今も、夏になると草原の年長者のもとに集まり、地縁・血縁関係でつながる多くの人びとともに牧畜にたずさわっていた。第二に、都市の労働者・学生が、退職や就労を契機として牧畜セクターに移るという動きが複数の世代におい

てみられた。夏に、牧畜という生業と草原の社会関係に親しんだ経験があってこそ、彼らは人生の節目に牧畜を選択することが可能になったのだと考えられる。

夏だけの牧畜体験で本格的就農には足りるのかという疑問があるかもしれない。日本の小中学校では職場体験が、高等教育学校ではインターンシップがおこなわれているが、いずれも短期である。とくに、大学生の企業研修は夏期に多い。これに対してモンゴルの牧畜を、幼児期から通年かつ数年にわたる研修を受けないと参入できない専門職とみなすのはオリエンタリズムなのではないだろうか。本研究には、都市で育ち、大学を卒業した男性 (3u) が職業として牧畜を選択し、10 年以上経営を続けてきた事例が示されている。

モンゴルの自然環境は厳しいが、それと並んでモンゴルにおいては社会環境の変化が牧民の生活に甚大な影響を与えてきた。予測を超えて変動する自然・社会環境に適応するためには、個人の職業的技能にとどまらず、知識・労働力・土地、を融通しあえる広範な社会関係が重要である。

実際、人びとは夏に草原の年長者のもとに集まり、自然に埋め込まれた生活に親しみ、牧畜に必要な技術を習得し、地縁・血縁にもとづく社会関係を構築していた。とくに、子ども期の夏の長時間にわたる草原での生活経験は、牧畜というライフスタイルや牧畜地域の社会関係に対する原初的な愛着を形成していると考えられる。夏という季節は、学校教育制度という近代装置のなかに組みこまれた休暇の時間であると同時に、モンゴルのローカルな時間区分における開放の時でもある。現代モンゴルの牧畜社会は、学校の夏期休暇制度を利用して文化の内的論理を次世代に継承しているといえるのである。以上から、モンゴル遊牧民候補は夏の草原でつくられていることが示された。

付記

本研究は JSPS 科研費 90452292「生産現場における人とモノの関係性にみる社会主義経験の多様性と普遍性」(研究代表: 風戸真理) の助成を受けたものである。

参考文献

風戸真理. 1999.「遊牧民と自然と家畜〜遊動と家畜管理〜」島崎美代子・長沢孝司編『モンゴルの家族とコミュニティ開発』日本経済評論社. pp. 21–50.

– 2002.「モンゴル国の地方に暮らす人々の遊牧と定住をめぐる移動と世帯間協力: ドンドゴビ県デレン郡の一家族の生活史を中心に」『リトルワールド研究報告』18: 49–77.

–2003.「市場経済へ移行する社会における地方に暮らす人々の適応実践–モンゴル国ドルノト県バヤンドン郡の牧畜制度と教育制度の事例より–」『モンゴル研究』21:47–67.

–2006a.「商品世界からこぼれ出る家畜–社会主義および市場経済化期のモンゴル国における家畜の個体性と意味–」『人文学報』93: 25–55.

–2006b.「遊牧民の離合集散と世話のやける家畜たち–モンゴル国アルハンガイ県におけるヒツジ・ヤギの日帰り放牧をめぐる労働の組織化と群れの管理–」『アジア・アフリカ地域研究』6(1): 1–43.

–2014.「草原と都市を往還するノマド : 20 世紀モンゴル国における居住地と職業選択」楊海英編『中央ユーラシアにおける牧畜文明の変遷と社会主義』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 8. 名古屋大学大学院文学研究科比較人文学研究室.

小長谷有紀. 2003.「モンゴル国における 20 世紀」小長谷由紀編『国立民族学博物館調査報告』41: 3–6.

モンゴル科学アカデミー歴史研究所編、二木博史、今泉博、岡田和行訳、田中克彦監修 1988[1969]-1.『モンゴル史 1』田中克彦監修、二木博史、今泉博、岡田和行訳、恒文社.
National Statistical Office of Mongolia. 2013a. *Mongolian Statistical Yearbook 2012*. National Statistical Office of Mongolia, Ulaanbaatar.
–2013b. *Micro Data of Census and Survey*. DDI-MNG-NSO-ENG-PHC-2010-v1.0. (http://web.nso.mn/nada/index.php/catalog/89/datafile/F3/V139)
娜仁格日勒 (Narangerel). 2010.「1960～1980 年代におけるモンゴル人民軍の生活実態―20 世紀のモンゴル社会を解読する 1 つの手がかり―」『国立民族学博物館研究報告』35(1): 139–230.
Niisleliin zasag dargyn dergedeh statistikiin gazar. 2012. Hun am, oron suutsny 2010 ony ulsyn toollogyn negdesen dun: Ulannbaatar hot, Ulaanbaatar.

カツオ一本釣漁船団におけるパヤオ（浮魚礁）設置の操業効果
―沖縄島北部地域を事例に

吉村 健司
総合研究大学院大学文化科学研究科

1. はじめに

現在、沖縄県を代表する漁業種であるカツオ・マグロ漁ではパヤオと呼ばれる浮魚礁での操業が主流である。パヤオとは海面に敷設した魚類蝟集装置 (FAD: Fish Aggregating Devices) である。パヤオは日本では歴史的に古くから利用されている柴漬やシイラ漬などの漬漁と同様、魚類が漂流物に蝟集する習性を利用した副漁具である。

沖縄におけるパヤオは 1982 年に利用が開始された。その後、全県的に普及し、以降、漁師の間では「確実に獲れる漁場」として歓迎され、漁場として選好されてきた。

パヤオ設置以前におけるカツオ・マグロ漁業では、ソネと呼ばれる海底岩礁や鳥群やサメ付群、流木などを探索し、漁場を決定してきた。漁業におけるパヤオ設置のメリットは漁場探索の労力低減、漁業の効率化などといった点が挙げられる。このようなパヤオの利便性は指摘されてはいるものの、それらはパヤオの特性から語られている傾向にあり、それらの実証的研究が展開されている例はほとんど見られない。

そこで、本稿では沖縄県内でカツオ漁が盛んな地域である本部町で操業を行っていたカツオ一本釣漁船団・第三裕得丸 (以下、裕得丸) の漁業日誌からパヤオ設置の操業効果およびその意義を明らかにすることを目的とする。

2. カツオ漁の漁場

カツオ漁の漁場は大きく分けて二つある。一つはソネと呼ばれる海底岩礁である。ソネは海底が隆起した地形である。また、鳥の群れやサメ、流木を探索するため、漁場探索に非常に労力を要することが特徴である。もう一つはパヤオである。パヤオは 1982 年に伊良部漁協が初めて設置し、その後、県をはじめ各漁協単位でも設置が進められた。2011 年現在、県設置によるパヤオを除いて 153 基 (13 市町村: 33 基、13 漁協: 120 基) が設置されている。敷設場所は水深 100～2000m、距岸 20 海里以内の海域とされている。特に小型パヤオの設置においては、単独で設置するよりも近接した位置に 3 ヶ所設置することが漁獲効果を高めるとされている。パヤオでの漁獲対象魚種は、カツオ類・マグロ類・カンパチ・シイラ・ツムブリ・カジキ類・アジ類などがある。設置の目的は漁業振興だが、副次的に遊漁や町おこしなどにも期待さ

れている。

カツオ漁ではソネ漁場とパヤオ漁場の併用が一般的とされてきたが、近年ではソネの使い方がわからない、という漁業者が出てきており、これがカツオ漁衰退における要因の一つとして指摘されることもある。

3. 調査対象

3.1. 調査地概要

本稿で対象とするのは先述のように沖縄県国頭郡本部町において操業していたカツオ一本釣漁船団である第三裕得丸である。

沖縄県国頭郡本部町は沖縄県内おいては「カツオ (漁) のまち」として知られている。本部町においてカツオ漁が開始されたのは、1904 (明治 37) 年である。最盛期は 1923 (大正 12) 年で、40 船団が操業していた。船団数は、その後、減少の一途を辿っていく。1983 年にはパヤオが設置された。1990 年には裕得丸を含む 2 船団体制となった。1996 年には裕得丸も廃業し、1 船団体制となり、2010 年に最後の 1 船団も廃業をした。その後は、小型のカツオ船による操業が展開されていたものの、2012 年に本部町内にある「美ら海水族館」の船を改修し、4 名による船団を構成し、操業が開始された。

2010 年時において、町内漁業者は 173 名 (正組合員 76 名、准組合員 97 名) である。町内において展開されている漁業種はカツオ漁のほか、一本釣漁業、ソデイカ漁業、モズク養殖、ウミブドウ養殖の 5 業種である。生産額、水揚量ともにカツオが 3 割程度を担っている。

3.2. 調査対象

本稿ではパヤオ設置の操業効果を検証するにあたり、裕得丸を対象とする。裕得丸は前身の第三光徳丸の後継として、1981 年から 96 年まで操業している。操業期間 16 年間のうち、年間漁獲成績 1 位を 13 回獲得している、本部町を代表する漁船団である。また、過去の操業実態を把握するにあたり、漁業日誌を用いる。漁業日誌は裕得丸の船員であった O.M.氏 (1948 年生) が記録したもので、1981 年～93 年、96 年の記録が残されている。94 年～95 年は O.M.氏が療養ために記録がない。日誌には日付 (新暦・旧暦)、餌漁場、餌魚種、漁獲量といった餌料に関する項目のほかに、カツオ漁場の天候、風向、風力、気圧、気温、人員数、釣獲時間、出港時間、帰港時間、漁場、漁獲量、備考が記されている。

パヤオ設置による操業効果を検証するにあたり、漁場利用、およびその傾向、漁獲量、漁撈時間、漁場探索時間について、その効果を分析した。

図 1. 本部町の位置

4. 結果

4.1. 漁場利用

裕得丸の一日の操業における漁場利用形態は大きく 3 つに分類可能で、それは、1) ソネや回遊 (鳥付、サメ付、流木を含む) している魚群を釣獲する、「ソネ利用型」、2) パヤオを利用

する「パヤオ利用型」、ソネとパヤオを併用する「ソネーパヤオ複合型」である。

ソネ利用は旧暦 5 月から 8 月にかけて多く見られる。この期間は、カツオ漁の盛漁期にあたる。一方、パヤオ利用は旧 2 月～4 月、9 月にかけて多くなる (図 2)。カツオの回遊が最も多くなる夏期においてはソネを利用していることから、裕得丸ではソネを中心とし、それを補完する形でのパヤオ利用という漁業戦略が見られる。パヤオ設置以降、ソネの漁場数は 14 ヶ所、パヤオの漁場は 50 ヶ所存在した。漁場数はパヤオが多いものの、総利用回数はソネが 673 回、パヤオが 443 回と、ソネ利用が多いことがわかった。

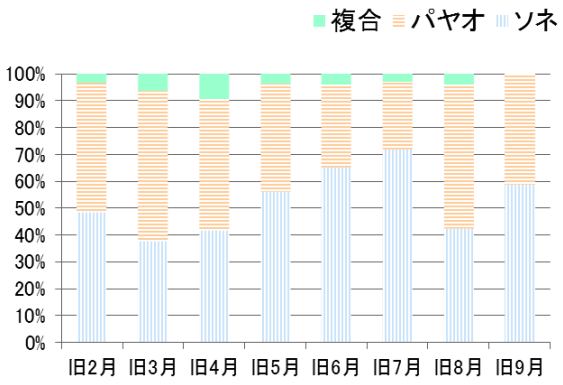

図 2. 漁場類型別の利用頻度

4.2. 漁撈時間

次に各漁場においてどの程度漁撈が行われているのかをみていく (図 3)。ここで示す漁撈時間とは、カツオ船が漁場に到着してカツオを釣獲している時間を指す。

ソネでは漁期の後半に向けて、漁撈時間が長くなっているのに対し、パヤオは通年通して、安定しない。ソネでの平均漁撈時間は 193 分、パヤオでは 190 分、複合型では 126 分となっている。このように、盛漁期にソネ利用が多くなるというのは、こうした、より長時間の漁撈が可能な漁場選択を行っている結果と考えられる。

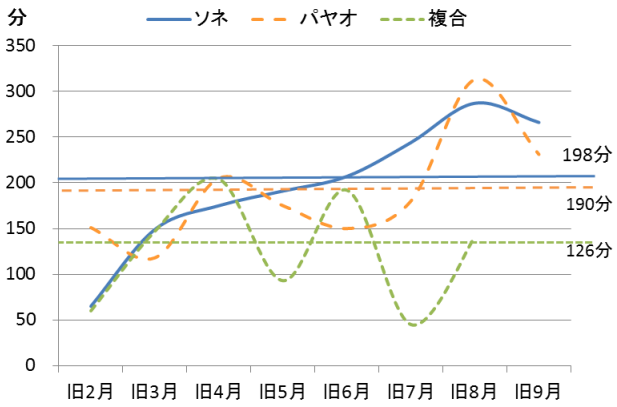

図 3. 平均漁撈時間

4.3. 漁場探索時間

漁場探索時間とは出港から帰港までの時間から、漁撈時間を差し引いたものを指す。分類ごとに見てみると、複数漁場を利用する複合型が 824 分と最も長く、それに続き、ソネ漁場が 707 分、パヤオ漁場が 657 分となっている (表 1)。パヤオが短時間である要因は、一つに地理的条件が挙げられる。本部からみて、ソネとパヤオの位置関係は、パヤオ漁場が近接にあり、遠隔にソネ漁場が展開されている。そのため、近接に位置するパヤオ利用時の方が漁場探索時間に直結している。

表 1. 平均漁場探索時間

	ソネ	パヤオ	複合
旧2月	623	689	760
旧3月	844	701	832
旧4月	766	600	699
旧5月	670	728	788
旧6月	690	641	905
旧7月	671	638	975
旧8月	727	617	813
旧9月	636	645	-
平均	703	657	824

4.4 漁獲量

漁業効率を高めるという点が考える場合、重要な指標の一つがいかに漁獲可能な漁場であるかという点である。パヤオ漁場は漁獲で見る

と、旧 2 月～4 月、9 月にかけて漁獲割合が高まる一方で、ソネは夏期の盛漁期に漁獲割合が高まる傾向がある。

平均漁獲量を算出してみると、パヤオは多量安定的な水準での漁獲が期待できる一方で、ソネはパヤオに劣ることがわかる。また、利用漁場別の平均漁獲量を算出してみると、ソネよりもパヤオの方が高いという結果が出た。すなわち、一回の操業効果という点に関してはパヤオの方が大きいことがわかる。はじめに述べた、パヤオは「確実に獲れる漁場」と呼ばれるのも、この点に起因するものと思われる。ただし、大漁の回数を見てみると、パヤオよりもソネの方が多く、なおかつ一つの漁場で大漁を期待できる。これはソネの特徴のひとつといえる。

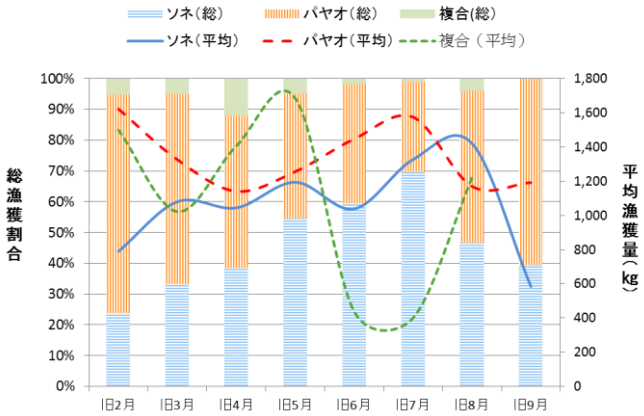

図 4. 漁場類型別の漁獲量

5. まとめと考察

ソネとパヤオの漁場としての特徴をまとめると次のようになる (表 2)。ソネは自然地形を利用した漁場であり、自然型漁場と位置付けられ、漁場の創生は不可能である。さらに、その漁場は半永久的に利用することが可能である。また、根拠地からは遠隔の位置にあり、操業時間は総じて長くなる傾向にあるものの、利用頻度は高い。これは、平均漁獲は低いものの、大漁への期待が持てる漁場であるという認識があるからと考えられる。

表 2. 漁場特性の対比

特徴	ソネ	パヤオ
根拠地からの距離	遠隔	近接
変動	不変的	可変的
漁場数	少ない	多い
利用時期	盛漁期	盛漁期以外
漁獲安定性	不安定	安定的
平均漁獲	低い	高い
大漁への期待	大きい	小さい
漁撈時間	長い	短い
漁場認識	多い	少ない

パヤオは人工的な漁場で、漁場の創生は規制の範囲内であれば、いくらでも可能である。ただし、パヤオの経年劣化や流失といったことが発生するために、一時的、もしくは変動性の高い漁場であるといえる。漁場の地理的条件としては、ソネは漁場間が遠隔であるのに対し、パヤオは近接である。このような特徴から、ソネでは漁場認識が経年的に蓄積され、更新されていくのに対し、パヤオはそうではない。また、根拠地からは近接の位置にあり、操業時間は短く、漁獲安定性も高く、平均漁獲も高い。

操業効率で考えた場合、ソネよりもパヤオの方が優れているように思える。ただし、実際にはソネに対する依存度は決して低くない。これは、ソネに対する経験値が、パヤオの有する機能性を上回っている結果であると考えられる。すなわち、本部町におけるカツオ漁にとって、パヤオの設置は重要な副漁具という位置を占めているものの、そこにはソネを中心とした漁場利用が展開されてこそ、ソネ漁場の利用がきわめて重要であることがわかった。

インドネシア東部のパルミラヤシに依存する社会における乾季の生存戦略
―生業・栄養・社会の分析から

廣瀬 崇幹
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

1. 背景

インドネシアは近年目覚しい経済発展を遂げているが、小島嶼部は比較的開発が遅れており、東ヌサ・トゥンガラ州サブ・ライジュア県もそのような地域の一つである。同県は都市部から離れており、降水量が低く水田稲作や焼畑農耕が営めないため、社会的・生態学的に貧しい地域でもある。資源が限られたアジア・太平洋地域では、食糧を生産するための様々な生存戦略が営まれてきたが、サブ・ライジュア県におけるそれは、パルミラヤシ (*Borassus flabellifer*) の花序液に頼った生活である。パルミラヤシは熱帯に広く分布している植物であるにもかかわらず、花序液を採取する文化の報告はインド (Fox 1977) やカンボジア (Borin 1998) を除いてほとんど存在しない。*Borassus* 属のヤシ花序液は、ヤシ酒や動物へのエネルギー供給、バイオエタノールの生成といった目的で、発酵のプロセスや糖の分析研究が行われてきた (Tomomatsu et al. 1996; Ghosh et al. 2012; Ouoba et al. 2012) が、花序液を濃縮ヤシ糖として飲用する例はサブ島・ライジュア島 (Kagiya 1996) やロティ島 (Fox 1977) など、わずかしか報告が行われていない。鍵谷や Fox は、サブ島やロティ島における、パルミラヤシに関わる生業の社会文化的側面について報告を行ったが、生態学的・栄養学的な観点の研究は行わなかった。パルミラヤシは多くの熱帯乾燥地域で栽培可能であるにも関わらず、利用されていないのが現状である。ゆえに、パルミラヤシに頼った生活を記述することは、他の農業困難な熱帯地域アジア・アフリカ地域においても食糧を確保するための手段として貢献が可能であると考えられる。本論文では、ライジュア島で行った参与観察と栄養状態の調査・タイムアロケーション調査を基に、同村の伝統的・持続的な生活を明らかにする。

2. 手法

ライジュア島コロラエ村において、生業や生活の参与観察と聞き取りを行った。その上で、簡易スポットチェック法を用いて 7 日間、男女 43 人の行動観察を行い、活動ごとの投入時間を算出した。また、生業や生活に関する調査、送金や扶助に関する調査、及び食事秤量調査を計 40 世帯に対して行い、大人一人一日当たりのエネルギー及びタンパク質摂取量を推定した。15 歳以下の子供に対しては食事の量が異なることが予想されたため, 調理済の料理を大人と子供でどのように分配しているかを, 直接秤量によって調査した. 食事の時間に巡回にあたった, 15 歳以下の子供がいる計 12 世帯について, 計 29 人の子供一人当たりの摂取量, 及び大人一人当たりの摂取量を秤量した. 秤量した結果を 2–5 歳 ($n = 10$)、6–10 歳 ($n = 12$)、11–15 歳 ($n = 7$) の 3 つの年齢階級に分け、大人の摂取量に対する、それぞれの年齢階級の子供の摂取量の係数を求めた。さらに、食事秤量調査・タイムアロケーション調査を行った集団を含む村民計 178 人の生体計測を行い、栄養状態を評価した。

3. 結果・考察

一日当たり摂取エネルギー量の平均は男性 5.0 MJ、女性 5.1 MJ であった。パルミラヤシの花序液から摂取されるエネルギーは全体の 49.5 %を占めており、生存のエネルギーを補うために不可欠の食糧であることが明らかにな

った。生体計測の結果、男性の 37.9%、女性の 44.6%が BMI18.5 未満の低体重であり、村内は厳しい栄養状態であることが示唆された。

生存戦略としては、乾季に採取して煮詰めた花序液を雨季まで保管し、逆に雨季に栽培した穀物を乾季まで保管するという、自然環境を生かした特徴が明らかになった。食糧採集にかける時間は一日当たり平均で 1.4 時間と、食糧戦略の特徴ゆえに労働時間が短いことが示唆された。また、観察を行った 14 時間のうち、およそ半分の時間は睡眠か休憩といった行動が観察された。コロラエ村の住民は、活動量を抑えることによって低い栄養状態を補っていることが示唆された。

40 世帯にわたる聞き取り調査の結果、2007 年より政府を通じた援助によって世帯当たり 20kg の米が支給されていることが分かった。しかしライジュア島が離島であり、インフラ整備が進んでいないことから、雨期や風の強い季節は物資の輸送が困難であり、実際には不定期であることが明らかになった。事実、8 月末に行った世帯調査では、半分以上の世帯で政府による援助の米は尽きてしまっていたことが判明している．これに対し，伝統的作物であるソルガムや緑豆，ヤシ花序液といった主食は，自力での入手が難しい人に対しては親戚や近所の世帯による無償の支援が行われていた．親戚のいない人であっても同集落内の人と何らかの協力関係を築くことによって最低限の食糧が手に入る仕組みになっていた．ゆえに、親戚，及び近所の作物や労働のやりとりが，コロラエ村内においてセーフティ・ネットの役割を果たしていることが明らかになった．出稼ぎが活発になり、政府を通した援助が入り始めた現在においても、雨季に採取される緑豆やソルガム、また乾季に採取されるパルミラヤシの花序液と濃縮ヤシ砂糖が生存に重要な役割を担っていた。

サブ・ライジュア島の自然環境の特徴として、焼畑農耕が盛んな州都のティモール島と比較しても極端に降水量が少ない (Stasiun Meteologi Terdamu Sabu 2012)。雨が全く降らない乾季が長く続く気候により、ヤシ砂糖の採取が凶作の少ない、食糧を確保するための伝統的な生存戦略として選択されてきたことが示唆された。

類似の地域においても、伝統的なソーシャルキャピタルや自然環境の特徴を考慮に入れ、開発の計画を立案していく必要があることが示された。

参考文献

Borin, K. 1998. Sugar Palm (*Borassus flabellifer*): Potential Feed Resource for Livestock in Small-Scale Farming Systems. *World Animal Review* 91: 21–29.

Fox, J.J. 1977. *Harvest of the Palm*. Harvard University Press.

Ghosh, S., Chakraborty, R., Chatterjee, G. and Raychaudhuri, U. 2012. Study on Fermentation Conditions of Palm Juice Vinegar by Response Surface Methodology and Development of a Kinetic Model. *Brazilian Journal of Chemical Engineering* 29(3): 461–472.

Ouoba, L.I., Kando C., Parkouda C., Sawadogo-Lingani H., Diawara B. and Sutherland J.P. 2012. The Microbiology of Bandgil, Palm Wine of *Borassus akeassii* from Burkina Faso: Identification and Genotypic Diversity of Yeasts, lactic Acid Bacteria. *Journal of Applied Microbiology* 113: 1428–1441.

Tomomatsu, A., Itoh, T., Wijaya, C., Nasution, Z., Kumendong, J. and Matsuyama, A. 1996. Chemical Constituents of Sugar-Containing Sap and Brown Sugar from Palm in Indonesia. *Japanese Journal of Tropical Agriculture* 40(4):

175–181.
Stasiun Meteologi Terdamu Sabu. 2013. *Pelayanan Jasa Informasi Klimatologi Data Curah Hujan* (CH).
鍵谷明子. 1996.『インドネシアの魔女』学生社.

島嶼環境における年長者の社会的役割と交易ネットワーク —パプアニューギニア・ルイジアード諸島の事例から

門馬 一平
北九州市立大学社会システム研究科

1. はじめに

パプアニューギニア・ルイジアード諸島ではセーリングカヌーを使った財貨の交易が盛んである。この交易は、主にビッグマンとよばれる地域の有力者によって形成、維持されており、ルイジアード諸島全体をネットワーク状に結んでいる。このネットワークは地縁や血縁をもとに築かれており、それをたどることでビッグマンたちは、トボトボと呼ばれる石斧型の財貨を集めてくる。ここで集められた財貨トボトボは、贈与儀礼に使用される。ここでの贈与儀礼とは、財貨の支払いを伴う儀式のことで、葬式、年忌、セーリングカヌーの支払いや、土地の支払いなどにおいて執り行なわれている。特に、年忌のための贈与儀礼はこの地方の主食であるヤムイモの収穫期に毎週のようにおこなわれている。これらの贈与儀礼で財貨トボトボは大量に贈与される。この贈与儀礼で贈与するための財貨を求めて、人々は交易をおこなっている。

パプアニューギニア島嶼部における財貨の交易についてはトロブリアンド諸島で調査したマリノフスキによるクラ交易の報告が有名である (マリノフスキ 2010)。 ルイジアード諸島の交易はクラ交易よりも狭い範囲でおこなわれている。また、クラ交易はルートや交易相手がある程度確定しているが、ルイジアード諸島の交易ではルートも交易相手も状況依存的に決まり、時間とともに変化していく。ルイジアード諸島のこうした交易やそれに伴う贈与儀礼について Lepowsky (1993) や Battaglia (1990) ら人類学者がその性質や仕組み、構造や機能などといった側面からの説明を試みている。本稿では、構造や機能ではなく、個人の動機や思惑、能力といった側面から人々がなぜ交易をおこなうのかを示し、交易ネットワークの実態を明らかにする。

2. 調査概要

2.1. 調査地と調査期間

調査地であるルイジアード諸島は、ニューギニア本島より南東へ 200 キロメートル程の場所に位置し、東西約 160 キロメートルの距離、18,000 平方キロメートルの面積がある。火山島と珊瑚礁でできた島々からなっており、各島には 50〜300 人規模の集落が点在している。諸島内は堡礁で囲まれている場所が多く、その礁湖は比較的波が低く穏やかである。 そのため、人々はカヌーで盛んに島の間を移動することができる。

調査ではルイジアード諸島のほぼ中央に位置するパナウィナオ島・カロタウ村にのべ 5 か月間 (2012 年 1〜3 月、8〜9 月) 滞在し、村民の交易に参与観察した。

2.2. 主なインフォーマント

主なインフォーマントとなったショーティ (仮名：70 代) はカロタウ村の長老である。彼は、喘息を抱えており、力仕事や、長い距離を歩くことが難しい状態にある。そのため、普段はカヌーの修理や、装飾品の製作、客の応対といったことをしている。ショーティには焼畑耕

作や漁撈活動などの生業をおこなう体力がないのである。彼は経験豊富なため、様々な状況で意見をするが、実際に実行するのは若い息子たちである。普段は長老であるショーティが指示をするのではなく、息子たちがそれぞれ自分で判断し、行動している。

このように、ショーティは普段、村のアドバイザーのような位置づけにあるといえるが、彼自ら決断を下し、人々を指揮することもある。それが財貨の交易をおこなう時である。交易の際には、ショーティは村人に指示を出し、航海をおこない、自らの交易相手を次々と訪ね、交渉をおこなう。この、交易の時にこそ彼の真価が発揮されているといえる。以下、彼がおこなった財貨の交易に筆者が参加した事例について報告する。

3. 交易の事例

3.1. 事例①アライダ村への交易 (図 1)

この事例において、ショーティは行く先々で交易相手に振り回されることになる。

彼はまず贈与儀礼に使用するための石貨トボトボを求めて、3 か月前に 20 年ぶりにやり取りを再開したばかりのアライダ村の交易相手のところへいく。アライダ村はショーティの住むカロタウ村からは 50 キロ程離れた別の島にある。ショーティは村の若者達をつれて、向かい風の中、セーリングカヌーによる航海に臨む。そして 3 日間かけてようやくアライダ村に到着することができる。2 日間アライダ村で休憩し、滞在 3 日目の朝、アライダ村の長老である、交易相手との交渉に臨む。ショーティは次の贈与儀礼のために逼迫して財貨トボトボが必要であることを説明する。交易相手は、現在渡せる財貨はないが、別の島である贈与儀礼に参加すれば、そこで使用された複数の財貨をショーティに渡すことができると返答した。その贈与儀礼は、ショーティの昔の交易相手の葬式のためのものであった。この葬式に参加しなければならないと考えたショーティとその一行は、急いでカロタウ村へ戻ることになる。しかし、そもそもその葬式に参加するためには、財貨トボトボが必要である。この財貨をまた別の場所で調達する必要があるため、ショーティはアライダ村からカロタウ村への航路の途中にあるジュネット村に住む従兄弟を訪ね、以前貸した財貨トボトボを返却してもらおうとする。急いでアライダ村を出航し、ジュネット村の従兄弟を訪ねる。この従兄弟に財貨トボトボを要求すると、現在彼は財貨を持っていないという。代わりに従兄弟は、「カロタウ村の隣にあるハワウィーネ村の男に貸しがあり、この男に自分が要求すれば財貨を得ることができるはずだ」と提案した。そこで、次の日にハワウィーネ村で落ちあい、財貨の受け渡しをすることになった。その日のうちにカロタウ村まで戻り、ショーティは次の日ハワウィーネ村を訪ねたが、この従兄弟は結局現れなかった。ショーティは財貨を得ることができず、贈与儀礼にも参加することができなかった。

3.2. 事例②マッドナヤオ村への交易 (図 2)

この事例では、ショーティの代わりにカロタウ村に住む彼の従兄弟トヌ（仮名 : 50 代）が 40 キロ程離れた島にあるマッドナヤオ村へ交易に赴く。ショーティはこの時期体調を崩しており、代わりに従兄弟に言付けることで財貨トボトボを得ようとしたのである。トヌはマッドナヤオ村のある島まで、別の村のセーリングカヌーに便乗することで、自分でカヌーや乗組員を調達することなく目的地まで到着する。マッドナヤオ村には出発して 2 日目に到着した。マッドナヤオ村の交易相手と交渉すると、近くの島に住む親戚の場所へ行けば財貨を渡すことができるという。そこで、近くの島までその日のうちに進むことになった。しかし、トヌがマッ

ドナヤオ村で休憩しているうちに、カヌーが出航してしまう。このセーリングカヌーには、複数のビッグマンが便乗しており、手に入る財貨の数が足りないと判断したカヌーの持ち主が、彼を置いていくことにしたのである。カヌーの持ち主達は、交易相手の親族の住む村をまわり、財貨を得て戻って来た。結局、トヌは財貨を得ることができなかったが、マッドナヤオ村の交易相手と交渉し、次回訪れた時に財貨をもらう算段となった。マッドナヤオ村では食器や土器、マット、ココヤシの実などをお土産にもらい、積荷を満載して帰路についた。他のビッグマン達が、往路の途中で寄った島で、その島の交易相手に用意するよう言付けた財貨を得るため、帰路でもいくつかの島に寄り、彼らは財貨を得ていた。しかし、トヌは今回財貨を 1 つも得ることができなかった。

4. 交易における思惑

以上二つの事例において、ショーティは財貨を得ることができなかった。しかし、「たらいまわし」ともいえる状況のなか彼らは様々な策を講じ、財貨を得ようとしている。財貨を得るための彼らの思惑を事例に示さなかったものも含めて以下に列挙していく。

交易に向かう人は、焼畑耕作を地域内の人の協力等を得て、早く終わらせようと考えている。そうすることで、他の人より早く交易にでることができ、高い確率で財貨を獲得することができる。また、贈与儀礼による財貨の集積を聞きつけ、いち早くそこへ行くことも財貨の獲得につながる。交易においては行き先も重要である。親しい交易相手の場所へ行くことは確実な財貨の獲得につながり、新しい交易相手の場所へ行くことは財貨をもらえる人を増やすことにつながる。

航海に出ると、目的地への途中の集落で財貨を集めてもらうよう要求し、帰りにうけとるということもみられた。これには、効率よく財貨を獲得しようとする思惑がある。また、繰り返し交易相手の場所を訪れることや、特産品を土産として持っていくこともみられる。これらには、交易パートナーとの間で良好な関係を保つ意図がある。

交易相手との交渉の場における人々の思惑も分析する。ショーティは交渉において自分の状況がいかに逼迫しているかを伝えている。こうした交渉により、多くの財貨を交易相手から引き出そうとしている。

財貨を要求される側の思惑も列挙していく。財貨を要求された人は、相手の状況が財貨を与えるに値するか見定める。また、相手から、いずれ何らかのかたちでの見返りが得られるかを考える。財貨を与えない場合には、相手にその理由を説明し、もう一度くるように要請するなど、別の選択肢を用意する必要がある。これには、財貨を与えない場合も、それ以降良好な人間関係、交易関係を築く意図がある。自分の財貨は隠して、どれだけの財貨が残っているか、見えないようにしておくこともみられる。これは見返りの期待できる最適な状況で財貨を与えることと、相手と良好な関係を築くことを両立させるためである。なお、良好な関係を築くことには、お互いの行き来を活発にし、財貨を流れやすくしておくという意図もある。

交易相手との交渉において、贈与儀礼にお互いが参加し、そこで集積した財貨を他の贈与儀礼に転用しようとしていることが事例①でみられた。こうして贈与儀礼で使用された財貨を使いまわすことで、財貨を効率よく手に入れ、活用することができる。ここでは、交渉においてお互いがその思惑を一致させることで、財貨を円滑に流通させようとしている。また、財貨の要求に来た人に、近くに住む地縁や血縁関係のある人の場所へ財貨を取りに行かせることもある。近くに住む人との間の貸し、もしくは

借りを使って遠方から来た交易相手に財貨を与えているのである。

このように様々な思惑が、交易にはみられる。そして、こうした思惑のために交易ネットワークは複雑性を増し、「たらいまわし」にされるような状況も生まれるのである。

5. 交易に向かう動機

今回の二つの事例のように、ことごとく思惑が外れ、1つも財貨を得ることができないこともある。早めに航海に臨むために焼畑耕作を早く切り上げ、労力を使って航海をしたものの財貨を得られないこともある。それでもビッグマン達が財貨の交易のために頻繁に航海に出るのはなぜであろうか。こうした、交易への人々の動機を考察するには相互扶助や、社会関係をつくること、名誉や威信の獲得といった機能的、構造的な説明では不十分である。ビッグマン達には社会的役割を超えた交易への動機があると考えられる。

4で列挙したような思惑は、それぞれの状況においてショーティやその他のビッグマン達が財貨を得るために自身の能力、人間関係を最大限に使って策を講じた結果出てきたものである。これらの策は、実は長老でありビッグマンであるショーティだからこそできるものでもある。このようにうまく人を誘い、また人に協力を求めることにショーティは長けているといえる。そして、次々とその状況でできる最大限のことを思いたち、実行に移す能力がショーティにはある。交易はショーティにとってこうした能力を発揮する場となっている。そして、彼の「策」が全てあたった時、すなわち思惑があたった時に、財貨は大規模に集積することになる。ここから、予想の立てにくさと、その予想が的中した時のリターンの大きさ、状況を読み、先の先まで見通した「思惑」が当たったときの爽快感が人々を交易に向かわせていると考えられる。

6. まとめ

以上のことから、交易において個人の能力や動機と環境的な要因が絡み合うなかで、偶発的に財貨が集まっていることがわかる。交易はいつも決まった構造のなかで互酬的にやりとりされるわけではない。互酬性があることを前提としたなかで、人々は策を講じ、思惑を巡らせる。交易ネットワークは、システムによって規則正しく動いているのではなく、個々の能力・動機が交易ネットワークを動かし、システムも変動させていくのである。

参考文献

Battaglia, Debbora. 1990. *On the Bones of the Serpent-Person, Memory, and Mortality in Sabarl Island Society*. The University of Chicago Press.

Lepowsky, Maria. 1993. *Fruit of the Motherland-Gender in an Egalitarian Society*. Columbia University Press.

B. マリノフスキ. (増田義郎訳) 2010.『西太平洋の遠洋航海者』講談社.

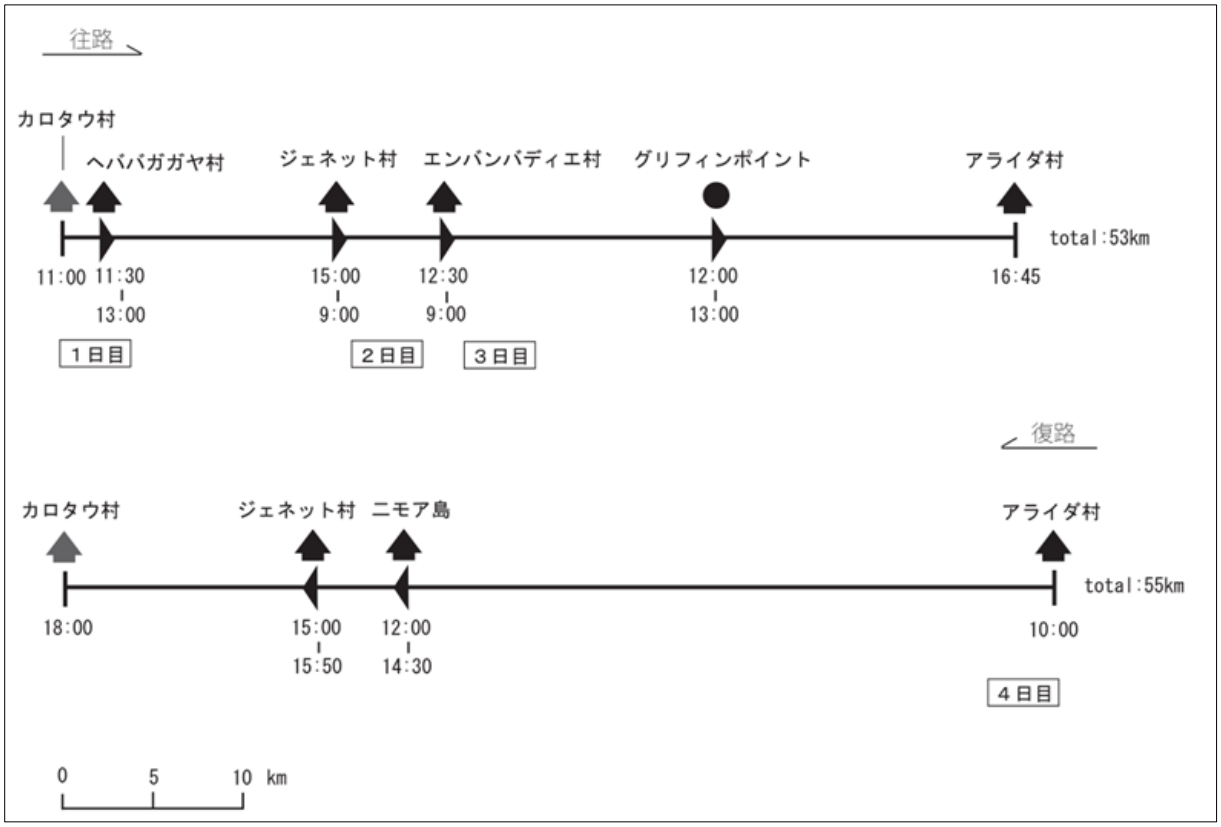

図 1. アライダ村への航海の距離と時間

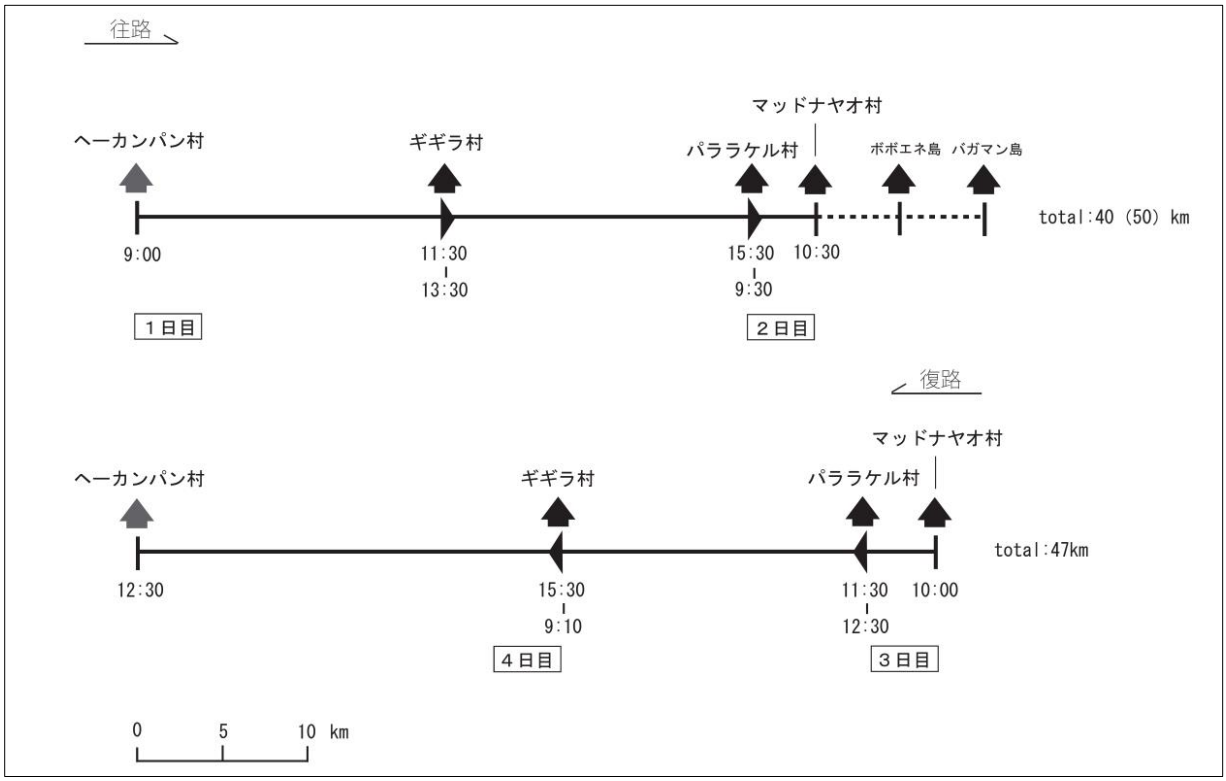

図 2. マッドナヤオ村への航海の距離と時間

島の「道」とカネ—ミクロネシア連邦ヤップ島社会における人々の生活と貨幣経済

町 聡志
岡山大学大学院社会文化科学研究科

西部太平洋のミクロネシア地域では、多くの島嶼社会が小さな島々によって構成されている。これらの島々では、小規模ゆえに種々の資源が限定される環境下において、タロイモやヤムイモなどの根茎類栽培を主とする根栽農耕と、漁撈などによる海洋資源利用を併せて営むことで、人々の生存が図られてきた。本研究の調査地であるミクロネシア連邦ヤップ島社会においても、島内の低湿地を利用したミズズイキ (*Cyrtosperma*) 栽培をはじめとする伝統的な生業様式が、重要な食料生産手段として営まれている。

ヤップ島社会は、ミクロネシア地域の中でも、近年に至るまで伝統的慣習 (*yaren*) が根強い影響力を保持し続けている社会であることが指摘されてきた (牛島 1987; 須藤 2008)。ヤップ島社会における伝統的慣習の影響力は、島で営まれてきた生業様式と深い関係にある。島での生活に利用される重要な植物資源の多くは肥沃な湿地を選好する。そのため島内の土地は場所によって植物資源の生産に大きな偏りが生じる。この土地生産性の差によって、家々 (*tabinaw*) や村 (*binaw*)、周辺の島々に至るまでが厳格に序列化された階層社会が形成され、ヤップ島社会の構造を規定する大きな背景となっている。

このような土地制度に基づいた厳格な位階のもとで、人々の間には所属している家や村の階層によって複雑な社会関係が存在しており、それらは村々や屋敷間をつなぐ伝統的な石畳の道 (*kanawo*) に喩えて表現されている。これら社会関係としての「道」は、親族関係にある屋敷の間や、村の中での政治的役割を担う屋敷、また政治的同盟関係にある村落同士の間などを様々な形で縦横に結んでおり、ヤップにおける人々の社会活動はこの「道」に沿った形で行われてきた。とくに、島内に張り巡らされた村落間の政治的なネットワークは「サァ (*tha*)」と呼ばれる「道」であり、ヤップにおける伝統政治の運営において重要とされている。資源利用の不均衡や島民間の諍いの調停などの問題に際し、各村の伝統的権威である首長が各々の持つサァを介して依頼や交渉を行い問題の解決を図ることで、長きに渡りヤップ島社会の秩序が維持されてきた。須藤がいうように、ヤップ島社会は「土地が人を動かし、政治を規定する」(須藤 2008: 200) 構造になっている。

そのような土地にもとづく社会関係が生活の中で大きな比重を占めるヤップ社会において、人々の間の社会関係の創出や再生産に際し重要となるのが、石貨 (*fä*) や貝貨 (*yar*) などの伝統的財貨 (*machaf*) を用いた贈与交換である。ヤップ社会において伝統的財貨が交換される主な局面として、1) 婚礼などの通過儀礼に際し、男 (夫) 側と女 (妻) 側との間で行われる儀礼的交換、2) 村落や親族集団単位での競争的交換 (*mitmit*)、3) 他村との政治的局面における交換、4) 祭祀における呪術師 (*tameron*) への献供 (*mal'igach*) などの宗教的局面での交換、5) 労務に対する謝礼 (*talin e magal*) や購買の手段 (*puluwan*) などの経済的局面での交換の 5 つがある (牛島 2002)。

これらの贈与交換では、石貨や貝貨のほかにヤムイモやバナナ、魚などの食物も贈り物として用いられ、それらを贈られた側には返礼の義務が発生する。人々は何かの際に伝統的財貨や食物を贈られた場合、贈られたモノと送り手を記憶しておき、いつか返礼の機会をとらえて贈られたモノに相当する別のモノか場合によっては贈られた伝統的財貨そのものを返礼しな

ければならない。ヤップの人々はこの贈与とそれに対する返礼を指して、「伝統的財貨は行ってまた戻ってくる」という。返礼が済んでいない状態で手元にある伝統的財貨は「まだ生きている」と表現され、返礼が終わった際に「死んだ (*ke'im*)」と表される。こうした送り手と受け手の間での贈与交換にまつわる歴史が繰り返し刻まれていくことで、伝統的財貨はそれぞれに固有の価値が付与されていく。そしてその伝統的財貨をまた贈り合うことで、人々はお互いの周りに切り結ばれた「道」を創出・再生産しながら社会生活を送っているのである。

他方、19 世紀末の西欧との接触に端を発して以降、植民地期を経て現代に至るまでの近代化の過程は、島の生業構造に大きな変化をもたらした。植民地期の統治国による経済開発や援助政策に伴う市場経済の拡大と輸入物資の流入は、島での生活における現金獲得活動の重要性を否応なく押し上げた。とくに、第 2 次大戦終結後の 1947 年からミクロネシア独立までの約 40 年にわたるアメリカ統治期において行われた大規模な経済援助政策は、ミクロネシア地域の島々がアメリカへ経済的に依存する状況を作り出し、産業はないが大量の資金が流入するという特異な社会経済状況を生み出したのである。ミクロネシア連邦は、1986 年の独立時に「自由連合協定」をアメリカとの間に締結しており、自国の安全保障に関する権利をアメリカに譲るのと引き換えに、独立後一定期間国家財政の 4 割を占める規模の財政援助を受けることが取り決められている。アメリカ統治の終焉後も現在まで続く援助依存の経済体制によって、ヤップ島をはじめとするミクロネシア連邦の島々では「多額の援助によって肥大化した公共サービスに民間部門がぶら下がる（柄木田 2010）」経済構造が動かし難く存在し続けている。このようなアメリカ統治期に形成された社会経済状況によって、ヤップ社会における市場経済の領域は加速度的に拡大した。そして市場経済の受容とともに島民の生活様式も変容し、島民の労働形態はかつての村で行っていた自給的な生業活動から、街へ出て官庁や企業で働く賃金労働へと大きく変化した。

本研究において 2009 年から 2012 年にかけ複数回実施した現地調査の結果からも、生活様式の変化に伴う形で人々の日常生活における現金の需要が増大し続けている今日的な経済状況が見てとれる。2010 年に行ったヤップ島西岸の K 村 10 世帯に対する家計調査からは、世帯ごとの収入の差に関わらない形で、どの世帯においても輸入食品が同程度消費されていることが明らかとなった。また聞き取り調査において、伝統的な食料であるタロイモを生産する水田は全世帯が所有しているものの、共働きの世帯では伝統食料の生産は作業に割く時間的余裕の無さから負担と捉えられ、その利用頻度が落ちてきていることが分かった。

ヤップ社会における市場経済は拡大の一途にあるが、その一方で大量に流入する法定通貨の米ドルを、日常生活の中において交換媒体として用いることが人々に憚られている場面がみられる。たとえば、今日ヤップ島では、生鮮食料品としての農産物の需要が高まっており、その商品価値は誰もが認めるところである。しかし、島内で生産されるタロイモなどをはじめとした伝統食料を米ドルで購入することや、逆に農産物を市場で販売し生計を立てる生活について、ヤップの人々は否定的な見解を示す。実際、ヤップ州の統計上でも就業人口 2723 人のうち、農業・水産業従事者は 2 人にとどまっており、農業・水産業が欠落した産業構造になっている (Yapstate 2009)。理由として主食を継続して購入する経済的余裕の無さを挙げる人もいたが、購入・販売いずれについても伝統食料を商品交換の俎上に載せることに対して、「ヤップ人はイモを買ったり、売ったりするこ

とはない」と強く忌避する傾向がみられた。

この傾向について、経済的余裕の無さから商品交換への動機が低いという説明もありうる。しかし本稿では、伝統食料の持つ社会的意味の側面から市場経済との「馴染みの悪さ」を説明したい。ヤップ社会における伝統食料、とくにタロイモやヤムイモ、魚などは現在においても石貨や貝貨とともに贈与交換の領域における交換媒体として用いられている。こうした食料をはじめ、ヤップ社会において他人が労働を通じて生産したものには「労働の骨 (*il e magal*)」が存在するとされており、それを贈られた際には返礼を行うことで「骨を切る (*siym il*)」ことが必要と考えられている。そのため、今日の市場経済の拡大する状況下で伝統食料の商品価値が高まったとしても、贈与交換の領域にある食料と米ドルによる商品交換の領域を容易に交差させることを忌避していると考えられる。

ヤップ社会における伝統的財貨は、現在においても通過儀礼や村落間の政治的局面などの際の贈与交換における交換媒体として、人々の間の社会関係を創出し再生産している。これら社会関係の維持のために交換される伝統的財貨には、繰り返し贈与されることを通じてその時々の人間関係が刻み込まれ、それぞれに固有の価値を高めていく。そのような特徴を持った交換媒体としての伝統的財貨は、市場経済の交換媒体として用いられる米ドルに比べ、汎用性・流動性・匿名性などが極めて低い。そのため、伝統的な社会関係である「道」の再生産に、汎用性・流動性・匿名性が極めて高い米ドルが交換媒体として流入することは忌避され、ふたつのカネが交換される領域は、交差することなく並列的に存在している。ヤップ島社会において、人々は「道」の再生産と市場経済活動を明確に区分することで、ヤップ社会の秩序の維持を図っているのである。

しかし、このふたつのカネの領域を区分する現在の状況は、様々な課題を抱えている。今日のグローバルな社会経済の中にあって、ヤップ社会は依然として援助依存の経済構造が続いているが、その援助も 2023 年の協定終了とともに打ち切られることがアメリカ側から伝えられている。現在の援助依存構造が近く終焉を迎える事態を前に、伝統的な社会関係の維持も、市場経済活動を発展させる経済開発のどちらも、現時点ではヤップ社会を長期的に安定させうる選択肢としては成り立ちにくいのが現状である。島という限定的な空間での生活において大きな岐路に立たされつつあるヤップ社会の人々が、物質的条件と伝統的慣習が重なり合う状況から何を選択し、今後どのように変化していくのか、今後も状況を注視していく必要がある。

参考文献

牛島巌. 1987.『ヤップ島の社会と交換』弘文堂.

–2002.「携えるカネ、据え置くカネ―ヤップの石貨―」今馬徹編.『くらしの文化人類学 5 カネと人生』雄山閣.

柄木田康之. 2010.「ミクロネシア連邦オレアイ環礁―島嶼空間の持続・変容・拡張」熊谷圭知・片山一道編. 『朝倉世界地理講座 15 オセアニア』朝倉書店.

須藤健一. 2008.『オセアニアの人類学』風響社.

YapState. 2009. *Yap State Statistical Yearbook*. Yap Branch Statistics Office.

コンゴ民主共和国における河川交易の実態 —地域の内発的発展に向けて

高村 伸吾
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

1. はじめに

中部アフリカのコンゴ民主共和国は 1960 年の独立以降、度重なる紛争に晒されてきた。1998 年に勃発した第二次コンゴ戦争では 540 万もの人命が失われ、道路・橋などの交通インフラも破壊された。植民地期には世界屈指の一次産品輸出国として高度な経済成長を実現していた (武内 1998) にも関わらず、それに続く紛争によりコンゴ経済は衰退した。国連開発計画によればコンゴの人間開発指数は 187 カ国中最下位であり (UNDP 2013)、紛争終結から 10 年以上が経過した現在も地域の社会的経済的復興は進展していない。とりわけ流通体系の崩壊が地域に及ぼした影響は甚大である。トラックによる陸上輸送が断絶したため、仲買商人による換金作物の買付けに依存していた内陸部農村は現金収入の源を絶たれ、深刻な物不足・現金不足に陥っている (木村ほか 2010)。こうした紛争後の社会状況に対していかに対処していくのか、今日では陸上輸送を代替するものとしてコンゴ河およびその支流を介した河川交易が大きな重要性を持つようになった。

2. 調査対象

本報告は 2013 年 8 月～9 月の 1 ヶ月間、コンゴ民主共和国赤道州ルオー郡ヤリサンガ村から東部州州都キサンガニまでの広域調査の結果に基づいている。調査地域には狩猟採集と焼畑農耕を併用し獣肉や家畜・蒸留酒を生活の資とするボンガンド、陸稲や落花生・プランテンバナナなどを栽培するトポケ、河川交易に従事するバロケレという 3 つの民族集団が居住している。ボンガンドやトポケは森林産物や農産物を都市近郊の仲買市場にまで運搬・売却し生計を営み、バロケレを主とした商人は丸木舟を用いてコンゴ河を遡上し商品を都市にまで流通する。内陸部農村から消費地である州都キサンガニまで農産物がどのように移動しているのか、また都市から内陸部農村に工業製品がどう流入しているのかを観察し、紛争による流通体系の変化が地域社会にどのような影響を及ぼしているのか検討を加えた。

3. 結果と考察

3.1. 紛争後の道路状況

第一に紛争後の道路状況について確認した。ヤリサンガ村から州都キサンガニにいたる 491 キロ区間には合計 34 の橋が存在する。橋は丸太を数本並べた程度のもので、かろうじて自動二輪が通過できるにすぎない。熱帯雨林の侵食に晒され道幅は縮小し自動車の往来は途絶えている。コンゴ河右岸に面した 133 キロ及び内陸部 42 キロの区間では現在も自動車による通行が可能だが、車両渡船による 3 回の渡河が必要となる。渡河の度に 20$から 30$という高額な費用を支払わなければならない為、利用者は国際機関関係者あるいは教会関係者などに限定されている。少なくとも今日の状況として商品流通に自動車を使用することはあまり一般的ではなく、調査期間中に現地商人が自動車を使用する事例は 1 件に留まった。交易民の多くは丸木舟やコンゴ河を行き来するバリニエと呼ばれる平底船、あるいはオートバイ・自転車などといった輸送手段を用いて現地の商品流通を担っているというのが現状である。

3.2. 河川交易への転換

前述したように自動車による商品流通は大きく後退している。紛争による流通体系の崩壊

に対して交易民がどのように対処しているのだろうか、定期市の現状から検討を加えたい。現地調査から 10 の定期市について位置同定をし、その内 7 つに関しては露店数や面積に関するデータを取得した。調査した定期市の中ではヤフィラの市場が露店数・規模ともに最大であることがわかった。市場監督官によれば以前は小規模であったヤフィラは 2000 年代初頭から急速な拡大を遂げたということだ。ヤフィラはなぜ拡大したのだろうか。データから推察するに、①丸木舟による物資の長距離大量輸送が可能なロマミ河沿岸に存在していたこと、②森林産物・農産物を売却する内陸部農耕民にとって最もアクセスしやすい市場であったこと、以上の二点が大きな要因になっていると考えられる。紛争により車両輸送を前提とした流通体系は崩壊し、唯一の「河の道」のみが商品の長距離輸送を可能にしている。2000 年代以降のヤフィラの拡大はこうした陸上輸送から水上輸送への輸送手段の変化にともなって生じたものであると考えられる。

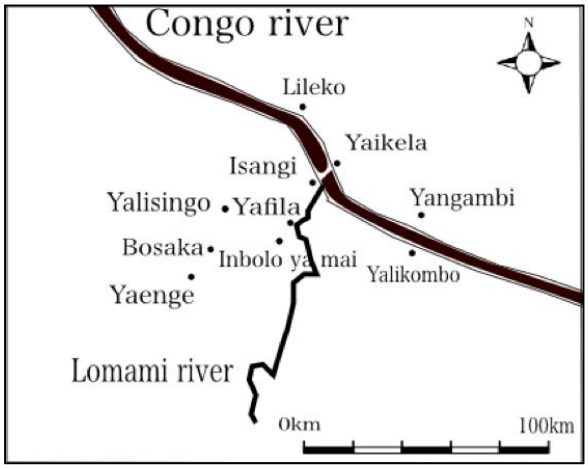

図 1. 定期市の分布

3.3. 市リングの広がり

現地の交易民は市日の異なる定期市を巡回することで需要の不足を補い生計を営んでいる。石原 (1987) はこうした市場の存在形態を市リングと呼んだ。交易商人への聞取りの結果、調査地域には少なくとも 4 つの市リングが存在することが明らかになった (図 2)。それぞれの市リングは規模や機能に違いがあり概ね二つの階層性がある。A・B グループの市場は河川沿岸に設けられており、丸木舟による商品の大量輸送が可能である。交易商人は工業製品の価格が最も安いキサンガニにて商品を仕入れ定期市を巡回する。その一方で、C・D グループは内陸部に位置するため輸送手段はオートバイや自転車に限られており、商人の多くはヤフィラで仕入れを行っている。ヤフィラの市場が発展することで水上輸送のおよばない内陸部への商品流通が促されていることが分かる。

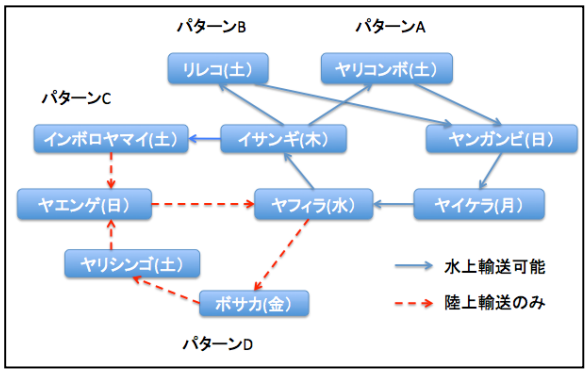

図 2. 調査地域内の市リング

4. まとめ

紛争により交通インフラが破壊されたためそれまで地域を支えていたトラック流通は断絶した。交易民は伝統的な丸木舟を用いることでこうした事態に対処している。今日の定期市の活況や市リングの広がりは河川交易による商品の長距離大量輸送に支えられており、商人は「河の道」を利用することで縮小した流通網を再編・拡大する。交易民はその地域に根ざした在来の知識を活用することで地域の再建に貢献しているといえる。もちろん内陸部農村の社会的経済的復興には道路・橋などのインフラの復旧が必要であることは言うまでもない。し

かし、河川交易は周辺地域の経済活動を促進しており、地域の内発的発展の契機となりうるものである。流通網の再編が地域にどのような影響を与えうるのだろうか。こうした課題に答えるため、今後は紛争以前の流通ネットワークに関する調査を継続する。流通という視点から地域経済を捉えなおし、紛争後の社会を再建する道筋について更なる検討を加えていきたい。

参考文献

石原潤. 1987.『定期市の研究』名古屋大学出版会.

木村大治、安岡宏和、古市剛史. 2010.「コンゴ民主共和国・ワンバにおけるタンパク質獲得活動の変遷」木村大治・北西功一 (編)『森棲みの生態誌－アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』京都大学学術出版会. pp. 333–351.

武内進一. 1998.「コンゴ民主共和国-経済危機の歴史的構造」末原達郎 (編)『アフリカ経済』世界思想社. pp.131–149.

UNDP (United Nations Development Programme). 2013. *Human Development Report 2013: The rise of the South: Human Progress in a Diverse World*. (http://hdr.undp.org/sites/default/files/reports/14/hdr2013_en_complete.pdf)

【会計報告】

2013 年度生態人類学会費決算

収入項目		支出項目	
2012 年度より繰越	879,158	第 19 回大会補助	64,080
利息	78	振込手数料	300
計	879,236		64,380
2014 年度への繰越			814,856

第 19 回（2013 年度）生態人類学会研究大会決算

収入項目		支出項目	
大会参加費	1,132,000	大会会場費、宿泊費	1,107,700
キャンセル料	12,000	二次会・茶菓	96,460
学会費から補助	64,080	郵送	720
		下見交通費	3,200
	1,208,080		1,208,080

会計監査：須田一弘、佐藤靖明

お詫びと訂正

ニュースレター第 19 号および 2013 年度研究大会総会においてすでにご報告しております 2012 年度の会計につきまして、下記の通り金額に誤りがございました。謹んでお詫び申し上げますとともに訂正をさせていただきます。すでに 2012 年度会計監査による承認は得ておりますが、今年度大会の総会において再度ご報告いたします。なにとぞご了解のほどお願い申し上げます。

（2012 年度事務局・内藤直樹）

訂正箇所

・収入項目　利息：（誤）108 円→（正）30 円　　計：（誤）883166 円 →（正）883088 円

・2013 年度への繰越：（誤）879,236 円→（正）879,158 円

2012 年度生態人類学会費決算（修正版）

収入項目		支出項目	
2012 年度より繰越	879,638	ホームページレンタル料	3,930
利息	30		
第 18 回研究大会残余	3,420		
計	883,088		3,930
2013 年度への繰越			879,158

会計監査：今村薫、島田将喜

【インフォメーション】

第 19 回研究大会優秀発表賞について

第 19 回研究大会静岡事務局では、参加者同士の意見交換を活発にするとともに発表者への建設的なフィードバックを促進すること、生態人類学研究の「おもしろさ」について改めて考える契機とすることを目的に、「生態人類学会第 19 回研究大会優秀発表賞」を試行的に設けました。選考方法として、1. 口頭発表とポスター発表の全発表者を対象とする（ただし、発表者からの辞退を認める）、2. すべての参加者が投票する（ただし、すべての発表を聴いた／見たことを条件とする）、3. 細かな基準は設けず「おもしろかったかどうか」によって評価する、という 3 点を定めて実施した結果、**佐久間寛氏（東京外国語大）**の**「カバを漁（いさ）る人びと―ニジェール川の漁業民ソルコの生業と呪力をめぐる予備的報告」**が選ばれました。おめでとうございます。参加者からは、「生態人類学会ならではの醍醐味あふれる発表」などと高く評価されました。一方で、「川に由来するエピソードをもっと聞きたかった」、「生業と食性の関係」や「カバの恐ろしさ」などを解明してほしいなど、さらなる注文が多くあがったのも、魅力ある発表で発展に期待を抱かせるものだったからだと思います。

各発表に対して寄せられたコメントは、すべて発表者にお送りいたしました。発表者からは、「反応が聞けて嬉しかった」、「励みになった」、「今後の研究の参考になった」などのご意見をいただきました。活発で濃密な意見交換がなされるという本学会の強みが発揮されるとともに、生態人類学の魅力について改めて考える契機になったのであれば幸いです。

新入会員情報

2013 年度に新たに本学会に入会されたのは、以下の方々です。

梅屋 潔（神戸大学）、高村 伸吾（京都大学）、廣瀬 崇幹（京都大学）、福澤 陽（筑波大学）、松岡 佐知（京都大学）、宮木 和（京都大学）、盛 恵理子（帝京科学大学）（敬称略）

2014 年度の運営

2014 年度の役員には、以下の方々が選出されています（敬称略）。

会長：河辺俊雄（高崎経済大学）

理事：安髙雄治（関西学院大学）、梅崎昌裕（東京大学）、小谷真吾（千葉大学）、木村大治（京都大学）、小松かおり（静岡大学）、椎野若菜（東京外国語大学）、孫暁剛（京都大学）、中村美知夫（京都大学）、古澤拓郎（京都大学）、松浦直毅（静岡県立大学）、丸山淳子（津田塾大学）

連絡先更新に関するご協力のお願い

生態人類学会では、大会開催案内等の連絡をメールでおこなっていますが、近年、登録されているメールアドレスの変更などで不着のものが増えております。つきましては会員の皆様には以下の 2 点をお願い致します。

1. 学会に登録しているメールアドレスに変更があった場合は、速やかに当該年度の事務局にご連絡をお願いいたします。理事会ですべての方のアドレスの変更をフォローすることは現実的に難しいので、学会からの連絡が欲しい方は、お忘れなくお願いいたします。
2. 学会からの退会を希望され、今後学会からのメールを受け取りたくない方も、お手数ですがその旨事務局までご連絡下さい。

生態人類学会・東京事務局
梅崎 昌裕
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
FAX：03-5841-3395（代表）
Mail：ecoanth2014@gmail.com

第 20 回研究大会のお知らせ

第 20 回研究大会は、東京大学の担当でおこなわれます。開催情報については、追ってご連絡いたします。

【編集後記】

ニュースレターNo. 20 を無事に発行することができました。ご寄稿くださった発表者の皆様に心より感謝申し上げます。発行時期がいつもとちがうと感じられた方もいらっしゃるかと思います。前々回の総会で承認されたように、前年度の大会事務局がそのあとのニュースレターの編集を担当することになっており、大会終了後、なるべく早い時期に発行することを目指しております。発表者の皆様には、速やかに発表内容をまとめることで、今後のさらなる研究の進展に生かしていただければと思います。

静岡事務局の役割は、これで終わりとなります。至らぬ点も多々あったかと思いますが、研究大会において、生態人類学のおもしろさがあふれた発表と議論の場をご用意できたことを嬉しく思っております。ご参加・ご協力いただき、誠にありがとうございました。

（松浦 直毅）